種類も多い。無人形の如き藝術味の豐かな玩具が、一體他の何れの國にあるか、またあつてあらうか？

かゝる母親を有し、かゝる玩具を持つわが國の子供は、確かに家庭に於ては幸福である。これを比較的父母から閑却せられる歐米の子供から見れば、この上もなく惠まれた者であり、幸福な存在である。

しかしながら、子供の生活は、家庭内のみに限定せられてゐるものではない。家庭に於ける生活がその大部分であることは無論だが、家庭外の生活も何割かに當る重要なものである。されば家庭外の生活が、家庭に於けるそれと同等に、又、同等以上に惠まれたものでない以上、彼等の生活は眞に幸福なものとは云ひ得ないわけである。

果して、この「家庭の寧馨兒」は、家庭外に於ても「惠まれた者」であり「幸福な存在で」あるであらうか。しばらく、歐米の子供の家庭外に於ける生活の實情を研究して、わが國の子供のそれと比較して見やう。

子供の遊場

歐米の公園には——と云つて特殊の公園は別だが、都會などの通常の公園には必ず子供の遊場が設けてある。其處には何れも實に至れり盡せりの設備があつて幼い子供達が何の心配もなく、自由に遊べるやうになつてゐる。殊にロンドン、ベルリン、パリー等の大都會では、普通の公園に「遊び場」が作つてあるばかりではなく、町の要處要處に殆んど子供のために設けられたと云つていゝ小公園がしつらへてある。それらの小公園には、チャンと周圍に柵が圍らしてあつて、各入口には、危險なものを持ち込まぬやうに番人が附いてゐる。そして、園内は一面の芝生で、ちよつとした花壇と四阿屋式の休憩所と幾つかのベンチとがあるだけ、といふのが普通だから、其處で遊ぶ子供達は、先づ絶對的に安全だと云つていゝ。

子供の遊場としては、安全といふことが最も大切な要件だから、これなどは實に親切な設備と云はなければならない。無暗矢鱈とブランコだの遊動圓木だのを竝べ立てゝ、狹い場所を一層狹く、ウッカリ歩くこともできなくして置くよりは、餘程、頭のいゝやり方でもある。

『子供の遊場』として一寸面白いのは、ベルリンの町に多い『砂遊び場』である。チーヤガルデ

〔第二十九圖〕　砂遊びをする子供

ンのそれなどは、長さ約五十間、幅約三十間もある廣いもので、一面に清淨な細砂が敷きつめてある。が、その深さは、約一間半？くらゐもあるらしい。だから子供達が如何に深く掘つても、底土の出て來る恐れはない。そして、其處には、ところ〳〵に厚い木板で造つた低い臺が設けてある。子供等が飛び上つたり、砂を盛つたりするのに自由に利用せしめるためである。なほ場内には、遊戯の邪魔にならぬ程度に、日光を適當に遮るための樹木が殘してある。

また場の周圍には低い、丈夫なベンチが澤山設けてあつて、砂遊びに厭きた子供達

が自由に憩すめるやうになつてゐる。

この『砂遊び場』に來る子供は、大抵三四歳から十一二歳までゝ、幼少な者は、保護者――女中や親達につれられて來て、みな靴も上衣もぬつて、思ふ存分砂まみれになつて遊ぶのであるが多くは、小型のバケツだのシャブルだのといつた遊び道具を携へて山を造つたり、穴を掘つたり、或はこれを飛び越えたり、實に天眞爛漫な遊びをやつてゐる。土に親む機會の少い都會の子供にとつては、恐らくこれくらゐ好い遊びはないだらう。東京や大阪の子供は、こんな遊びは嫌ひであらうか？また親達は子供ここもにゆつくり遊べる公園を求めてはゐないだらうか。不幸にして自分は東京にも、大阪にも、子供の安心して遊べる公園を見出さない。

子供と遊戯

遊戯は子供の純眞な生活そのものである。子供の生活から遊戯を取り去つたならば、宛も泳ぐことを差し止められた魚のやうなものである。從つてそれは、子供の心身に極めて重大な結果を及ぼす。さりながら是非善惡の判斷の幼稚な子供時代には、苟くも自己に滿足を與ふる遊戯ならば、どんな遊戯でもやるものであるから保護監督の責にある者は、その種類、またその遊び方について深甚の考慮を拂ふ義務があ

る。……といふところから、歐米では、近來殊に子供の遊戯の指導に關する研究が盛んである。

ニュー・ヨルクでは、『遊戯運動研究會』といつたやうな大仕掛の文化的事業が、數年前から行はれてゐて、遊戯、運動に關する萬般の事柄を研究し、月刊雜誌やパンフレットを發行して、極力子供や青年の遊戯、運動を指導してゐる。市井の子供の中には、隨分ひどい惡戯——例へば賭博、ホールド・アップや盜賊の眞似といつたやうなことに耽る者も少くはないので、この會ではまづ運動場の開放や、新運動場の開設を促し、遊戯運動の指導の必要なことを一般に知らしめてゐる。その結果、かどうが知らないが、とにかく近來、アメリカの諸市は競つて遊戯運動の指導教師並びに監督者を雇聘して、『小市民』の教導に盡しつゝある。

ロンドンでも、『國民保健會』なるが中心となつて、盛んにパンフレットを發行し、また『子供デー』や『子供ウヰーク』を開催して、その幸福增進を計つてゐる。

それで子供の遊戯がどういふ方法、組織によつて指導されてゐるかといふと、それには、いろいろの試みがあるが、最も組織的なものは、所謂『遊戯學校』である。この試みはアメリカが本場であるが、イギリスでも最近可なり盛んに行はれてゐる。それは、大體に於て、五六十人の子供を一組として、これに一人乃至三人くらいの監督者が附き、種々の運動競技と、手工、御話、音樂、劇、といふやうなものとを適宜に加減してやらせる。そして、その間に子供の社會的本能に基いて、相互扶助や、謙讓の精神を養成する。——卽ち子供の心身兩方面、智育、德育、體育等の各方面に亙つて、遊戯中心の教育をやるといふ全く新らしい試みである。が、成績は極めて良好だとのことである。

學校

今度は學校のことを考へて見る。現今のわが國の子供は、課程が法外に多いうへ、試驗で責められるので、可哀相なほど苦しんでゐる。歐米——といつても他の國のことはよく知らないが、イギリスやアメリカの子供は、教室で物を習ふよりもそとへ連れていつて貰つて先生と遊ぶ時間の方が多いやうである。試驗などはまるで眼中にないやうに見受けられる。しかも、それで彼等、歐米の兒童の知識程度は決して我兒童のそれに劣つてゐないのだから不思議である。

また、わが國の中學校、女學校等は、入學希望者が莫迦に多くて、收容能力が極めて少い。その結果、入學試驗は入學させるための試驗だか、入學を拒絶するための試驗だか判らないといつた

奇觀を呈してゐる。金がなくて學校へ行けないのは、固より悲慘な話である。これは我國も歐米も共通の病弊である。しかし、無理算段をして、漸く學資を調へても、學校へ行けないといふのは、わが國に於てのみ見る現象である。されば、わが國の子供は試驗のために、最も樂しかるべき少年時代を蹂躪し盡されて、弱い子供は死んでしまふ。強い子供すら、活潤暢達の素質を奪はれて、遂に焦燥狡猾の人間に化し去るのである。

重ねていふ、わが國の子供は家庭内の寵兒である。が、一歩外へ出るとあらゆるものが彼等に酷であつて、あくまで彼等を攻め虐まずんば已まざるかの如き觀がある。歐米の子供は、家庭内では左ほど大切にせられないが、彼等を歡迎し愛撫し善導する公共を持つてゐる。果して、日本は子供の樂國であらうか。日本の子供は眞に幸福であらうか。

女尊男卑の弊風

恐ろしく驕い女の鼻息

ヨーロッパに遊んで、先づ度肝を抜かれるのは、恐ろしく女の鼻息の荒いことだ。公開の場所では、女は恰も女王のやうな態度で、男を眼下に見下してゐる。しかも、男といふ男は、熊さんでも、七兵衛でも、先生でも、閣下でも、すべてみなまるで腫物にでもさはるやうに、戰々兢々として、只管その御機嫌を損ぜぬやうにと努力してゐるのだから。未だ嘗つてかゝる光景を拜觀する悲運に會はなかつた者は全くビックリする。

誰やら『歐米諸國で最も厄介なものゝ一つは女である』と、慨嘆してゐたが、實際、土地馴れぬ者には堪らなく厄介に思はれる。何しろ、重病人の枕もとにでもゐるやうに、絶えず周到な注意を拂つてゐなければ、忽ち『紳士らしくない男』にされ、『無教育な奴』にされ下手にマゴつくと飛んでもない目にあはされるのだから、氣骨の折れることは一通りでない。

エレヴエイターに乘る。男子たる者は、先づ第一に同乘者中に御婦人がゐらせらゝかどうかを見定める必要がある。『婦人と同乘した場合には、脱帽すべきもの』となつてゐるからだ。これは宛も不文律のやうなもので、何人と雖も違反することを許されない。對手が自分の知人であらう

ご見ず知らずの他人であらうこと、こにかく女でさへあれば同乘の光榮に浴した男子は早速帽子を取つて敬意を表する義務があるのだ。だから、そんなこころで、俺は日本人だ、そんな變手古な禮式は存ぜぬよ、なぞと、下手に出やうものなら大變だ。忽ち淑女方は、顏面神經を强ばらせる。小うるさい婆々でもゐやうものなら、ごんな暴言を浴せられるかわからない。たとへ淑女方がそれを看過しても、ガラントリーを誇る諸君が默つてゐない。己れの優越を示すはこの時だとばかり、厚釜敷くもシャシャリ出る。勢ひ、事は面倒となる。

一事が萬事で、すべてさういふ風。好きなタバコも女のゐるこころでは、その許可を得なければ口に出來ず、うつかり或種の言葉――主として野卑、猥褻に亙る言葉、ドイツあたりでは、それが法令によつて指定されてゐる――を使へば、忽ち『婦人を侮辱した』といふので問題となる。無論こんなことで告訴でもされやうなものなら男は賣味噌だ。先づ十中の八九まで勝味はない。だから、公開の場所で、女を叱つたり罵つたりするのは、ヨーロッパでは無頼の徒輩に限られてゐる。多少なりとも社會的の地位名譽を持つてゐる者には、トテモ恐ろしくてできないのだ。それだけに歐米の男――殊に『夫』はみな不滿を感じてゐる。何とかしてこの弊風を改めたいとは何人も希ふこころである。かういふ話がある。

乃木將軍が東鄕元帥とともにヨーロッパを巡遊された時のことだ。オーストラリヤの主府ウォーンに於て盛大な歡迎會が催された。當時のオーストラリヤは今日のやうな尾羽打ち枯した國ではなく、精鋭な大軍團を擁し、加ふるに旭日昇天の勢にあるドイツと盟約を結んで、國内には軍國的氣分が充ちあふれてゐた。隨つてその歡迎會は熱誠をこめたものであつたが、その時、主催者側の一紳士が將軍に向つて云つた。

『三十時間もの汽車旅行では、さぞ御疲勞れになつたことで御座いませう』すると、將軍は莞爾として。

『いや、私は軍人ですから、一日や二日の旅では別に疲勞れも致しません。が、これから、この大勢の御婦人方の御對手をしたら疲勞れてしまひ相に思はれます』と、日本語で答へた。サア御供をしてゐた通譯官は困つた。何しろ將軍はドイツ語がわかる。話すことはムカしいにしても、聞くには不自由を感じない。言葉通りに譯さなければ、すぐ判つてしまふ。といつて、その通り譯したら、ヨーロッパの女のことだ、どんなことになるかわからない、といふのですつかり當惑

してしまつたが、何時までボンヤリしてもゐられないので、こう〳〵思ひ切つて將軍の言葉通り通譯した。

男は無論一人殘らず拍手喝采して喜んだ。ところが面白いことに、さぞ怒るだらうと思はれた婦人連も餘り思ひ切つたことをヅバ〳〵と云はれたので、怒るどころか、スツカリその意氣に感じちまつてパチパチ……この話を傳へ聞いた人達はみな『流石は日本軍人だ』と大いに感心し稱讃したといふことだ。面白いではないか。これによつても如何に歐米の男が、その云はんと欲するところを云ひ得ないで苦しんでゐるかがわかる。

裁判にまで女尊男卑

女尊男卑の弊風は、裁判所にまで侵入し、近來歐米では、女と爭ふと餘程有利な條件が具備してゐない限り男の方が敗訴となる。近著のデイリー・ミラー（ロンドンの繪入新聞）を見ると、かういふ珍妙な判決がのつてゐる。

ロンドンから五十哩ばかり離れた、イギリス有數の避暑地ブライトンで、ダグラス・バーカーといふ男が、自分の女房に無理にキツスしたといふ理由で法廷に立たせられた。そして、辯論の結果は『夫は妻に對して、キツスを强要するの權利なし』といふ理由で、五ポンドの罰金に處せられた。といふのである。

他人ならいざ知らず、自分の妻君にタツタ一度キツスしたといふので五十圓の罰金はいさゝか高いやうに思はれる。こんなことは、わが國では夢想もできないが、一定の成文法といふものゝない、たゞ判決例と陪審員の意見とによつて裁斷して行くイギリスの裁判では、屢々起ることであるる。キツス一ツで罰金刑を喰ふくらゐだから、もし、打つたり、泣かせたりしてゐるところでもうるさい奴に見られたら大變である。打たれた本人が勸辨しても、端の者がたゞでは濟まさない。何も他人のことにワザ〳〵飛び出さなくてもよささうなものだとわれ〳〵には思はれるが、そこがそれ、紅毛人の淺ましさだ。矢張、我輩は紳士だぞよ、賴もしい男だぞよ、といふこころを見せたいのだ。何も人道だのクリスチャニティーだのといふ高尚なものにかゝはりのある信念がそうさせるわけではないのだから、對手が惡いと思つたら、賴まれたつて出はしない。居酒屋で一合六ペンスの安麥酒か何かをアホりつけて、折角心配して迎へに來た嚊を、『ゴッデーム！』とばかり突き飛ばす豪傑なんかには、巡査だつて手出しを差控える。

閑話休題、事が表向きとなれば、どんな場合でも女は男よりも有利の地位に立つ。普通の係爭

でもさうだが、殊に離婚訴訟などには、その弊が甚しい。一體、西洋では、宗教上、離婚は非常に難かしい。――現今でこそ何れの國に於ても正當の理由があれば、離婚できるが、以前にはローマ舊教の教會に屬する者は絶對的に離婚を許されなかつた――即ち、現今、歐米の大多數の國では、夫婦の何れかが、不義、殘酷な待遇（肉體的又は精神的）又は音信不通（二年間以上）をした場合以外には、離婚は許されない。だが、實際は、夫が離婚を欲する場合にこそ實に困難だが、妻がそれを求める場合には、少しも難かしくはないのだ。第一、不義や音信不通はともかく殘酷な待遇を與へられたナンテことを、男子たるものが申し立てられる筈がないではないか。

また、女は正當の理由で離婚されゝば、男から扶助料を取ることができる。しかもそれがなまやさしい金ではないのだ。正確なことは知らないが、まづ通例、その別れた夫の收入の三割乃至五割くらゐ貰へるものらしい。つまり、月に二百圓の收入のある男からは少くも六十圓は取れるのだ。無論毎月毎月死ぬまでだ。だから西洋には手切金や扶助料をせしめるために一時的の結婚をする女が隨分多い。映畫界の巨人チャーリー・チャップリンが、妻のリタ・グレイから、手切金を五百萬ドル要求されて青くなつてゐる。それでびつくりしたり喜んだりしてゐる奴が僕の知つてゐる人間の中にも隨分あるが、そんなことは、西洋ではチットも珍しいことではない。チャップリン君のやうな人氣者でないから、世人に知られないだけのことで、五十萬や百萬の手切金を取られた者はザラにあるのだ。わが國のやうに女に酷なのも無論感心できないが、かう極端になつては一層困りものだ。

厄介な運動

精神を失つた動物愛護

西洋人の行爲には突飛なことが隨分多いが、所謂「動物愛護運動」などは、その代表的なもの〻一つだらう。

その昔、わが國にも極端に動物を尊敬して、「犬公方」の稱號を得た殿樣があつたが、現在の西洋人は恰度その殿樣同樣、極端に動物を尊敬する。苟くも動物を虐待するなどいふことは、萬物の靈長たる人類の體面に關するといふ意氣込みで、イギリスでも、アメリカでも、ドイツでも、フランスでも、とにかく文明國と自稱自負するほどの國では、

『動物愛護聯盟』だの『動物虐待防止協會』だのと恐ろしく堂々とした名前の組合を造つて、盛んに宣傳をやつてゐる。

殊にイギリスは紳士の國である。何事でもお體裁の好いことは率先してやらなければ氣が濟まないといふ厄介な人種の住む國だ。やかましいことおびたゞしい『動物虐待防止協會』は、大勢の監視人を國内到るところに派遣してゐる。巡査は無論彼等の援助者だ。ウッカリ犬でも猫でもいぢめたらすぐ見附る。罰金で濟むのはまだいゝ方、監視人や巡査の口次第では、體刑も容赦なく科せられる。ロンドンへ行く日本人は、餘程動物の好きな人でない以上、キット一度や二度は失敗する。まさか警察へ引張られるほどの、ヒドイことをやる者はないけれども、何しろ危險な野良犬のゾロ〳〵ゐる國で育つたのだから、大抵の人が犬を見ると棒(ステッキ)を振る。ところがロンドンには幸か不幸か野良犬といふものが一匹もゐない。

何でも三四十年前に夥しい狂犬ができたので、イギリス全國に亙つて徹底的の野犬驅除を施行した。そして、それ以來、イギリス國内へ連れ込む犬には、嚴密な檢査をやつて、素性が怪しいとか毛色や體格が惡いとかいふ場合には、ビシ〳〵送り返へす、或ひは、殺すといふ實に峻嚴な

〔第三十圖〕犬の墓

取締りをして來た。それで現今ではロンドンのみならず國内の何處にも野犬といふものが殆んどゐないのだとのことだが、とにかく野犬がゐない以上、犬といふ犬にはみなそれ〴〵飼主があるわけだ。そいつに棒を振るのだから穩かならぬことになる。だが失敗をやるのは日本人ばかりではない。土地の人間でも隨分下らぬことでヒドイ目にあふ。何しろ、件の防止協會の役員などは、たゞ口で叱るのでも虐待だと考へるくらゐ神經過敏なのだから厄介だ。最近のディリー・ミラーにこんな話がのつてゐる。

驢馬を蹴つて罰金

或日のこと、キャムデン・タウンに住むゾエ・マックといふ八百屋が、驢馬に車を曳かせてトテナム・コート・ロードを通り掛つた。ところが、どうしたのかその驢馬公が、ヂッと立止つたまゝ動かなくなつてしまつたので、ゾエの奴大いに奮慨して、よせばいゝのに驢馬公の尻をいやといふほど蹴飛ばした。恰度、そこへ來懸つたのが、件の役員だ。早速巡査を連れて來た。『一寸本署へ來い』

何しろ防止協會の役員が證人なのだから助からない。一も二もなく有罪ときまつたが、その時裁判長が申し渡した宣告の文句が面白い。――ミラーの編輯子は、この文句を讀ませやうと思つて紙面を割愛したのだらう――曰く、

『もし、汝が汝よりも膂力優れた者にかくの如き行爲をなしたのであつたら、汝は今頃は病院車（アンバランス）に乘つてゐたであらう。また、もし汝より力弱き者になしたのであつたら、汝はきつと告訴せられてゐたであらう。驢馬は汝よりも力弱く、且つ告訴すべき場所を持たない。幸にして、ミストル・ガードナーが御覽になつたればこそ、汝はその罪惡の代償を拂ひ、ゴッドのお赦しを受けることができるのである。感謝すべきである。罰金二ポンド又は一週間の禁錮に處す』『サンキュ

〔第三十一圖〕婦人猫を愛撫する圖

『――と云つたかどうか、それは知らない。

烏屋もできない

も一つ、場所は同じくロンドン、名判官と云はれてゐる法官マーシャル氏の法廷に一人の男が呼び出された。徐に大なる閻魔帳を繰りひろげた名判官眼鏡越しにその男を見て、

『被告の姓名は……』

『ディック・マトビイと申します』

『住所は』

『イーストハム……』

「被告はその販賣する鳥類に對し殘忍な行爲をなしたこゝであるがドウぢや」

「滅相な、あつしは、これでも鳥屋仲間ぢやあ、佛つて云はれてゐるくらい慈悲深い方で……」

そこで告發人、動物虐待防止協會員ジェイムズ・パーカーが立ち上つた。

「エー申し上げます。私が昨日イーストハムへ所用で參りますと、この男の店では、小さな籠に身動きもできないほど澤山の鳥を入れてゐるので鳥はまるで重りあつてキュー〳〵云つてゐるのが眼につきました。誠に殘酷なことをする、人類の敵、大英國の恥辱であると存じまして、一應この男に注意致しましたところが、閣下、如何でございませう。この男は「ウム、これはかうすれば樂になる」と申しまして、その中の一羽を籠からつかみ出し、私の眼の前で首をキューッと……アー、今思ひ出してもゾッと致します。實に申しやうもない殘忍なことをする男でございます……」

「ごうぢや被告、それに相違ないか」

「イエそんなべラボーなことはございません。全く嘘で……ナアニ、あの籠なんざアゆつくりしたものでさア。あれにはやつと一ダースきり入つちやあるないので……大抵あの籠には二ダースは入れますよ。それにお客樣に差上げる前にしめるのは、當り前のことぢやあございませんか……」

「ウム、辯明一應尤ものやうにも聞えるが、ごうも少し手荒すぎるやうに思はれる……罰金三ポンド、裁判費用三ギニー、合計六ポンド三シルリング納めて引き下れ」

ディックの奴は泣ッ面をして、小聲に「ヘン馬鹿にしてやがら、文明國ちやあ、うつかり鳥屋商賣もできやしねエ」

支那の芝居

各派の歴史と現情

現今の支那劇には舊劇と新劇とある。然して舊劇には、また崑曲、皮黄、秦腔等の諸派があり、新劇には、新戲、新排戲の別がある。

崑曲は蘇崑生といふ人が創始したものだとも云ひ、また崑山の魏良輔といふ人が、戈陽腔、海鹽腔を土臺として編み出したものだともいふが、何れにしてもこ

れが始めて北京の劇壇へ現はれたのは明代であつた。然して、爾後前清嘉慶の頃まで盛行し、一時は崑曲に非ずんば劇に非ずとまで稱せられたのであつたが、その後皮黄と秦腔とが相繼いで起るに及んで、俄かに衰微してしまひ、久しい間世間に遠かつてゐた。が、數年前から新進の音樂家や文學者の間に顧みらるるやうになり、現在ではこれが研究熱が中々盛んである。

支那人に云はせると、『崑曲は、中國の戲曲中最も價値のあるもので、文學竝びに美術上の趣味が豐富なばかりでなく、その舞踊は極めて優美高尚で、雍容揖讓の趣がある』のださうである。果して最有價値のものであるかどうかは吾々門外漢にはわからないが、彼の有名な梅蘭芳、歐陽予倩氏等の牛耳つてゐる新排戲には、かなり崑曲味が加味されてゐる。

崑曲に代つて出た皮黄は、即ち現今の代表的支那劇で、俗に京調と稱せらるゝものである。然して、これには二黄、西皮の二派があるが、何れも湖北者の片田舎から起つたもので兩者の相違は要するに西皮の方が二黄よりも幾分調子が高いといふに過ぎない。何しろ皮黄はさういふ田舎生れの代物故、始めて北京へ現はれた當時は、まことに垢抜けのしないもので、人氣もサツパリなかつたが、暫時名優によつて揉まれてゐる間に、極めて屈折の多い、むしろ悪達者と思はるゝ

ほどの敏活な藝となつて、非常な人氣を得、遂に舊い歴史を有する崑曲を壓倒して、一躍劇壇の寵兒となつたのである。

併しもと〳〵俗受けを眼目としたものであるから、脚本でも、舞臺の構成法でも、崑曲のそれとは比較にならないほど低級で、いはばアメリカの映畫と同樣、眞の好劇家を滿足させる力はない。秦腔は俗に梆子調とも稱し、その起りは遠く明代にあつて、彼の有名な李自成などが之を愛したところから、一時七國調などと悪口されたものである。秦腔の聲調調句は皮黄のそれよりも一層低級で、北京の劇壇では以前から餘り重視されなかつたらしいが、現在も主として女優によつて演ぜられてゐる。尤もこれは、この劇が、特に幅の狹い高音調の聲を必要とするからでもあるが、矢張男優連はいくらか之を輕蔑して演ずるのを快しとしないらしい。

在來の支那劇には以上三種の外に、も一つ高腔と稱するものがあるが、これは現今では殆んど演ぜられないから此處にはその存在を記すだけに止めて置く。

以上は舊戲諸派の極く簡單な歴史であるが、次に新戲の現狀に就いて一言して置かう。

支那の新劇には先にも記したやうに、新戲、新戲排の二種がある。新戲といふのは、いはば純

粋の新劇で、その演出法は我國の新劇のそれと略々同一のものであるが、如何せん未だ生れてから二三十年しかならず、且つこれに携つてゐる俳優には餘り優れた人がないので、その勢力は極めて微々たるものである。要するに未だ海のものとも山のものともきまらない。從つて特に記述すべきこともない。

新排戯といふのは、新戯にいくらか舊戯――殊に崑曲の藝風を加味した、いはゞ合の子で、現在その最も聲名のあるのは、先年來朝した梅蘭芳一派の歌舞劇である。

支那劇の樂器

本來支那劇は一種の歌劇であるから、脚本よりも舞臺裝置よりも、唱（チャン）と樂とに重きを置く。が、用ひる樂器は各派によつてそれ〴〵多少の差異がある。

先づ崑曲は笛を主とし、綽板を以て柏子を取る。秦腔は笛の調子に合せた特別の胡弓を主とし、梆子（竹筒に若干の小孔を穿ちたるもの）を以て柏子を取る。京調は胡弓を主とし、鼓板（小鼓と柏子木）を以て柏子を取る。然して、これは鼓板が常に先導となつて胡弓を導き、胡弓が先導となつて役者の郎啄を導いてゐる。無論この三つはピタリと合つてゐなければならないのであるけれども、理窟は前述の通りである。であるから、若し鼓板に一

〔第三十二圖〕　梅蘭芳

すでも錯誤があつたら大變だ。これに導かれる胡弓は忽ち面喰ふ。胡弓がマゴツケば、それに導かれる役者は唄へなくなつてしまふ。そこで鼓者は何れも斯道に精通熟達した人で、樂師の最上位に位し、鼓老と尊稱されて非常な權威を持つてゐる。

樂器は以上の外に、月琴、三絃、海笛、鎖吶などを用ふるが、それは或る一定の場合にのみ限られてゐる。例へば、月琴三絃は主として花旦（女形）の唱、反調慢板を唄ふ時に用ひられ、鎖吶、海笛等は吹牌（酒を飲む時の唱）の時使はれるといつたアンバイである。尤も支那劇には泰西の歌劇と同樣に、音樂器ばかり聞かせる場面もあつて、その時には胡弓も大鼓も月琴も三絃も大車輪になつて馬力をかけ、大いに見物を呻らせる。之等の囃方を一括して後場と呼ぶ。但し支那劇には地方はない。

俳優の役割

俳優の役割は大別すると、生（立役）、旦（女形）、淨（敵役）、丑（道化役）、末（端役）の五種となる。然して各役には、またそれ〳〵細かい區別がある。即ち生には、老生、紅生、武生、小生、旦には、花旦、青衣、閨門旦、武旦、刀馬旦、老旦、彩旦、淨には大花臉、架子淨、武花臉、丑には文丑、武丑とあるが、これはその役の特色を表はす細別で、例へば、老生といへば必ず長い鬚を附けて忠臣、宰相或ひは學者などに扮し、唱專門で立廻りは絶對にやらない。また武生といふ役は、何でも華やかな立廻り、劍や槍を振りまわすやうなことばかりをやる。花旦は所謂立女形で常に妖艶な女性に扮し、唱が專門。武旦は文字の示す通り女武者の役。といつたわけである。

〔第三十三圖〕支那の女優（左端が十三旦）

併し、通常はそれほど嚴格な區別は事實上立てゝゐないらしい。

或支那人の話によると、細別のあるのは生と旦とだけで、その他の役は、餘り重要でない、いはば端役であるから、別に判然たる區別はなく、大花臉でも武花臉でも或は架子淨でも、すべて淨に屬するものはみな一樣に淨と呼び、文丑でも武丑でも等しく單に丑と稱してゐるらしい。

さて前記の諸役の中で最も重要なものは老生、花旦、及び武生の三つであるが、そのうち武生は先にも記したやうに立廻り專門であるから別として、老生と花旦とは唄ふのが專門であるから誰にでもやれるといふわけには行かない。如何に骨折つて稽古したところで、聲が悪くては到底勤まらない。殊に花旦の唄ふ歌は極めて高音調のものが多いので、どうしても大人にはやり難い卽ち花旦のやうな重要な役には年少のものが多い所以である。

舞臺裝置

支那劇を初めて見る人は誰でもみなその舞臺の餘りに殺風景なのにビックリするが、實際支那劇の舞臺くらゐ簡單な舞臺はない。何しろ幕はなし、書割も殆んどないのだから、先づ一見お神樂の舞臺のやうである。然らば如何にして場面の有樣を現し觀せるかといふと、極めて簡素な椅子や高机を用ふる外は、悉く手眞似足眞似で表現する。例へば——

一　鞭を手に持てば馬に乘つた心持を現す。
一　鞭を人に渡して、足をトントンと踏み鳴せば下馬したといふしるし。
一　門を取外づし、又は篏める手眞似身振りをすれば、門扉の開閉を現はす。
一　椅子と高机子を並べて、その上に登れば、山や岡の上に登つた心持。
一　茶色の鉢卷をすれば、病氣になつたといふしるし。
一　櫂を持つた人間が役者の後に從つてゐれば、舟に乘つてゐるところを現す。
一　頭から赤い布を覆ひ掛けたら、死んだといふしるし。——尤もこの赤い布は、結婚の場で新婦が用ひることもある。が、その場合には必ず樂屋から被つて出て來るから間違ひは起らない。

先づかういつたやうなものである。だからその約束を心得てゐないと、何が何だかサッパリわけが判らなくて、てんで面白味もなんにもない。この點に於て一寸わが國の能樂を思はせるものがある。

演技の型

演技の型は、各派によつてそれ〴〵特長があるが、何と云つても優雅なのは崑劇のそれである。例へば浣沙記の西子の舞の如きは、確かに藝術上の逸品と稱し得る。

然るに皮黄の方は俳優が舞臺に登場する時から、どうかするとチョコチョコ小刻みな早足で出て來たり、自分の諧ひものを唄ひ終れば、我が事終れりといふ樣子で、後見人から湯を貰つて飲んだり、相手の役者が唄ひ終るまでボカンとして背を向けてゐたり、バタバタ樂屋に駈け込んだりすることがあるので、見慣れない者には實に奇妙に思はれる。之は役者が凡べて樂器の音に拘束されてゐるからではあらうが、どうも吾々には感心できない。も少し何とかならないものか、と、觀てゐても氣がもめる。

そして、また非常に見事な型があるかと思ふと、莫迦に愚劣な藝當がある。例へば、老生の臺歩（歩き方——この型は崑劇から來たものだといふ）、歩生の起覇（武裝する型）などは何れも實に見事な型だが、同じ武生の立廻り、——飛んだり、跳ねたり、風車のやうにグルグル廻つたり猿のやうに柱に攀ぢ上つたり、胸の上に數人を載せるなどといふ業は實に愚劣極まるもので、輕業としてならいざ知らず、演劇としては全然何等の價値もない。と自分には思はれる。

殊に面白い、といふよりは莫迦莫迦しいのは、當然曲藝手品としか評し方のないものが、歌劇の中に混入してゐることだ。例へば、楊妃醉酒の爵（寐ながら杯を口に啣み、身體を一つ裏返へして杯をもとの位置に置く）、採花趕府の花（天勝の奇術式に、手で招いて今まで舞臺になかつた花をヒョコリと出す）、黄鶴樓の冠（首で冠を高く投げ上げて、對手方の者に受取らせる）、李陵碑の甲（手を見せないで甲の紐を解く）、瓊林宴の履（足で履を投げて頭で受け留める）、烏龍院の靴（足の先をグルグルと左へ廻しながら、手の先を同樣にして右へ廻す）、戰蒲關の劒（老生が花旦の背後に立つてゐて、花旦が香三炷を完る時、自分の劒を高く投げ上げて巧みに受け留める）等の業である。

要するに支那劇——就中、皮黄は俗受け本位で、たゞ見る目さへ面白ければよい、目の變化、耳の刺戟が多ければよいとしたので、斯の如き玉石混淆雅俗紛糾したものとなつたのである。（井上紅梅氏著支那風俗による）

師娘奇話

看香頭と闘夢の術

支那の古い小説には、鬼だの仙だのといふものが無暗矢鱈に飛び出して來るがまつたく、支那くらゐ神仙思想の發達した國はない。如何に科學が發達したところで、支那人の頭から神仙の消え去ることは先づないだらう。從つて一方にはこれを利用してうまい汁を吸ふ狡猾な商賣人が存在する。師娘といふのはこのあくごい商賣人の一種である。

師娘は大抵、浮世の波にもまれぬいて、酸いも甘いも嚙み分けた皺苦茶婆で、口も八丁、手も八丁といつた代物だから、それでなくても人にだまされやすくでき上つてゐる迷信家は、苦もなくその巧みな術にのせられてしまふ。彼等の常用手段は矢張加持祈禱だが、その祈禱に二種類ある。一つは看香頭といひ、一つは闘夢といふ。

看香頭といふのは、或家に不吉な事が起つた時——例へば家人が難病に罹つたとか、不測の災

厄に見舞はれたとかいふ際に頼まれて、果して妖怪が祟つてゐるかどうかを占ひ、若し祟つてゐれば祈禱によつて仙人を呼び出し、その力を借りて妖怪を追つ拂ふといふフザケた加持祈禱の一形式で、これを行ふには必ず二三人の坊主道士を手先に使つて、隨分あくどいことをやる。もともと人の弱點につけ込んでうまい汁[illegible]はうといふのだからものになると思へばいくらで

〔第三十四圖〕一輪車

も事を大袈裟にする。大袈裟にさへすれば手數料、骨折賃もフンダンにとれるからである。

[illegible]といふのも矢張仙人をダシに使つて馬鹿な迷信家から金錢を搾き上げる方法だが、これには坊主や道士の助力は求めないで師娘が一人で一切のことをやる。即ち仙人が乘り移ると師娘はいろ〳〵の鬼の面を附け、泣いたり笑つたり饒舌つたりして、氣狂ひのやうに一人で騒いだ揚句依頼者の名を呼び、その訴へに對していゝ加減な答をする。例へば、自分の病氣はいつ癒るかとかいつになつたら安樂に暮せるやうになるかとか、死んだら何處へ行くかなどといつた馬鹿らしい質問に對して、大眞面目で二言三言出鱈目を答へてお茶を濁して置く。はつきりしたことを云ふと間違ひのもとだし、あんまり饒舌るとボロが出る恐れがあるから、師娘は決して斷定的のことを言つたり、ベラベラ饒舌つたりはしない。そして都合が惡くなると、何時でも『モウ靈魂が歸りたいといふから』とばかり被つてゐる鬼面をはづしてしまふ。でも迷信家は、その返答を神樣の御託宣ででもあるかのやうに有難がつて信用する。從つて師娘の權威はすばらしいものである。

しかし、如何に狡猾な師娘でも、時には失敗することもある。次にその實例を二三紹介して置かう。

闘夢で失敗した話

一軒の家に二家族が室を別にして住んでゐた。ところが、甲家族の息子が病死して間もなく、乙家族の息子も病死しまつたので、乙家族の夫婦は大いに之を殘念に思ひ、師娘を招いて闘夢をやつて貰つた。

すると師娘が例の通り鬼の面を附けて云ふには（これは死んだ子が師娘の口を借りて言ふのである）甲家族のおぢさん、おばさんは、自分達の子供が死んでから私を大變恨んでゐるたが、こうとう易者を呼んで私を呪ひ殺すことを考へ出した。そして私の死ぬ月日を小さい石の獅子の腹に刻んで裏の井戸の中に沈めた。私はその像に記してある通りの月日に死んだのだ。云々。

これを聞いて乙夫婦は大變腹を立てて、内々甲夫婦の動靜を探つて見ると、易者を呼んだことも、裏の井戸端で線香や蠟燭をともして何かやつたことも事實であるといふことが判つた。そこで[illegible]は今更ながら師娘の靈感に感心し、ムキになつて甲夫婦に食つてかかつた。驚いたのは甲[illegible]た。寝耳に水のやうに、突然『自分の子を呪ひ殺したのはお前に違ひない、さあごうしてくれる』では大抵びつくりする。

そこでだん〳〵話を聞いて見ると、事の起りは不都合な師娘のお告げだといふことが判明したので、此度は甲夫婦がカシカンになつて憤慨し、早速自己の身の證を立てるため、先の易者と師娘[illegible]決せしむることにした。

いよ〳〵兩人の對決當日には、甲乙家族はもとより、その親類友人等も大勢集つて來た。

師娘は事が意外に大事となつたので内心ビクビクものだつたが、何ごうせ深い井戸の底に沈んでゐる獅子の像を取り出すことは出來ないだらうから、と、たかをくくつて威勢を張り、ごうしても前説を翻へさない。そこで易者は、それでは井戸に沈めた石像を調べやう、あれには決して刻字はない。事實が何よりの證據だ、といふので、人夫を雇つてその井戸を乾し、問題の石獅子を取り出した。なるほど刻字は一字もない。これには流石に狡猾な師娘も青くなつた。甲夫婦は大變怒り、何とか返答せよ、もし返事ができなければ役所に屆けるぞ。と怒鳴る。そこでとう〳〵強情な師娘も泣いて許しを乞うた。それを見下ろしながら甲夫婦は、「實は易者を呼んでまじなひをして貰つたのは、家相が不吉だから子供が死んだのだと思つたからで、井戸に石獅子を沈めたのも易者の判斷に從つたまでで何も他意あつてのことではなかつた。が、このことは人に知れて

〔第三十五圖〕支那の葬式

は利目が薄いといふことだつたので、誰にも知れないやうにこつそりやつたわけである」と語り、「一體師娘はごうしてこのことを知つたのか」と詰つた。

師娘も仕方なく、それは女中に鼻藥をつかませてり探出したもので、呪ひ殺したのだらうといふこともその女中の言葉だつたと申し立てた。そこで今度は女中を呼んで眞疑を確めやうといふことになつたが、女中はもうその時には何處かに姿をくらまして仕舞つてゐた。

師娘が逃げ出した話

またここに比較的學問をした一夫婦があつたその夫が旅行中に子供が病氣にかかつたので、妻君は氣が氣ではなく、彼方此方の醫者にも見せたが、仲々快くなりそうにない。迷信のつまらないことは充分に知つて居たのだが、苦しい時の神頼み、と

う〳〵師娘を呼ぶことにした。

呼ばれて來た師娘は、先づその家人の職業や嗜好や年齢なぞを詳しく聞いてから病室に入つて赤坊の容子を見てゐたが、やがて客室に引越して一寸裝束を改め、妙な格構をして大きなクシャミを一つやり、それで仙人となつて、こんなことを饒舌り立てた。

この家には斯々云々の妖怪が祟つてゐるからこれを追拂ふためには各七人の坊さんと道士とを呼んで、一週間お祈りを續けなければならない。だが、この化物の怒り方は一通りではないからそれで無事に立退くかどうか、しかとは判らないが、とに角、今夜も一度化物の希望するところを聞き訊して見やう。云々。

妻君はどうも少し怪しいとは思つたが、何分他によい方法もないので明日になつたらその通りにして見やうと云つて、幾らかの御禮を施して師娘を歸らした。

翌朝になると妻君は女中を師娘の許にやつて、坊さんと道士とを連れて來るやうにと賴んだ。師娘はこれを聞いて大變喜び、病人のその後の容態を詳細に尋ねるのであつた。若し經過が良ければ行かうし、惡ければ何とか口實を設けて行かないですまさうといふのが師娘の腹の中である

〔第三十六圖〕支那の行商

女中は正直に今朝は大變快ささうだと答へた。そこで師娘はホクホクもので、坊主と道士とを連れて行き、盛んにお祈りのお經をあげさせたが、二日目の夕刻になつて病人の容態は急變し、誰の眼にも到底恢復の見込みがないと思はるるやうになつてしまつた。

すると、今までそこに居た師娘の姿が何時の間にか見えなくなつた。そして、いよ〳〵病人がいけなくなつて、今更のやうにそれ醫者よ藥よと騒ぎ出すと、坊主や道士ともいつの間にか一人殘らず逃げ出してしまつた。

師娘の本山

師娘の本場は蘇州である。而して、師娘にならうと思ふ者は、先づ易者にまじなひをして貰つて師娘帳といふものに登記せられねばならぬ。そしてそれとともに、上方山の五聖廟にお祈りをし、その許しを得て始めて一人前の師娘となるのである。五聖は卽ち五通で、所謂仙人である。

毎年八月十八日には全國の師娘がこの五聖廟に參集してお祭りをする。近村近在からの見物も澤山出て來るので、當日の上方山は非常な賑ひを呈する。所謂『石湖に遊ぶ』といふのはこのお祭りを指していふのである。

支那の婚禮

結婚成立まで

支那の風習も年とともに文明的になつては行くが、まだ到底古來の習俗は廢りさうもない。變つたと云つてもそれはたゞ外人と接觸する機會の多い大都會や開港場に於てのみの現象であつて、一歩內地に入れば、もはや其處では昔の習俗が行はれてゐるのである。

結婚も都會地の多少敎育を受けた人々の間では非常に自由になつて、所謂自由結婚も別に珍しくない位にまで進んだが、內地では依然として、男女七歲にして席を同じくせずといふやうな思想が幅を利かせてゐるから、自由結婚などは思ひも寄らぬこと、ごうかすると結婚の當日まで双方とも一面識もないなどといふ場合すらもある。が、大體に於て現在の支那の結婚法は我國のそれと大差なく、先づ息子なり娘なりが年頃になれば、親が適當の配遇者を物色してやり、然るべき媒人を立てて話をつけるのが普通である。

しかし支那ではこの場合にも必ず双方で筮ト者を賴んで吉凶の判斷をして貰ふ。尤もこの風習は我國にも廣く行はれてゐることで、いや歲まわりが悪いとか、合性がごうだとかいふことが馬鹿馬鹿しいほど重要視され、折角の良緣もそれだけの理由でォヂャンになる場合が尠くないのだ

から、別に支那人だけが迷信深いわけでは決してないが、何事にも吉凶の如何を第一にする支那人のこととて、これを重要視する程度は一層甚しい。極端に云へば縁談の成立、不成立は筮卜者の一言によつて定まるのだ。

いよ〳〵吉凶ともによしとなれば、男の方から吉日を選んで女の方へ結納の品を贈る。これにも地方によつて種々の仕來たりがあるけれども、大體に於て我國のそれと大差ないから手取り早く結納品を贈るで形附けて置く。

花嫁の輿入の日取は通例女の家の方から通知する。之は月の障りを避けんがためで、通信の禮と云つてゐるが一寸面白い風習である。

〔第三十七圖〕 支那少女の禮式

輿入當日の模樣

かくて輿入の當日となると、女の家では宴を張つて客を招く。然して、鼓樂者の一隊を先導として、華々しく男の家へ花嫁の裝具一切を送り込む。男の家では之を收めて中庭に陳列し、此度は男の方から彩色した輿をそろへ、鼓樂の音勇ましく——と云ひたいが實は騷々しく、行列をなして女の家に行く。これは花嫁を迎へに出懸けるのだ。

ところが女の家では、この行列が到着しても、暫くの間は門扉を閉して知らぬ顏をしてゐるのが禮となつてゐるから、あわ〳〵て之を迎へ入れるやうなことはしない。そこで門外の客は大聲に吉祥の辭を述べたり、門の扉を叩いたり、錢や葉茶などの包を門内に抛げ入れたり、太鼓や笛を鳴らしたり、暫くの間は其處で馬鹿騷ぎをして門扉の開くのを待つてゐる。かくてもの〻一三十分間もこんなことが行はれた後、初めて行列は門内に迎へ入れられ、暫時休憩してから花嫁は件の彩輿に乘せられて、奏樂の音も賑やかに、花聟の家へと送られる。

一行が花聟の家に到着すると、門前では爆竹を鳴らして景氣をつけ、やがて中庭に於て聟が弓を取つて三度天を射る型をする。これは惡鬼を拂ふためだといふ。然してそれが濟むと花嫁は輿

に至つては殆んど各郡、各部落に異つた習俗があるので、到底限られた紙數にその全部を網羅すから出て新郎とともに中庭で天神地祇を交々拜し、それが終ると相共に洞房に入つて盃を交へて寢につく。

その翌日は未明に人を遣して女の家の門前で高聲に喜悅の辭を述べさせる。それから二三日を經て新郎新婦は相携へてお里歸りをし、九日目には岳母が自ら聟の家に行く。かくて、十八日目と一週間目とに花嫁を岳家へ歸らせて、初めて儀式が完全するのである。

以上現今中部支那一帶に行はれてゐる婚禮の概觀であるが、何しろ廣大な國のこととて、例外は隨所に見出される。殊に交通不便な邊境の諸地方

〔第三十八圖〕　嫁　竹　賣

ることは不可能だが、次に最も奇異なもの二三を記して置く。

江蘇浙江の珍風

浙江地方には未だ學齡にも達しないやうな兒童のために妙齡の女を娶る。といふ奇風がある。

隨分變つた風習だが、それが純然たる打算によつてなされるのだと聞いては一驚かざるを得ない。つまり、下女を雇へば、給金も莫れなければならず、盆や正月には幾日かの休暇も與へなければならないが、嫁を貰へば、貰ふ時には多少の仕度金が要るけれども、給料や休暇を與へなくともいゝから差引得になるといふのである。尤も我國の或地方の農村にも人手を增すために――卽ち無賃の勞力を得るために、息子がニキビの親を額に吹き出させる位な年頃になると、早速嫁、それもなるべく力の强さうな嫁を貰ふ風習が現在あるけれども、江蘇、浙江地方のそれほど露骨ではない。

とにかくさういふ理由で貰ふのだから、貰はれた嫁御こそは災難である。第一お聟樣が二歲や三歲の赤坊なのだから、いはゞ先づオムツの世話からしなければならないといふわけで、一通りや二通りの苦勞ではない。しかも、そうして十年、或は十數年間骨折つても、果して幸福な家庭

つた女にお守りされて育つのだから、如何にしても普通の人間よりは早熟になる。或る旅行者がこれらの地方では十二や十三の子供が女郎買ひに出掛けるとビックリしてゐたが、こんなことは一向珍しくはないのである。從つて、ロクな人間は出來上らない。つまり双方とも不幸だといふわけだが、貧しい家庭では悪いとは知りつゝも、その聘賃——仕度金に眼がくれて、可愛いい娘

〔第三十九圖〕支那の家庭

が作れるかどうか判つたものではない。幸にして聟が善人で十幾歳も年長の嫁で満足すればいいけれども、若し、年頃になつて『コンナお婆さんでは……』てなことになつたらどうだらう。これ位悲惨な話はない。しかもかういふ例は決して珍しくないのである。

貰はれた嫁も不幸だが、聟の方も決して幸福ではあり得ない。何しろ成熟し切

を犠牲に供しつゝあるのである。

因に同地方では、この下女代りの嫁のことを『童養媳』と稱してゐる。これと同樣の風習が直隷省あたりにもあるらしいが、同地方では何と呼んでゐるか不幸にして自分は知らない。

順德地方の奇習

順德地方では、輿入の時、彩輿に登るや否や大聲を擧げて泣き叫ぶ。甚しいのは男家に到るまでオイオイと泣き續けて行く。別に悲しくて泣くわけでも何でもなく、たゞそれが昔からの慣習なのである。

然して、彩輿が男家の門に到着すると、寒暑を論ぜず新郎は必ず手に白扇を持つて之を迎へ、當に新婦が輿を出やうとする時、それで輿を二つ三つ打ちたゝく。所謂『踢轎門』の禮である。

やがて一行が門内に入り終ると、新郎は庭前に設けられた竹梯の上に登つて、賀客一同から祝盃を受け、次いで新婦は舅姑に對面する。が、この對面の儀式がトテモ奇拔である。

通例、舅姑は庭前へ方卓を据えて、それに坐つてゐる。すると、新婦は先づ晴着のまゝ膝行してその周圍を一週し、恭しく最敬禮をした後、再び膝行して一週——ごうかすると二週三週す

る。その間賀客一同はマルデ見せ物でも見物する氣でそれを觀てゐるのである。恥かしさと苦しさとで大抵の花嫁は泣いてしまふといふことだ。

ところが、新婦の經べき苦難はそれだけではない。やうやく膝行の行から放免されたと思ふと忽ち第二の苦難が待つてゐる。即ち、此度は大勢の會友——新郎の友人で未だ冠せざるものが集つて來て、口々に口から出まかせの惡口雜言を放ち、或はさま〳〵の惡フザケをして新婦をなぶるのである。

幸にして會友が好い人間ばかりであれば花嫁も助かるが、不幸にして惡い奴でないまでも多少新夫婦に對して反感を持つてゐるやうな者がゐたらたまらない。故意にいろいろな難題を吹きかけて、散々苦しめた揚句の果には、爆竹をブッ放して晴の衣裳を傷ける位のことはする。結局花嫁は此處でもまた泣かされる。

何のことはない、順德の花嫁は、嫁しかるべき晴の成婚日一日を泣き暮すのだ。實に不思議な風習ではないか。

福建省石澳の奇風

福建省、石澳地方の婚禮も可なり變つてゐる。先づ同地方では婚禮の當日、男家の方から美々しく飾つた肩輿を用意して新婦を迎へに行く。然してその際には必ず六人の少年が各自手に紅旗を捧げて之を先導する。この少年達は、通常、男家の近親知己中の比較的豐かな家庭の子弟で、同地方では之を『替新郎』と呼んでゐる。

この嫁迎への一行が女家の門に到着すると、女家ではワザと門扉を閉して入ることを阻み、若干の金子を得て始めてこれを門内へ入れる。即ち『索青錢』の禮である。

夕刻になると新婦は盛裝して迎への肩輿に乘り、盛んな爆竹の音に送られて夫家へ往く。一行の先頭には先の替新郎が立ち、輿の後には數人乃至十數人の『新阿姨』が各自新婦の衣箱を背負つて附き從ふ。

いよ〳〵一行が男家へ到着すると、例によつて盛んな祝宴が開かれるが、この時面白いことに替新郎と新阿姨とは、特に新房内で新夫婦の御招伴をさせられるのが例である。然して、替新郎はその夜辭去するが、新阿姨はそのまゝ宿つて行く。往々、新郎が當の新婦よりも好ましい人を

その新阿姨の中に見出して、新婚早々トンダ悲喜劇がもちあがるといふことである。

支那婦人のお産

姙娠中の風習

支那の婦人は、姙娠すると、先づその居間の壁に三國志の繪や、孔子の畫像や孟母斷機の錦繪などを處嫌はず貼りつけて、朝夕これに親しみ、或は勇猛な武士の面影を偲び、或は高潔な聖賢の人格を敬慕して、胎兒が之にあやかるやうにと祈念する。之は面白い風習で、所謂胎教の旨に叶つてゐる。

然して姙娠三ヶ月になると、車に乘ること、高い處に上ること重荷をさけることを絶對に禁止する。また流産を恐るる婦人は、この月から安胎藥といふ流産豫防の藥を持藥として用ひる。その藥の成分は果して流産豫防の効のあるものかどうか不明だが、一般の婦人達は非常に有効なものとして珍重してゐるやうである。

また姙娠中は決して蟹や鬼の類を口にしない。蟹を食へば逆子が生れ、鬼を食へば三つ口の子が生れるといふ迷信からである。何しろ迷信の多い國のことであるから、かういふ物忌みは數限りなくあるが、一寸面白いのは、太陽に向つて針仕事をすることを嫌ふ風習である。これは太陽に向つてするとその針の影が胎兒に映じて必ず障害を起すといふ迷信から來たことであるが、我國で姙婦が火事を見ると胎兒に痣ができると云つて嫌ふのとよく似てゐるではないか。

出産時の處置

かくていよ〳〵臨月になると、白砂糖、鷄卵、安息香、黒砂糖、桃の種、栗等を準備して出産を待つ。都會地にこそ病院もあれば、專門醫もあるが、田舍には産婆すらもロクに居ないといふ有樣だから、無事に生れゝばいゝが、不幸にして少し難産になると大騒ぎである。

無事に生れると、産婦の枕元に安息香を焚き、定心湯を飲ませる。定心湯などといふと宛も藥湯でゞもあるやうだが、これは唯の砂糖湯だ。生兒は産婆（或は産婆役のお婆さん）が臍帶（へそのを）を切り産衣を着せ、二日目には核桃水を吸はせ、第一回の便通があつてから初めて母乳を與へる。この核桃水を飲ませるのは、我國で『マクリ』といふものを飲ませた舊習慣と同じである。

變つた出産祝

子供が生れて三日目を『洗三』と稱し、盛んなお祝ひをする。その前日には親戚知己から鷄卵、粟、黒砂糖といつたものを贈つて來る。當日には人々が朝からつめかけて、酒を飲み、喜麺餅ちうどんを食ふ。然して、その家の者は大きな金盥と、赤い布と、槐樹と桑の幹とを併せて煎じた湯とを用意し、奥の間には炕公炕母といふ産神を祀つて、赤色や黄色で彩色した茹で卵や、其他種々の果物などを鉢盛にして供へる。

かくて用意がすつかり調ふと、産婆は生兒を抱いて設けの座——齊の上に坐る。すると來會者一同は暫時飲み食ひを中止してその周圍に集り、件の桑槐の煎汁の入つてゐる金盥の中へ、各自一匙づゝの水を注ぐと同時に幾許かの貨幣をその中に投り込んで大聲に吉祥言を稱へ上げる。勿論その金額はいくらでも差支へはないが、その時稱へる吉祥言の文句は金高によつて異ふ。例へば十錢は『一品當朝』二十錢は『雙々見喜』三十錢は『三陽開泰』四十錢は『四時同慶』、五十錢は『五福臨門』、六十錢は『六合同春』、七十錢は『七子人婿』、八十錢は『八仙慶壽』……といふ類である。何しろ三人も五人も一諸に之をやるのだから、その賑かさはトテモ大變である。

洗三が濟むと此度は生後十二日目に『十二天』といふ祝をする。けれども此日には別に客は招かない。

その次は出産後三十日目に『滿月の祝』といふお祝をする。この日には洗三の時と同樣、親戚知己を招待し、招かれた方では、子供の衣物、帽子、鈴、或は銀製の鍵といつたものを贈る。また女客は必ず饅頭を持つて行つて、それを産婦に一口づゝ食べさせる。土地によつては藝人などを招いて、隨分大がゝりのお祝をやる。

次は所謂食ひ初めであるが、之は『百祿見の祝』と稱し、鷄の舌を食べさせるを例としてゐる。

不老長命が目標

支那人の道教趣味は藥にまで現はれてゐる。所謂道家の仙丹は別としても、普通の藥でさへがみな神祕的の効能——何の病氣に特効があるといふやうな程度を通り越して、不老長命を能書の第一に置いてゐるのだから驚いたものである。結局支那人は不老長命で仙人となるのを服藥の最後の目的としてゐるらしい。

一體支那人は仙人が好きだから道教のやうな仙人教を信奉するのか、道教が盛んだから仙人好きになつたのか、ドッチが原因だか結果だか知らぬ、がとにかく不老不死が秦皇漢武以來の傳統的慾望であつて、仙人となるのを人間の最高理想としてゐる。であるから仙人學は秦漢以來で、道教の書には黄表紙式の仙人修業の話がざらにある。ところが、元來支那人の憧憬する仙人は、木の葉の衣を着て、藜の杖を突き、霞を喰つて、風に乘する生きた屍同樣の仙人ではなくて、人間の本能慾を思ふ存分に擅にしつゝ不老不死を貪らうといふ頗る腥臭な仙人である。漢の武帝は道士の進言に聽いて、三千の婦女を自由にするを仙人となる祕法と信じて行つたと傳へられてゐるが、漢武に限らず支那人は誰でもみなそれ位な心懸けは持つてゐるらしい。これ藥といふ藥が宛も申し合せたやうに、不老不死の特効を說く所以である。

近頃我國にまでその信者を作つてゐる『何首烏』の如きも、實に好個の一例である。

靈藥何首烏

『五雜俎』によると、何首烏の根齡五十年のものを一年間服すると白髮頭が黑くなり、百年のものを一年間服すると血色が麗はしくなり、百五十年のものを一年間服すると乾鰯のやうな老翁が童顏となつて犇馬と競走できるやうになり、三百年のものを久しく用ふると終には地仙となるといふことである。

だが、根齡三百年の何首烏などといふものが一體何處にあるのだらう。

第一どうしてその根齡を判斷することができるか、それからして問題である。尤もないから無事なので、もし有つたら厄介な仙人がうよ〳〵出來て如何に仙人好きな支那人でもその始末に困るだらう。まして、そんな物騷な代物を無暗矢鱈と輸出されでもした日には、それでなくとも[illegible]の精や鰻の精の化身みたいな老骨の跋扈に惱まされてゐる善隣の民はまことに迷惑する。

補腎妙藥 紅鉛丸

しかし、何首烏はともあれ藥草には違ひないのだから、『齡古稀を過ぎた老人が漆髪紅顏となつて、陽道勃如として子を產ましめた』などといふ能書の文句はあてにならないまでも、相當の藥効はあるに違ひない。が、この『紅鉛丸』に至つては、義理にも藥効があるとは信じられない。

例の『五雜俎』の記事によると、この藥は『何首烏よりも人參よりも効驗顯な補腎の妙藥で』、これを製するには『まづ容姿衆に優れた十三四歳の童女の天癸將に到らんとする頃を伺つて、羅帛を以て經水を受け、之を金銀の器か又は磁盆に入れ、澄まして硃砂の色の如くなつた時、井水河水、及び烏梅水を混じてよく攪拌し、更に澄ますこと七度して後、乳粉、乳香、辰砂、秋石等を交ぜて乾かして粉末として、更にそれを鷄に抱かせるか、或は火力によつて煉り上げる。』のださうである。藥劑の知識のない吾々には餘りハッキリしないけれども、何しろ第一の基礎原料が童女の經水だといふのだから恐ろしい。いくら何でも、こんなものが藥になることは思はれないではないか。例へそれが五雜俎子の云ふ如く眞に効驗顯なものであるにしたところで、そんなものを服用するなどとは、考へただけで自分などは烏肌になる。

一體どうしてかういふ汚いものを用ゐるかと、いふとこれもやはり道家の迷信に本づくのだ。つまり發育力の旺盛な童男童女の性的機關の排泄物は、生殖作用の刺戟劑となるといふ恐るべき信仰からきてゐるのである。

だが、この藥は効能も顯な代りに、量を過ごす時は害毒もまた非常なものとされてゐる。盧州の龜太守といふ好き者は、この紅鉛丸の奇効を聞き知つて、直ちに高金を投じて十丸を求めたが一ヶ月内に盡く服用して了つたので、忽ち九竅から血が迸つて死んでしまつた。戒めざるべけんやと『五雜俎』の著者は痛嘆してゐる。

六神丸とその原料

支那の珍藥の話には、どうしても六神丸のことも附け加へて置かなければならない。六神丸は我國にも早くから傳つてゐるので、今では誰でも知つてゐる藥だが、これも來歷の怪しいことでは紅鉛丸と甲乙のない代物である。

今ではそんなことをいふ人もないし、信ずる人もないが、以前には隨分變なことを噂したものだ。先づ『六神丸といふものは人間の活肝を引拔いて丸藥にしたものださうだ。』といふ噂。それで當時支那人の最も多く入込んでゐた横濱、神戸、長崎あたりの裏町のお母さん

達は、支那人といふ奴は子供の活肝をとりに來てゐるのださうだといふので、大いに恐れ、夕方になると子女を戸外に出さなかつたなどといふ嘘のやうな事實がある。

尤もあの頃――といふのは明治三十年頃のことだが――神戸や長崎あたりで屢々子供が行方不明になつたのは事實である。けれども、それがみな支那人に誘拐されたものとは思はれない。現に長崎では、てつきり支那人のために六神丸の原料にされてしまつたものと思はれてゐた人が、十數年後にひよつこり成金になつて南洋から歸つて來たなどといふ事實もある。第一、あの子供の旅く買へる國にわざ〳〵旅費をかけて送つたところで商賣になるわけもなければ、かゝる大事件を我官憲が看過するはづもない。要するにそれは、今日無智な人々が朝鮮人に對して馬鹿化た疑をかけ、自ら生み出した暗鬼に恐怖してゐるのと同一轍のことだつたのである。

しかし、この奇藥の原料竝びに製法に就ては今でも種々の臆說が行はれてゐる。或支那人の說によると、六神丸の主要原料は太湖の蛙の活肝だといふ。なるほど之は一理ある話である。人間の活肝なんてものは、いくら野蠻の支那の土地でも昔ならいざ知らず、今どきさう容易く得らるる筈がないが、太湖の蛙なら何萬でもお好み次第、忽ち手に入るに違ひない。のみならず事實蛙の肝臟からは一種の麻醉藥がとれるとかいふ咄だから、まんざら根も葉もないことでもなささうだ。がまた一說には、鹿腎（ろくじん）が主要原料だといふ說もある。――支那人の腎といふのは腎臟ではなくて勢のことである。だから鹿腎といふのは鹿の腎臟ではなくて鹿の勢なのである。蒙古では古來、虎腎、鹿腎を媚藥として用ゐてゐるが、たゞに回春の効があるのみでなく、他の疾病にも奇効があるさうだ。かのロシアの今道鏡ラスプーチンが皇后に取入る手品の種となつた『相思藥』といふ代物も、蒙古產の鹿角と人參との合劑と傳へられてゐるけれども、鹿角は多分この鹿腎の間違ひではないか、と、ある支那通は云つてゐる。果して鹿賢が六神丸の主要原料だかどうかはわからないが、支那人の鹿腎に對する信仰の厚さは吾人の想像以上だから、たとへそれが事實であつても不思議はない。

その他まだいろ〳〵な說がある。が、專門家にたはせると、結局靈藥六神丸も紅鉛丸や、螺螈（らもり）の黑燒と同じやうなものサ、といふことになつて了ふ。あれほど有名なものなのだから全く無價値なわけでもあるまいが、それかと云つて特に何に効くといふこともないらしい。或は恁ういふ靈藥は信仰を以て服（の）まなくては駄目なのかも知れない。

四川省に行
はゝ〜雲藥

四川省は古來藥業に關する研究の頗る盛んな土地で、その材料も省内に產するばかりで、なく奥の方のチベット、雲南、貴州と云つた方から續々と集つて來るのであるから、實に豐富なものである。次にその二三を記して見やう。

(一)四川母(四川省產の貝母)

(二)爐貝母(川邊特別區域の大都、打箭爐產の貝母)

(三)爐蟲草(同じく打箭爐產の冬蟲夏草)——補溫劑

(四)製附張——(老人用の補腎劑)

(五)當歸——婦人用の要品

(六)雲苓(雲南產の茯苓)——補溫劑

(七)川芎(四川產當歸と同用)——婦人用要品

(八)藏紅花(西藏產の紅花)——婦人用要品

(九)藏青果(西藏產の青果)——壯陽劑

(十)鹿茸——男子用、補血壯陽劑

(十一)鹿冲、鹿鞭——男子用、熱壯陽血劑

(十二)鹿筋——男子用、熱血壯陽

(十三)鹿膠——男子用、熱血壯陽

(十四)鹿尾——男子用、熱血壯陽

(十五)紋黨參——補氣

以上、何れも四川省では盛んに用ゐられてゐるものであるが、その科學的價値は遺憾ながら未だ判つてゐない。しかし、その中で西藏產の青果は今日支那西部からペルシヤ、交趾支那一帶に見るピメラ卽ち綠豆の一種ではないかと云はれてゐる。もしさうだとすると、この青果は强壯劑としての性分を含んでゐることは勿論である。また當歸は我國でも古くから婦人の血の道などに特効があるとして用ゐられてゐるもので、科學的價値も多少はあるらしい。

煙館が歡樂世界の中心點をなし、煙具が日用器具として平氣で取扱はれ、上は王公貴人より上は苦力乞食に至るまで、歡樂を逐ふに日もまた足らず世を擧げて

恐ろしい征服力

阿片の毒煙に包まれてゐた頃のことを想へば、今日の支那は實に別世界の感がある。恰んど隨所に公開されてゐた煙館は盡く閉鎖されてしまつたし、形容枯槁、顏色憔悴といつた見るも哀れな阿片鬼の姿を見掛けることもなくなつた。が、果して支那人はあれほどまでに愛好してゐた嗜好物を、ただ一片の法令によつて全廢してしまつたのであらうか？若しさうだとすれば支那人は實に見上げた人間であるけれども、事實は遺憾ながら「然り」ではなくて「否」である。

〔第四十圖〕煙館の圖

一體すべての嗜好物は、人間に對して實に根強い征服力を持つてゐる。酒にしろ、煙草にしろ一旦これを近づけたが最後、なか〳〵退けることは困難で、見す〳〵身に害を及ぼすものとは知りながら、日一日とこれにひきつけられて行くのが通例である。殊にこの阿片の習癖性に至つては眞に恐るべき執着力があつて、既に癖となれば歇めたら最後命がなくなる。しかも、阿片といふものはこの癖といふ狀態にならなければ、いくら吸つても、眞の旨味を了解することはできぬのである。即ち、中毒症に陷つてからでなくては阿片の味は判らぬのだ。

まことに以て恐ろしき次第、生命と歡樂との掛け替へる、世の中にこれほど徹底した嗜好物が他にあらうか？

奇怪至極な現象

所謂嗜好品なるものには大抵中毒症に陷る危險を伴ひ、その中毒症なるものは何れも極めて厄介なものだが、凡そ阿片の中毒症ほど厄介なものは他にはない。

一旦この中毒症に陷ると、恰も間歇熱の發作のやうに、必ず一定の時間に癖が來る。然して、癖が來れば是非とも阿片を吸はなければならない。若し吸はずにゐれば脈が上つてしまふ。だがそれもだゞ吸つただけでは効能がない。必ず初めて吸つた時と同

じやうな場所で、同じやうな狀態のもとにやらなければならぬ。つまり、最初下等な煙館で吸煙を覺えた者は、どうしても敝帷破席に於て癮を過さなければならない。清潔華麗な部屋ではその倍量を用ゐて更に利き目がない。もし又、最初の時に衣服を解き、襪を脫して吸つたならば、必ず衣服を解き、襪を脫して癮の過ぎるのを待たなければならぬ。といふわけで一々最初吸煙を習ひ覺えた時の型通りにしてやらなければ何の効果もないのだ。それについて頗る面白い話がある。

〔第四十一圖〕 阿片吸食の圖

道光年間、江西省の吉安といふところに渾名金看板と呼ぶ一人の藝妓があつた。初めて阿片を吸つた時、○○になつて客と○たところが、後にそれが痼疾となつて、何時でも怠うしなければ癮を過ごすことができない。若いうちはそれでもよかつたが、晩年には客はないしどうすることもできない。そこで已むを得ず、壯健の男人數人を雇ひ毎日三度宛、これを客の代りにして最初の時と同一狀態を繰返して、癮を過したといふことである。

製法と種類

阿片は罌粟の實の汁を乾して製したものである。

現在最も多く產出する國はインドこれに次いでは支那、ペルシヤ、エジプト等である。

支那產の阿片には、雲土、川土、陽土、建葉、臺葉、象葉など、いろ〳〵な種類があるが、そのうち葉の字のつくのは直段が比較的廉いから下等社會に用ひられる。

文字に不自由のない國だけに、阿片の名稱も一通りや二通りではない。鴉片、阿扁、阿芙蓉、芙蓉、蒼玉粟、烏香、烏煙、鴉煙、南榮、合甫融、洋藥膏、洋藥土、膏土、公班煙、公煙、公膏、菰煙、大土、白皮、紅皮、小土、洋藥、洋煙、先づザッと右の如し。頭の惡い人間にはこれだけ覺えるのだつて容易のことではない。しかも、これでまだ全部でないのだから驚く。

中毒患者

何しろ酒よりも、煙草よりも廢し難いといふほどのものであるから、清朝末年に阿片禁止令が勵行せられた時には隨分いろ〳〵な悲喜劇が續出した。

宣統元年の秋、福州鼓樓前の某店で新案の鞋を賣出した。見たところは別に珍奇な點もない通常の鞋だが、値段は驚くなかれ一足三十弗、當時の支那にあつては隨分高い鞋であつたにもかゝはらず、これはまたどうしたことか、賣行は馬鹿によく、忽ち數百足を賣り盡すといふ盛況、どうも不思議だといふので、だん〳〵詮索して見ると、賣れるも道理、その鞋は底が二重で阿片を藏つて置ける仕組みになつてゐたのだ。何でも福建か何處かの縣令某はこの鞋を愛用して免職になつたといふ。

又その頃のことである。北京のさるお金持の許に一箱の贈物が到來した。何でも上前をはねなければ氣のすまぬ門番先生、一寸蓋を開けて見ると中には美味さうな腸詰が一パイ詰めてある。そこで早速一本失敬して置いて、午飯の時ソッと出して切つて見ると驚いた。中から黑汁のやうなものがドロドロと流れ出したものだ。臭い、ハハーンあれだな。そこで門番はその切つた奴を主人の許に持つて行き、

「旦那、妙な贈物が參りましたネ」

主人も身に覺えがあるからグッと詰り、銀貨數枚を出して、

「叱、叱、聲が高い。これを詰め替へて置け」

支那の兵隊

支那の戰爭

支那には徵兵制度なく、常備軍百四十萬人と言はれる現在の軍隊はみな傭兵である。體裁よく言へば義勇兵である。故に募兵の形式から言へばイギリスやアメリカの兵隊さんと同じでなければならないわけだが、實質は全然違つてゐる。どう違ふかと言ふに、支那の兵隊さんは、國家を守るとか、安寧秩序を維持するとか云ふ貴重な任務に就いての理解が乏しく、高尚な觀念から來る社會奉仕の光榮に自己滿足を感ずるよりも、之によつて衣食の途にありついたことに滿足してゐるに過ぎない。

衣食のために應募するのであるから、自分の隊長は傭主であり、旦那であり、親分である。從つ

て彼等は親分あるを知つて他の如何なる權威の存在をも認めない。大總統の有難いことを知つてゐるのは、大總統に養はれてゐる兵隊だけである。

であるから、常備軍百四十萬人といつても、それには全然統一がない。支那に師團長の轉任などといふものゝないのもそのためである。任地の代る時は恰度わが舊藩時代の大名のやうに自分の一家眷族とともにその軍隊をも率ゐて移轉する。尤も稀には雁首のすげ替もあるにはあるが、その時は必ず揉着が起る。原則外れだからだらう。さればこそ各省督軍は自己の一存で離合集散し、勝手に獨立したり、中央政府に反抗したりする。

先年(大正九年)安直戰爭の時、吳佩孚氏が自己の手兵を提げて勝手に湖南省の戰線から引上げ君側の奸を除くとばかり北京に殺到した時のことだ。當時北京を守る兵力は非常に優勢だつたしその素質も參戰軍と稱して、歐洲戰に參加することを標榜して多數の日本將校の訓練したものであつたから、何人も吳佩孚軍の勝利を豫想したものはなかつた。一擊の下にやつつけられて仕舞ふだらうと、人々は吳佩孚氏の無謀な企てを冷笑してゐたのである。然るに必勝を期待された參戰軍は或日の拂曉戰に一敗地に塗れて總潰亂の狀態に陷つてしまひ、吳佩孚軍は悠々と北京に入つたのである。人々は事の意外にアッと驚いた。そして、支那の戰爭は判らないといふことにしてしまつたが、決してこの戰は八百長ではなかつた。參戰軍が故意に負けたのではなかつたのである。では何故に優勢な參戰軍があのやうな慘めな敗軍をしたのであらう。

これに對して或專門家は、『參戰軍の敗因は吳佩孚軍の後方を威嚇すべき重要任務を帶びた騎兵の大集團が全然役に立たなかつたためで、この騎兵の大集團が、甘く運用され得なかつたのは、各師團別々の騎兵聯隊を一括して別個の集團にした結果である。』と云つてゐる。つまり、戰爭になつて俄に雁首の取替へをやつたので、協同の動作ができず、マゴマゴしてゐる間に敵は本城を乘取つてしまつたといふわけである。かういふことは、我軍隊のやうに統一のある軍隊では夢にも見られないが、支那の軍隊は、要するに舊藩時代の藩士のやうなものだから、それを俄に寄せ集めたところで到底協同動作のできるわけはないのである。

親分乾兒の關係は書にこればかりではない。師團長とか督軍とか言はれる人もまた、さうした關係で繋つてゐるのである。從つてその間の利益を本位として、國利民福などといふことは眼中にない。斯うして成立つ軍隊なればこそ、他の團體團に於ては、何のための戰爭か理解もできな

い戰爭にさへ從事することになるのである。尤も第一革命の當初の戰爭には、革命そのものが無上の幸福を支那の將來に持ち來たすものだとの幻影に導かれもしたが、結局得るところは連年の戰禍と重稅以外には何もない。折角燃え出した義憤も理想も忽ち消滅してしまつた。

かくて翌々年の第二革命運動に參加した軍隊には、もはや往年の自負心——非常に崇高な、業績ある大事業に參加してゐるのだといふ氣持は、全く見られなかつた。その時黃興のために働いた革命軍の青年將校は官金を掻浚つて逃げるよりほかに能事はなかつた。袁世凱が皇帝にならうとして自ら洪憲皇帝と稱した時、第三革命の烽火を打上げて支那全國を震駭さした雲南軍の胸中には、それでも個權以上のあるものがあつた。公共のためにといふ崇高な理想があつた。が、それも引續く四川への遠征と、內爭とに苦しんだ結果、何時の間にか消え失せてしまつた。

謀叛は珍らしくない

かくて事實上現在の支那の軍隊はたゞ個權を逐ひ廻るだけの頽廢し切つたものになり下つてゐる。

從つて親分だの乾兒だのといつてもそれは刹那的の約束であつて、決して永遠性をもつたものではない。兵卒はもとよりのこと、督軍だの司令だのと稱する連中でも、何時行李を擔ぐか、尻をまくるか判つたものではない。先年の奉直戰の際、奉天第三方面軍副司令として直隸方面に出征してゐた郭松齡が、突如自己の親分張作霖に對して叛旗を飜えし鷹下の精兵六師(約七萬人)を提げて奉天へと攻め上つた時には、流石の支那人もビックリしたらしいが、それは郭松齡その人が張作霖からその嗣子張學良の訓育を依託されてゐたほどの人物であり、彼の謀叛に加擔した六師七萬の兵が、當時の奉天軍中の精鋭で、組織に於ても、訓練に於ても、兵器に於ても、その他何に於ても、全く外國兵と區別がないまでに行屆いた、いはゞ張家の近衞兵ともいふべきものであつたからで、決して謀叛そのことが珍らしかつたからではない。

宣傳が大切な理由

世間にはよく「支那の戰爭はあれでも本氣かね」などと云ふ人もあるが、まんざら遊び半分に戰つてゐるとは限らない。時あつて戰爭の目的は覺醒すれば隨分本氣以上の本氣になることもある。が、概して支那人は應揚で、日本人ほど昂奮し易くないと云ふよりは、昂奮するまでに暇がいる。從つて緊張味を缺いてゐる彼等が利害の打算を忘れて仕舞ふほど昂奮するのは、よく〳〵の場合である。

であるから支那の兵を用ゐる人は、名將と云はれる人ほど、如何にして兵隊の戰意を强くし、

如何にして兵を昂奮させ緊張させるかに苦心する。韓信ほどの名將は古來稀だと言はれるが、彼はチャンと『背水の陣』といふ巧妙な用兵術を發明してゐる。しかし、現今の兵隊は至つて現實的に出來上つてゐるから、なか〳〵おいそれとは昂奮しない。そこで戰爭に當つては、雙方とも競つて或ひは月給を增し、或ひは賞金を懸けて將士を勵ますとともに、盛んに宣傳をやつて人氣をとり、それによつて間接的に將士を安心させ且つ昂奮させる。何しろ確たる信念のない兵隊のことだから、待遇がよくなり、人氣がよくなれば、すつかり嬉しくなつてしまふのだ。この事實は先年の蘇浙戰にも最近の奉直戰にも明らかに認められる。

尤も宣傳に熱中してゐる間に局面が推移して戰爭になりさうでならずに濟む場合も尠くない。これが局外者から支那の戰爭は繻文の戰爭だ。遞電の戰爭だ、掛聲ばかりの戰爭だと輕蔑される所以だが、「戰はずして勝つは策の上なるもの」との信條が孫吳以來兵法の眞髓とされてゐる支那では、出し懸けた鐵砲を引込めたからとて、少しも不名譽とはならないのだ。

我國の或軍人のやうに「吠える犬は噛みつかぬ」式の哲學を信奉する者は、頭から支那人の戰法を蔑視するけれども、時折獸りこくつて他國の領土に兵を入れ、後になつて世界的宣傳に閉口されたりするのは、この戰法を蔑視するからのことではあるまいか。

苦力の特色

苦力の生活

苦力が比類なき勞働能力の所有者であることは讀者も既に御承知のことと思ふ。實に支那の諸開港場——上海、天津、香港、揚子江沿岸諸港、我租借地たる關東洲は大連等の埠頭におけるすべてこの貨物運搬は、悉く彼等の雙肩によつて行はれてゐるのである。その總數は恐らく數百萬人に上るであらうところの最下級勞働者の群。彼等の日常衣食住——生活狀態の一般を調査研究するところは、支那を知らん者にとつては是非必要なことであり、興味あることでもある。

苦力にも無論その土地生えぬきの者も尠くはないが、大多數は山東、浙江兩省から裸一貫で出て來た所謂出稼人である。恰度往年廣島や紀州の人々がハワイへアメリカへと押出したやうに、毎年々々前記の地方からは夥しい出稼人の群が、揚子江沿岸の諸港市へ、滿洲、關東洲の諸都會

へと流れ込んで行く。現に上海の苦力は殆んどみな浙江省の生れであり、大連のそれは大多數山東省方面から來たものであると云はれるくらゐである。

彼等の特色は、べら棒に廉い賃金で比類のない勞働能力を發揮する點にある。しかもその性情は概して溫和從順で、めつたに不足を唱へないといふのだから、雇主には、これくらゐ都合の好いことはない。が、それだけに彼等の生活は實にみじめなものである。一日十時間以上も、恐らく彼等以外何人も到底堪へ得ないだらうと思はるるほどの勞役に服して、得るところは僅かに六七十錢。如何に支那が勞働賃金の廉い國だからとて、驚くべきことではないか。恐らく支那の苦力くらゐ薄遇の勞働者は他にはないだらう。

しかも彼等はそれで滿足してゐるのである。そして、心懸けの好い者は、數年後には立派に獨立し得るほどの貯蓄をさへするのである。——現に奉天や大連に堂々たる店舗を構へてゐる商人中にも幾多の苦力出身者がある。一體彼等は如何なる生活をしてゐるのだらうか。

簡易な生活

ともあれ日給六七十錢で衣食住の費用を辨じた上に幾らかでも殘さうといふのだから、如何に支那は生活費が廉いといつても到底人間並の生活は出來得ない。

衣服といへば天にも地にもタツタ一枚、それを何事でも川をなさなくなるまで着とほす。垢が附かうが、寄生蟲が涌かうが、氣にするやうな彼等ではない。また氣にしたところで一枚ではどうすることもできるものでない。しかし幸なことは夏は裸體でも暮せるから、その間に洗濯でも修繕でもやつて置く。

食物はその出身地によつてそれ〴〵多少とも食質が異ふ——例へば山東省、直隸省あたりから來たものは、麥粉、包米、小米、大米、吉豆等が主食物、滿洲出身者は右のほかに多く高粱を食べる副食物は、野菜煮、味噌、漬物、豆腐煮が一般的のやうだ。が、それは自分で調理する場合は稀で、大抵、所謂一膳めしやか屋臺店で買つて食ふ。苦力の多い港町には彼等だけを相手にするめしやがいくらでもあつて、飯は大茶椀に一盛二三錢、煮物は一しやもじ一錢か二錢、魚類は一きれ二三錢くらゐで賣つてゐるから、一食五六錢も費せば、どうやら腹を滿たすことだけはできる。

『住』も至極簡單である。苦力には一家をなしてゐる者は極めて尠いから、大抵木賃ホテルか合宿所に泊る。無論木賃宿といひ合宿所といふもそれは彼等のみを相手の最下等のもので、宿賃も廉いが(通常一泊二三錢)設備はたゞオンドル式の床の上にアンペラが敷いてあるだけ、寢具などは全然ない。着のみ着のまゝで履物でも枕にして寢るといつた程度のものである。尤も上海、天津、大連等の大港市には、相當設備の完全した大合宿所があるが、これとてもたゞ規模が大きいといふだけで、實質は我國の最下等の木賃宿と大差はない。

恐らく苦力の生活ほど簡易な生活は、現今の文明國に於ては他にその比がないであらう。それなればこそ圓にも足らない日給から多少なりとも貯蓄ができるのだ。そしてまたかゝる簡易なといふよりはむしろ原始的な生活でも生來さういふ環境に育つて來た彼等には一向不自由だとも悲慘だとも思はれない、從つて別にそれ以上の生活をしたいとも考へないから、例へ賃金がたゞの五十錢でも、大なる不足は感じないのだ。勿論將來は彼等と雖も現在のやうなヒドイ待遇では滿足しなくなるだらう。苦力の賃金値上運動、同盟罷業テナ問題が起るのも遠いことではあるまいと思はれる。が、現在では至つて平穏無事、天下泰平である。

滿洲最大の苦力收容所

これでまづ苦力生活の概觀は終結として、次にさる專門家の苦力合宿所視察談を紹介しやう。

「苦力」は近ごろ「華工」と改稱されて、彼地では一般にさうと呼んでゐる。今度視て來たのは大連の碧山莊その他であるが、中にも碧山莊は滿洲最大の華工收容所である。明治四十四年二月の創設、福島公司日本人相生由太郎氏の經營で最近株式會社となつた。

現在この收容所は敷地四萬三百六十六坪、建坪一萬百二十二坪で、優に一萬三千五百人を收容し得る。

宿舍は煉瓦建の平家および二階建で、すべて南向、舍内には「オンドル」の設備があり、各戸に炊事場があつて、その火氣によつて全床を暖ため、寒氣を防いでゐる。

此處では三食ともに麥粉の饅頭を主食としてゐる。自分が視察した時は恰度夕食の準備時だつたのでその麥粉饅頭や吉豆と南京米の粥などを作つてゐたが、麥粉饅頭は作り方も至極簡單であり、味も大變よくてパンなどよりも美味いとさへ思はれた。もちろん副食物として野菜類や魚類は缺るが、肉食はお正月、お盆、祭日といつた日でなければやらないらしい。そして生物はねぎ、

にんにく位が關の山で、如何なるものでも焼くとか煮るとか、とにかく一度火を通さなければ承知しない。

そこで碧山莊内には食品販賣所があつて、大體左のやうな調理品を賣つてゐる。値段は何れも一しやもじ一錢か二錢、但し魚類は一しやもじではなくて、一きれで、大抵二錢。

碧山莊食品販賣所調理品目錄

一　大魚斤（煮魚）
一　辨大椒（にらの煮物）
一　大椒豆（豆と大根との混煮）
一　大椒韮煮（豆と白菜との混煮）
一　醋漬白菜（白菜の酢のもの）
一　炒地豆（馬鈴薯を薄く切つて煮たもの）
一　炒豆腐（煮豆腐）
一　花生仁（南京豆の煮たもの）
一　鹹大椋（唐辛の漬物）
一　鹹芹葉（芹の煮たもの）
一　牛血（牛の血の凝つたものを薄くして煮たもの）

以上

碧山莊には醫務室の設けもあつて、傷病者の治療に從つてゐるが、最近半年間の統計によると傷病者總延數は三千百七十餘名、その中で最も多いのはやはり公傷で（九三二六人）これに次いでは眼病（六六六人）腫症（四七七人）、黴毒（四六四人）、負傷（二一三人）、の順になつてゐる。（大正十五年十月）――呼吸器病は統計の上では非常に少く、日本人勞働者の最も惱まされる脚氣に至つては三千百七十餘名中たゞの一名に過ぎない。これは彼等の食物が麥粉や豆であるため、ヴィタミンBの缺乏を起さない證據である。併し、黴毒は比較的多いので、碧山莊では現在一日平均三名に治療注射を行つてゐる。

在莊華工の性質は溫順實直で觀察に行つても微笑をもつて迎へるといふふうであつた。彼等にも草花栽培の趣味あれば、また小鳥を飼つて可愛がつてもゐる。引越しの際には鳥籠を大事さうに持運ぶといふので、「華工の唯一の財產は鳥籠だ！……こんなことが彼地では云はれてゐる。

年中行事

お正月

元旦にはどの家でも朝早く香を焚いて神迎へをする。その神は灶王と喜神とである。供物は春餅（肉、野菜を千切りにして煮たものを餅皮で巻いたもの）、蜜餞（砂糖漬の果實）、果品（乾果の仁）、年餻（黍餅）等で、これは正月中毎日お供へする。（北京）

また、祖先の畫像を飾つて、これに茶果、粉丸、年餻等を供へ、香を焚き、燈明を上げて、家内一同が禮拜する。この畫像は三日の後取り收めるのが通例であるが、家例によつては、五日、十日、或は上元（十五日）の夜に至つて、祭をして取り收めることもある。その間、親戚の者は互に年賀の往來をして、この畫像を拜する。これを俗に拜喜神（パーシシン）といふ。（江蘇省）

朝食は我國ならば御雜煮といふところだが、支那では一般に煮團子を食ひ、午食には必ず白菜を食ふ。

北京並びに北支那の大部では、この日に『水土出門すれば財氣を失ふ。』といふので、水も汲まなければ、掃除もしない。また刃物を使用することも忌み、刀剪類はすべて前夜箱の中へ納めて厳重に封をして置く。

年始廻りは通常紅紙の名刺を置いて來るだけ餘ほど親しい間柄でなくては、上り込んで酒を飲むテナことはしない。だから至極簡單である。

農家では、元旦早朝、雲行きや風模樣を見て、その年の農事を卜する。また元旦から十二日まで毎朝井戸の水を瓶に汲み取つて、その重量を秤る。これは元旦を正月に擬らへ、二日は二月、三日は三月といふ順序で、一年十二ヶ月の水旱を卜するのである。

元夕には、一般に蕎菜で糯米團子を作り、爆竹を放つて竈神をお迎へする。

二日には、どの家でも財神を祭る。これは支那人にとつては最も有難い神樣だから必ずお祭りするが、滑稽なことにその本尊樣は至つてお粗末な木版畫像で、値段は大抵銅貨一二枚。それを毎年仕入れるのだ。お正月になるとキタナイ小僧共が『財神はいりませんか』『一枚一錢』などとまるで新聞でも賣るやうな調子で、小ウルサク行人につきまとふ。が支那人はたとへ不用でも決

してこれを『不要』とは云はない。必ず『財神はもう家に供へてある』といふ。不要といへば財神を追拂ふ意味になるから不吉だといふのである。如何にも支那人らしくて面白い。

財神を祭るには、このお粗末な畫像を床の間に掲げて、活きた鯉と鷄とを供へ、家人は必ず餛飩を作つて食ふ。この鯉を元寶魚、餛飩を元寶湯といふ。懲の皮の人一倍つッ張つた奴は、それだけでは滿足しないで、わざ〳〵土地の財神廟へ參詣して、木製の元寶魚一個を借りて來る。勿論いくらかの借り賃を拂つてのこと。これを床の間に飾つて置くと貧乏しないといふのである。で、その年に功德があつたら、翌年のお正月にはその數を十倍にして返へし、新規にまた一個借りて來る。

三日は俗に『小年朝』といひ、元日と同樣、掃除をしたり、水を汲んだりすることを忌む。

またこの日には、北京の旃檀寺を始め、あちこちのお寺で『打鬼』の行事がある。

五日は路頭神の誕生日。路頭神はまた五路財神ともいひ、玄壇、招寶、納珍、招財、利市の五神で、商人の最も尊崇する神樣である。各地の財神廟は鰕で鯛を釣らうといふ不心得者で、朝まだきから非常な賑ひである。その夜は各家でお祝ひの酒を飲む。これを俗に財神酒といふ。

必ずしもさうとばかりは限らないけれども、大體に於て京兆では元旦からこの日まで、飯も餅かず、菜も新しくは作らない。飯でも、饅頭でも、鷄魚羊豚の肉でも、すべて舊曆に煮て置いたものを蒸し返して食ひ、餅其他烤るべき必要のあるものは六日まで用ひないのが通例である。

八日は星祭。これは太陰、太陽、羅候、太歲といつた類の星が下界の人々の生れ歲を守つてゐるといふ信仰から來たお祭りで、京兆では、男は白雲觀の后土殿へ參詣して、本命星神を拜し、婦女は家にあつて、自分の歲より一つ多くの、たとへば十五歲のものは十六本、二十歲のものは二十一本の紙捻りを作つて、油に浸して燒き捨てる。この紙捻りを俗に燈花といふ。

十三日は燈節（十三日夜から十八日の夜半まで）の初日で、俗に『試燈の日』と稱し、北京では黃寺に於て打鬼の行事があり、農家では、秋穀で餅花を作つて、それが見事に出來上れば豐作の兆だと云つて歡ぶ。

燈節の間は、毎夜どの家でも盛際や軒先に美しい提燈を點もし、床の間には灶王を祀る。

また江蘇省あたりでは、子供達が燈籠を作つて村中を唱ひ歩く。燈籠は通常、竹骨竹張の大きな馬のやうな形のもので、頭と尻とに當るところの内部に蠟燭が點せるやうになつてゐる。が、

のである。

正月裡探妹正月正、我帶小妹妹看花燈、看燈是假意呀、妹呀、看你是眞情呀、似嗚呀哈新

翻譯すれば、

〔第四十二圖〕燈籠の圖

持つところも何もないので、移動させるには、一人その中へ入つて、底部を持つて歩くのである。先づ我國の『底拔け花車』の小型のものと思へば間違ひはない。この珍妙な燈籠を中にして大勢の子供達が村中をねり歩くのだ。そして人家の庭内に入つて、銅鑼や拍板で拍子を取りながら歌舞をやり、一しきり終ると爆竹を放つて次へ行く。その歌は十二月探妹といふ、一月から十二月まである數へ歌で、調子は此處に書くことができないが、歌の文句は左のやうなもの。

女探しはお正月、妹を連れて燈籠見るのをかこつけに、ネ妹よ、實はあの可愛い娘の顏を見る。

これは正月の一節だが、二月も三月も大體これと同じやうな意味の句でできてゐる。

燈節の六日間中、市井の最も賑ふのは十五日である。この日は昔から、平常深閨に閉ぢ籠められてゐる婦女が自由に外出することを許される日となつてゐるので、それを當込みの若衆や物賣りで何處も非常な賑ひを呈する。『女探しはお正月』なるほどそれにちがひない。上元、元宵、元夕、或ひは元夜などといふのはみなこの正月十五月の夜のことである。金瓶梅や紅樓夢にも元宵のことは詳しく記してある。支那の『お正月』はこの燈節を以て終る。我國には二十日正月だの月遲れの正月だのといふものがあるけれども、支那にはそんなものはない。

花朝（二月）

二月十二日は、花朝或は百花生日といつて、深閨に育つ娘達は、庭の樹木の枝に五色の絹ギレを結んだり、花神燈を懸けたりしてお祝ひする。

地方によつては、この日、若青達が花籃だの臺閣だのを作つて行列をやるところもある。臺閣といふのは、高さ五六尺の底なしの籠に、花だの人形だの鏡だの

を飾り、頂上に唐子人形式に美裝した一人の小兒を載せた一種の屋臺である。

また或地方では、この日、兒供達が凧の揚げ初めをする。その凧は必ずウナリの附いたものを用ひるのが例である。

一般にこの日天氣清朗なれば百物成熟すといはれてゐる。諺にも『有利無利、但看二月十二日』とある。

解天餉（二月）

毎年二月中下旬の頃には、各村の土地廟解天餉（カイテンナイ）といふ行事がある。解天餉といふのは、各村の土地廟――氏神社が、その總社（玉帝廟、所謂眞觀）へ献納する稅金を各自の氏子中から取り立てる行事である。

村の氏神に總社があつて、それが毎年稅金を徵收するなどといふと、一寸變に聞えるけれども、神佛の混淆の甚しい支那では、神社も寺院と同組織になつてゐるのだから別に不思議はない。つまり、お寺に本山があるやうに、神社にも總社があり、本山がその經費の一部を末寺に負擔させると同樣に、總社は毎年所要の金額を各氏神社に割當てゝ献納させるのだ。

さて、その當日になると、各土地廟では廟内に櫃を設けて、阡張（ツエンヂヤン）、元寶（ユーパー）（俗に錢糧といふ紙で作つたお金）の上納を待つが、なかなか猾い氏子等は容易に納めやうとはしない。

金が集まらなくては大變だから神主は早速人を雇つて催錢糧即ち上納金の催促をする。催促されゝば止むを得ないから渋面造りながら各自應分の金額だけ前記の紙錢を買つて奉納する。尤も中にはワザワザ紙錢を買ふのは面倒だといふので現金を納める者もある。これを俗に『解費献納』といふ。

かくて錢糧の徵集が濟むと、土地神の神輿を舁ぎ出して、總社であるところの眞觀の玉帝殿に行き、錢糧を献じ、集めて來た紙錢を焚く。この時玉帝殿の神主は大眞面目で、献金の額を玉帝に奉告し、若しそれが餘り少いと、神託と稱して小言を言ひ、ひどい時には、その土地神の像を神輿から引出して、衣冠を剝ぎ取つて檻禁する。

いくらケチな氏子でも、その本尊樣を取り上げられては堪らないから、驚いて村に歸つてまた何程かの金子を集めて來る。隨分莫迦莫迦しい話だが一般民衆が無智蒙昧で、極端に迷信深いのだから致し方がない。

清明節（三月）

清明節には各家で佛の供養をする。殊に新佛のある家庭では、必ず僧呂（或ひは道士）を招いて法要を營み、身内の者は喪家に往つて靈座を拜する。俗にこれを「新清明（シンチンミン）」といふ。

地方によつては、また清明の前日から立夏節までの間に、婿が必ず一度外戚父母の墓參をする慣習がある。その際には種々の御馳走を作つて、遠方であれば舟や馬で運び近くであれば轎ふとか提げるとかして行つて、先づ、墓掃除をして山神を祀つた後、それを陳列せる墓にまでも供へて歸るのが古くからの仕來りである。

立夏（四月）

立夏の日には、新しくとれた麥穗、櫻桃及び青梅の三つを城隍神に供へる。所謂初物を祖先に献ずるのだ。俗にこれを立夏三新といふ。そして、各家で麵筋（麩の一種、通常これに磨肉を包んで醤油で煮る）、饅頭、芥菜、鹹鴨蛋（鴨の家鴨の玉子）、海鮮（鰕の一種）、黄豆のハシリ、等を食ひ、燒酒か酒釀（濁酒）を飲む。

また、この日に大天秤で家族一同の體重を量つて、その目方を記して置く。さうすれば夏痩せしないといふのである。莫迦正直な奴は、立秋の日に再び檢量して果して減つてゐないかどうかを見るといふことだ。

佛誕會（四月）

佛誕會は、支那でも現今では以前ほど盛んでなくなつたが、それでもまだ〳〵田舍では相當盛んである。

この日、お寺では浴佛（ユーフー）——我國でいふ灌佛が行はれる。

ごの家でも阿彌飯をはじめくさ〳〵の供物を佛前に捧げて聖誕を祝するここになつてゐるが、工面のよいものは放生會などを行つたり、何やかやと大規模な催しをやつて祝ふのであつて、一寸想像の外である。

因に阿彌飯は俗に烏米飯（ウーミーファン）といひ、糯米を釆南燭の葉から採つた（通常搗き碎いて）汁液に浸して蒸したもの——つまり一種のこわ飯である。

四月八月の佛前の供物として缺くべからざるものとなつてゐるので、その頃になると市中到る處でこれを谷樹（ゴーシュー）（我國の柏）の葉に包んで賣り出す。

尤も中には葉に包まないで粽のやうに固めたものもある。

端五（五月）

端五は卽ち端午で、いふまでもなく五月五日である。

我國では、端午は昔から男兒のお祝ひ日のやうになつてゐて、今日でも男兒のある家庭では鯉幟りを立てたり、武者人形を飾つたりするが、支那では端五は他の五つの節句――清明節、中元、仲秋、冬至、年夜――とともに祖先のお祭をする日となつてゐるので、お祝ひめいたことは餘りやらない。だが、同じ節句でも端五、冬至、年夜の三つは俗に人節といふ位で、清明節、中元或ひは仲秋ほど重大な法要日ではないから、新佛でもあればまた別だが、通常はたゞ墓掃除をして、草花でも供へるのが關の山で、大ゲサの法要を營んだり、僧侶を招いたりするものはない。

そして、また商工業に携つてゐる者にとつては、端五は所謂三節張（端五、仲秋、年夜）の一で、過去數ケ月間の取引の總決算をしなければならない大切の日だから、トテモ落ついて法要などをしてはゐられないのだ。掛取りにも廻らなければならない、借金拂ひの工面もしなければならない、まかりまちがへば夜逃げもしなければならないといふ、恐るべき日に泰然として念佛を唱へてゐられたら偉いものだが、支那人もそこまで大悟徹底してはゐないらしい。

蟲干し（六月）

六月六日には、各地の寺廟で經卷の蟲干しが行はれる。

婦女はその手傳ひを十度すれば來世は男に轉生するといふので、我も我もと寺廟へ行く。そこで氣の利いた坊さんはそれらの者を集めて翻經會を催すのが例である。

また、この日、書籍繪畫の類を庭に曝すと蠹魚がつかないと言ひ傳へられてゐるので、ここの家でも各自所藏の書畫を取出して干す。

藩弈園の六月六日晒書の詩に曰く

『三伏乘朝爽、閒庭散舊編、如游千載上、與結半生緣、讀喜年非老至、題驚歲又遷、呼兒勤檢點、家世只青氈』。

また江蘇省あたりでは、この日、犬猫を河水に浴させると、人間が蚤や虱の襲撃から免れることができるといふので、各自飼養してゐる犬や猫を河に連れて行く。隨分莫迦莫迦しい話だが、それを大眞面目でやつてゐるのだからアキレたものである。

七夕祭（七月）

七夕祭は、我國ではソロソロ廢れて來たが、支那では依然として重要な年中行事である。

この夜は、商家でも農家でも庭前や露臺に祭壇を設けて、瓜、果物、巧果（うごん粉に白糖を混じて苧結の形に綜ね油で揚げたもの）等を供へ、美しい灯燈を飾つて、一家樂しく天の川なる牽牛、織女の二星をお祀りする。月の光軟かに風涼しく星のまたゝきも優しく艶かしいこの夜の祭は、婦女の祭としてふさはしいものである。

農家ではまたこの夜、天の川の顯晦をみてその年の收穫の豐凶をトふ。晦ければ不作、顯るければ豐作だといふ。

中元節（七月）

中元の行事は我國のそれと大差ない。この日、各家では佛壇を飾り、墓所を淨めて先祖を祀り、夕刻には、墓所に燈籠を點ずる。水上に蓮燈を放つものもある。平素は脂濃いものばかり食べてゐる支那人も、この日は終日精進料理を用ひ、生臭物は一切口にしない。

農家では、またこの日、田畑の間十字路に粉糰子、黍、瓜、蔬菜の類を供へて田神に豐作を祈願する。これ俗語に『看田頭』といふ。

中秋（八月）

中秋は俗に『八月節』といふ。三節帳、即ち一年中の三大決算期の一である。平素取引の多い商人などはそれこそ眼の廻るほど忙しい。が、夕刻にはみなその業を切り上げてお月見の宴を開く。お月樣への御供物には、我國ではお團子だが、支那では『月餅』といふ圓盒形餡入の燒菓子が用ひられる。その餡は赤豆或は棗くるみ、栗、胡麻、落花生等を混ぜ合せたもの、或は火腿に砂糖を加へたものなどいろ〳〵ある。また香斗といつて、線香を樹形にまとめたもの（支那の樹には方形、圓筒形の二種あるが、現今普通に使用されてゐるのは圓筒形のものである。）や、芋、蓮根、蓼、栗等の果物もなくてはならぬものである。

仲秋の夜には、また婦女の外遊が許されるので、市中の盛り場や寺院は深更まで非常な賑ひを呈する。現今では支那婦人の生活も餘程開放的のものとなつたからそんなこともないが、以前には、婦女は上元の夜と仲秋のとの二夜しか夜遊びは許されなかつたので、この二夜は彼女等に取つても、彼等に取ても一年中で最も樂しい、嬉しい、そして待遠しい夜であつた。蔡雲吳歈云「木

厚球壓鬢間香、雨雨三三姉妹行、行冷不縑羅袖薄、路遙翻恨繡裙長」

重陽信（九月）

重陽信といふのは立秋後の第一寒である。この日には菊花の酒を飲み、重陽糕（米粉を水で練つて蒸したもの）を作つて祖先を祀る。

職工はこの日から夜業を始める。所謂做夜作（ツオーヤーツオー）である。蔡雲昊歌は云「蒸出重糕滿店香、便然風雨古重陽、織工一飲登高酒、篝火鳴機夜作忙」

またこの頃各地で秋興といふことが行はれる。秋興は俗に鬪蟋蟀ともいふ。即ち蟋蟀を鬪はせて遊ぶのである。賭博好きの支那人のことだから、その勝負には無論金を賭ける。隨分フザケタ遊びだが、相當古くから行はれたことらしく、現今でも仲々盛んである。

十月朝（十月）

十月朝、卽ち十月朔日には戸毎に祖先を祀る。

或地方では、この日、貧富を問はず冥衣（紙製）を作つて燒き捨てる。この日を燒衣節といふ所以である。

この頃、北部竝びに中部支那では種々の蔬菜類を醃漬にして貯藏する。我國で大根や漬菜を漬け込むのと同じである。この醃漬の菜を支那では藏菜又は鹽菜（イエンツアイ）といひ、その新漬を水菜といふ。

冬至節（十一月）

冬至節は支那では諸節句の中で最も重要なものとなつてゐる。親戚朋友間ではその數日前から食品其他の贈答が行はれ、その前夜には各家に酒宴が開かれる。そして、當日には各家にその祖先の遺像を掲げて食饌を供へ、親戚朋友は互に往來して供養する。また里歸りをしてゐる嫁は、この日には必ず聟家に歸る。一年中で最も重要な供養日だからである。

小年夜（十二月）

小年夜といふのは十二月二十四日の夜で、この夜は、何處の家庭でも竈神をお祀りする。何でも支那の竈神はこの夜下界を去つて天界に昇り、その一家の者の一年中の所業を上帝に報告して、善行あるものには次年に福を授け、惡行あるものには禍を下すのださうだ。ドウモうるさい神樣があつたものだが、何しろ一年中のことを一々報告されては堪らないから、精々御馳走をして御機嫌を取つて置かう。といふのがこのお祀りをする魂膽である。そこでこの祭には女は干與することを許されない。女は平常家内に居ることが多く、常にその惡業を竈神に見られてゐるから、竈神の御機嫌を取り結ぶには不

適當だといふのである。しかし、男でも平素家居して餘り外出しない者が尠くない。さういふ輩や、トテモ普通のことでは御機嫌を取り結ぶことができさうにもないと思ふ連中は、先づ臘元寶謝灶糰といふウンと甘い菓子を供物にする。前者は膠狀の粗製飴、後者は吾國の大福餅に似た餡入の餅だが、孰らも恐ろしく甘くて粘り强いので、甘黨の竈神がウカ〳〵手を出したら、忽ち口が封緘して物を云ふことができなくなる。從つて家内のことは一切上帝の耳に入らない。次年は先づ安らかに送られるといふ考である。莫迦莫迦しい話だが、事實大眞面目でそれを信じてるのだからやりきれない。

除夕

除夕は一年中の總決算をする時であるから、商工業にたづさはる者はもとより他の人々も相當に忙しい。商家は夕方から元旦の明け方まで提燈持參で掛取りに廻る。

この夜は、二十四日の夜、上天した竈の神が歸つて來るので、各家では、竈神馬（神像圖を廚子に納めて、酒果餌餅を供へる。所謂接竈である。尤も中には、これを正月十五日にやる者もある。

また、寢室には茶酒糕果等を供へて財神を祀る。そして一年間安眠ができるやうにと祈る。

蒙古人の生活

蒙古包

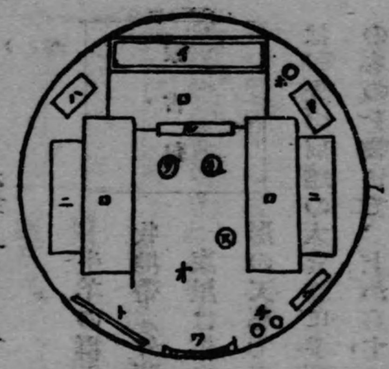
牛羊の群とともに、綠草を尋ね、淨水を求めて不斷の移動をつゞけてゐる純遊牧地帶（外蒙古の大部）なる蒙古人の生活は實に簡易そのものである。

家屋は俗に「蒙古包（モングベー）」といふ直徑二間乃至二間半、高さ二間ばかりの低い圓筒形の天幕であつて、組立て取外しは極めて容易である。即ちこれを組み立てるには、先づ前述の大きさに手頃の木で矢來のやうなものを造り、その上に大きな傘の骨といつた形のものを載せて、上からすつぽりと毛氈をかぶせるだけのこと、家族二三人で二時間か三時間かゝれば樂にやり了せる。

羊の毛で造つた毛氈であるから、新らしいうちは眞白で實に綺麗だが、少し日が經つと、汚れて黑灰色となる。しかし、何しろ大きなものではあり、材料は羊の毛といふ偉いものなのだから

新規に作りかへるのは容易でない。殊に貧しい者にとつては大事業である。そこで、蒙古では、『白い家』といへばお金持、『黒い家』といへば貧棒人といふ意味になる。

内部の模様は、大體に於て第四十三圖に示した通りで、實に簡單明瞭である。宛も船室のやうでない。即ち、中央部に一個か二個の竈が据ゑてあり、その側には燃料を入れた箱が置いてある。燃料は主としてこち〳〵に乾燥した家畜の糞。何しろ草原であるから木は容易に得られない。そこで彼等は最も手近に得らるゝ家畜の糞を拾ひ集めて燃料とするのであるが最も好く燃える。そして火力の強いのは牛の糞、それに次いでは羊の糞、馬や駱駝の糞はずつと品が落ちるとのことである。



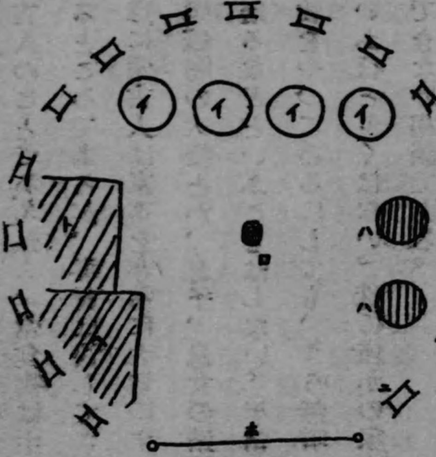
〔第四十三圖〕蒙古包の内部

イ 主人寝臺　ロ 毛氈　ハ 佛壇　ニ 衣類食料品入　ホ 酒壺　ヘ 食器棚　ト 物掛　チ 水甕　リ 燃料　ヌ 机　ル 土間　ヲ 入口

却説、その竈と燃料箱との周圍三方（挿畫參照）には、毛氈が敷き詰めてある。入口から向つて正面に當るのが主人の座、右側のが主婦の席、左側の毛氈は子供や使用人の席といふわけであるが、來客はすべて主人の座へ招じる。

入口には毛氈の垂れ幕が下げてある。その左手――入口から這入るとすぐその右手の取附きには飲料水が置いてある。また此處に簡單な炊事場が設けられる場合もある。衣服、食料品等の容器の配置は大體に於て挿畫に示した通りで、なか〳〵便利にできてゐる。

とにかく、一個所に落附く期間は精々半年か一年で、絶えず次から次へと移轉するのであるから、家具類はすべて輕便で、しかも堅固なものばかりである。無論數も多くない。天幕をはじめ、一切の小道具を持ち運ぶのに僅か一臺か二臺



〔第四十四圖〕遊牧民の部落

イ 一家族の蒙古包　ロ 飲料水　ハ 燃料　ニ 車輛（圍廊の代用となる）　ホ 馬繋　ヘ、ト、牛羊の圈

の牛車で充分である。

蒙古人の常食物

遊牧を生業とする蒙古人のことであるから、常食物は主として獸肉類であらうとは蓋し何人も想像するところであるが、事實は決してさうではない。一體牧者はみなさうであるが、殊に蒙古人は家畜を非常に大切にする。だから彼等は、何か祝ひ事――例へば、喇嘛廟の大祭とか、息子、息女の婚禮とか出產のお祝とかいつた時でもなければ、決してこれを屠るなどといふことはしない。平常は僅かに斃死したものを食ふだけである。いくら原始的の放牧をやつてゐるにしても、さう無暗に斃死しはしないから彼等の口に入る獸肉の量は、主食物といふほど多くはない。殊に僅かの家畜しか持たぬ貧者には肉を常食とするなどといふことは到底できない相談である。

しかし、いくら貧しい者でも、それを生業としてゐる以上、百頭や二百頭の家畜は持つてゐる從つて、肉こそ餘り口にできないが、ミルクは實に豐富である。毎日毎日何斗といふ新鮮な乳がとれる。無論、何れの家でも餘るほどとれるのだから、これを賣つて金に代へるなどといふことは先づあり得ない。只でも貰ひてはないだらう。されば、彼等はこれを盛んに飲む。そして、餘

つた分は、大甕の中へ貯へて置き、その表面へ浮んだ脂肪分からはバターを採り、下の沈澱物からは、一種のチーズを製造する。また別に牛乳を原料とした酒や、羊の乳を酸化させた一種の清涼飲料といつたものも造る。別に大した機械など用ひるわけではなく、たゞ簡單な方法、いはゞ甘酒でもつくるやうな調子で製造するのだが、製品はなか〳〵立派なものである。

常食としては、通常、それらの乳製品と、蘇子（ミーアー）（黍の一種で、黍よりは一層野生的なもの）とを用ひるのであるが、その料理法は實に簡單なものである。――卽ち先づ通例、徑二尺くらゐの鐵鍋を据ゑて湯を沸し、その中へ件のバターかチーズかを投入し、更に少量の蘇子を入れてどろ〳〵のお粥にするだけのこと、これを食べてしまへば、それで一回の食事はおしまひといふわけである。

食事の回數は一日に何回と定まつたこともなく、空腹になればやり、好い水の邊に到ればやるといつたあんばいで、幾度でも繰り返す。が、何時も御馳走は前記のお茶とお粥とである。牛や羊の肉が出ることはあるが、野菜類の出ることは殆んどない。穀物も件の蘇子のほかには、極く稀に隊商の齎す小麥粉が得らるゝくらゐのもの、それもよほど運がよくなければ手に入らない。

かく穀物や野菜が不自由なのは、農作をやらないからである。田畑を造れば、それだけ牧草地を尠くする、また、耕作などは家畜を持たぬ者、卽ち牧者たる資格のない貧民のすることだ、といふ觀念を、先天的に持つてゐるので、いよ〳〵草の生ぇない荒地か何かでなければ耕地にはしない。そんな場所に眞似ほどの畑を作つて見たところで、ろくなものはできないから、結局、いゝかげんで止めてしまふ、といつたわけで、事實上、廣大な蒙古の牧草地帶からは、穀物や野菜は殆んど生產しないと云つていゝ。これが交通の便のいゝ土地ならば、たとへその土地にはできなくとも、他から容易に得らるゝから、不都合はないが、何しろ、蒙古の草原は海岸を距ること遠く、しかも鐵道はおろか道路すらもろくにないといふ不便な土地だから、他の土地から多量の物資をとるなどといふことは到底望まれない。たとへ得られたにしても、それは非常に高價なものとなつて、貧弱な遊牧者の手には容易に入らない。そこで蒙古の遊牧民はお粥ばかり食ふといふことになるのである。

足らないものを節約するのは當然であるが、蒙古人は魚類は國內に相當多い河川や湖水に行けばいくらでも漁れるのにもかゝはらず、絕對的に食用に供しない。昔から魚類を食へば龍王の祟りがあると云ひ傳へられてゐるからである。

唯一の食器

食物が簡單だから食器もいろ〳〵のものを用意する必要はない。富者はともかく、一般の人々の用ひる食器は、たゞ一個の木椀と、一對の箸だけである。

木椀は、樺の木を彫つて、淡黃褐色に塗つたものが普通であるが、凝つたものは種々の珍木で造り、中には內側に銀などを鏤めたものもある。これはめい〳〵が一個づゝ常に携行するもので、使用し終れば、長い舌ですつかり嘗め廻しておく。隨分汚い話だが、屢々、飲料水すらも足らぬ勝ちの苦しい旅を經驗して、知らず知らずのうちに水を極度に節約する習性を養つた蒙古人には、食器の洗滌に尊い水を使ふなどといふことは、到底勿體なくてできないのである。

質素な衣服

蒙古人の衣服は、支那服と殆んど同一形式のものであるが、たゞ一つ蒙古服には、支那服にないものがある。それは帶である。この點は一寸わが風俗とよく似てゐる。一般に生活程度が低いので、絹ものなどを着る者は極めて稀で、大抵は粗末な綿服を用ひてゐる。が、交通の不便な地方では、綿布もなか〳〵手に入ら

ないので、平常は羊の皮革でつくつた一種特有の服を用ひる者が多い。衣服の色あひは赤、青、黄、淺黄等の單色が普通で、飛白や縞ものは殆んど見られない。

呑氣な挨拶

蒙古人の應答挨拶はなか〳〵面白い。先づ他家を訪問する時には、その家の前へ馬をとめて『ノヘウヂー』(犬を見てくれ)と大聲を擧げる。自分が犬を連れて行つて見せるのではない。先方に犬を始末して呉れと注意するのである。何故そんなことをやるのかといふと、蒙古では何れの家でも家畜の番をさせるために十數頭乃至數十頭の犬を飼つてゐる。

ところが、それは役には實によく立つが、恐ろしく氣が荒くて、飼主以外の者を見ると猛然としてこれに襲ひかゝる。何しろ仔牛ほどもある大きな奴だから、到底仕末に行くものでない。そこで、他家を訪れる際には、先づ馬から降りる前に、犬の始末をしてくれと先方へ注意するのである。

その聲を聞いて先方の主人又は家族が戸外に出て來ると、始めてお客は安心して馬から降り、屋内に這入つて『アモラハン』(御機嫌よう)とか『モンドー』(今日は)とか簡單な挨拶をする。主人は自分の左側に席を設けてこれを招じ、先づ最初に嗅煙草(かぎたばこ)を出す。すると、お客も同樣に煙草入を出して主人をはじめ、その家族一同——子供にまですゝめる。嗅煙草といふのは、種々の香料の粉末を混和したもので、その用ひ方は、極く少量——耳掻で一杯ほどを指の先で撮んで鼻から吸ひ込むのである。

嗅煙草の交換が濟むと、お互に牛馬の安否を問ひ交す。それが濟むと、客は主人に『テーベニー』(煙草はあるか)と問ふ。主人は早速、自家の煙管を出してやる。かくていよ〳〵話の本筋に入るのである。その呑氣さ加減、見てゐてさへも氣が揉める。

婚姻の習俗

蒙古人は一體に早婚で、男女とも十六七歳になると結婚する。が、家長の權力が非常に強いので、配遇者の選擇は男親によつてなさるゝのが通例で、所謂自由結婚などは事實上絶無と云つていゝ。

緣談が纏まると、先づ男家から女家への相當の贈物をするが、それは殆んど牲畜に限られてゐる。そして、その牲畜の數は奇數、殊に九のつく數を尙ぶ。わが國では『九』は『苦』に通ずるといふので嫌ふのであるが、蒙古人はその反對で、これを最も緣起の好い數として

るるのである。たゞの九頭も贈り得ない場合には、仕方がないから七頭、五頭、或ひは三頭とする。いくら奇數でも一頭では贈物にならない。

蒙古の婚禮は二日かゝる。先づ第一日には、婿が近親者とともに女家へ行く。この場合、婿は禮服を着、弓矢を帶びて行くのが通例である。無論、婿も附添ひの近親者一同もこぞつて騎馬。

女家へ到着すると、　は先づ最初に外騎姑と對面して、これに若干の贈物をするのであるが、この贈物は家畜ではなく、綾か布である。綾は佛像の模樣のついたものが最上となつてゐる。それが終ると、女家では羊の丸燒と牛乳の酒とを出して一同をもてなし、此處に盛んなる祝宴が開かれる。かくて、婿の一行はそのまゝその夜は女家に一泊して翌朝歸るのが通例である。

第二日には、いよ〳〵花嫁が男家へ行く。矢張、花嫁も附添の人達もみな騎馬である。そして面白いことには、多くの場合、花嫁は別に禮服などは用ひない。平常着のまゝで嫁入りするのである。

花嫁の持參するものとしては、先づ牲畜三五頭が普通であるが、貧家が格別に富んでゐる場合には、牲畜の外に二三人の奴婢を連れて行く。無論三五頭の牲畜すらも持參できない貧家の娘はたゞ四五枚の着替と若干の小間物類とを持つて行くだけ、實に簡單なものである。

さて、この日、男家では室内を掃き清めて、上座に火を焚き、席を設けて花嫁の倒着を持つ。そして、花嫁が到着すると、男家の緣者一同は戸外に出てこれを迎へ、直ちにその焚火の前へ花嫁を導いて、婿とともにその火を拜させる。この焚火を拜するのが唯一の儀式であつて、それ以外には何もないのだから、終れば、そのまゝその場で祝宴が開かれ、雙方の近親知己一同、打ちくつろいで飲馬食する。婿の親達や、近親者と花嫁との挨拶はその宴席に於てなさるゝのが通例である。

奇拔な葬禮

普通の葬禮はわが國のそれと同樣、火葬と土葬とであるが、興安嶺附近には、それ以外に野葬といふ風變りのものがある。

野葬といふのは、死骸を山野に放置して、烏獸の餌にしてしまふといふ亂暴な葬禮であるが、興安嶺附近の蒙古人は、これが死者の靈魂をして無事に極樂淨土へ到達せしむる最上方の法であると信じてゐるらしい。

また、これは興安嶺附近ばかりではないが、主として同地方から庫倫にかけた外蒙の住民間に

は、死體を一旦火葬にしたうへ、骨を石で粉碎して團子にまるめ、地方の大きい喇嘛寺へ納めるといふ奇風がある。隨分突飛な習俗で、一寸本當とは思へないが、これも前述の野葬の場合と同じ迷信からはじまつたことで、しかも古くからかなり盛んに行はれてゐることなのである。消息通の話によると、何でも極端な迷信家は、土地の喇嘛寺では功德が薄いといふので、わざ〳〵庫倫へ持つて行くとのことである。

蒙古の社會組織

蒙古人の社會は大體に於て、王族、喇嘛、平民の三階級に分れてゐる。王族といふのは、王侯の後裔、重臣の子孫等――いはゞ蒙古の貴族階級であるが、その數は非常に多くて殆んど全人口の一割にあたる。從つて中には零落して一般平民と區別のつかぬ者も尠くない。

喇嘛は喇嘛僧の階級であるが、これは蒙古ではなか〳〵勢力があつて、殆んで王族と同格と云つていゝくらゐである。が、風儀の惡いことは眞に言語同斷で、恰度、インドの『バラモン』階級のやうに、一般民衆の鼻つまみものとなつてゐる。

王族といひ、平民といふもみなひとしく汚い衣服を着て、牛や羊を追ひ、蒙古包に寐起きしてゐるのであるから、外見はどれが王族だか平民だか一向判らないが、階級的差別はかなり嚴重であるらしい。

〔第四十五圖〕蒙古の喇嘛僧

無理遣に出家させる風習

蒙古では「一人出家すれば九族天に生ず」といふので、一家内に男の子が二人以上ある場合にはその中の一人を出家せしむるのが古くからの慣例である。そこで、次男に生れた者は大抵十二三歳になるといやでも應でもその地方の大きい喇嘛寺へ修業のために送られる。

されば、蒙古には大規模の修道院とでもいふべき喇嘛寺がいくつもあるが、その最も有名なものは、東蒙古の名刹葛根廟（ゴドジ）である。この寺には常に

四五百人の僧侶がゐる。無論それは若僧だけではなく、中年者や老人をも合算しての話ではあるが、とにかくその大多數は次男であり、無理遣に坊主にされてしまつた輩なのである。

この大勢の僧侶は、數十の僧房に分れて住み、一生をこのお寺で過すのであるが、その間の生活費は一切自辨することゝなつてゐるので、生家の富裕な者は非常に贅澤をして、のらりくらりと日を送つてゐる。何しろ大多數は無理遣に出家せしめられた輩であるから、何時までしても悟りは開けない。ところへ困るほど暇なのだから、どうせろくな事は考へない。いろ〳〵よからぬことばかり企てる。そこで一般の人々から鼻つまみものにされるといふことになるのである。

が、貧しい家の子は、一生涯生家から生活費を送つて貰ふなどといふことは到底できない相談であるから大抵寺の雜役夫か富裕な朋輩の執事のやうなことをやつて暮しを立てゝゐる。

蒙古人の迷信

極端な天然物崇拜

蒙古人の迷信として第一に擧げなければならないのは、天然自然物崇拜である天然物、卽ち山川草木の類を尊崇する風は、何れの民族にもあることで、さほど珍しくはないが、蒙古人の自然物崇拜は他に類な例のない極端なものなのである。

彼等はあらゆる天然物、自然物に神靈があると信じてゐる。森には『森の神』があつて獸類の繁殖を司り、野原には『野原の神』があつて牧畜を司る、また河には『河の神』があつて人畜を守護する……といつたあんばい。山でも河でも特に高いから、又は大きいから神聖視するといふのではなく、如何に低くとも或は小さくとも、山であり、河であればすべて一樣に神聖なものとしてゐるのである。

されば彼等は、新たに溪谷を發見すれば、これに神酒を供へて冥護を祈り、遠く高嶺を望み見れば、地上に跪いて叩頭平身これを尊崇するといふ風で、如何なることがあつてもそれらのものを冒瀆するやうなことはしない。

婚禮の時に、新夫婦が揃つて爐の火を拜する風習も、爐にはその一家を守護する『火の神』がゐるといふ信仰から來たことなのである。

奇拔な迷信

その他、蒙古人の迷信には隨分奇拔なものが多いが、その最も顯著なのは左のやうなものである。

先づ蒙古人は、衣服を洗濯すると『地の神』の罰を受けると信じてゐる。だから、彼等は一枚の着物をぼろ〳〵になるまで着とほすのが例で、どんなに汚れても絶體的に洗はない。正直正銘の『北雷』である。

また、河川の流で沐浴すると『河の神』に叱られるといふので、如何に暑くともこれに飛び込んで汗を流すなどといふことはしない。

それから、すべて鑿場と稱せらるゝ地の砂や土は、腹痛の妙藥であるとて、珍重する。どういふ方法で役立てるのか自分は知らないが、或人の話では、何でも袋か何かに入れて置いて、腹痛が起つた際、腹の上にのせるのだといふ。眞にありがたいものだと信じてゐる者には、たゞの水でも隨分功驗があるのだから、土だとてまんざら役に立たないことはないだらうが、特に腹痛だけに利くと限定されてゐるところが面白い。思ふに彼等の最も恐れる病は腹痛なのだらう。

『魚類を食へば龍王の祟りがある』といふ迷信が、行はれてゐることは既に記したが、食物に關する迷信には、も一つ變つたのがある。それは、雷に打たれて斃死した家畜を食ふと必ず病氣になるといふのである。どういふところから來た迷信であるか、自分は知らないが、とにかく彼等は病死した家畜は喜んで食ふが、雷に打たれて死んだのは絶對的に口にしない。

また、これは少し話がきたなくて恐れ入るが、蒙古人は立つたまゝで放尿をすると、佛の罰を蒙ると信じてゐる。だから女は勿論、男も必ず蹲つて用を足す。

オボ（鄂博）

茫邊たる蒙古の大平原には、その位置方角を決定する助けとなるものは何もない筈であるが、其處にはちやんとオボ（鄂博）といふものがある。

それは、直徑三四間もある圓筒形の丘陵（又は小石を積み上げた塚）で、高さは二丈乃至四丈くらゐ、その頂には柳條を束ね、中央には木竿を置いて標旗が掲げてある。

水平線の彼方に見ゆる黒一點、それはいふまでもなくオボである。蒙古人に道を尋ねると、必ずオボを起點として右せよ、又は左せよと教へる。されば、オボは旅行者にとつては絶好の道しるべ、宛も大海を航する船舶に對する燈臺のやうなものであるが、これは何も道しるべとして築

造せられたものではなく、元來は旗（旗人の封土、卽ち藩のやうなもの）と旗との境界標として設置せられたものである。

ところが、現今の蒙古人は一般にこれを古代人――自分達の古い先祖の墳墓であると信じてゐるので、毎年陰曆六月十五日又は七月十三日には、盛大な祭典を執行する。のみならず、水害や旱魃の起つた場合や、部落内に重病人のできた際なども、同樣のお祭を行ひ、その加護をお祈りする。されば、オボは蒙古人にとつては神聖なものであり、犯すべからざるものである。

蒙古旅行

旅行の困難

滿洲の名物は高粱と馬賊で、旅行者が常におそれるのは後者である。そこで滿洲の奥、蒙古は更に一層おそろしい土地であらう、到底旅行などはできない蠻地にちがひないとは、蓋し多くの人の夢想するところである。が、古には、昔はいざ知らず現今では馬賊もゐなければ、野獸もゐない。たゞ人間世界を超越したやうな平和の民がゐるのみである。

しかし、何分交通の便が極めて惡い上に、何等の設備もない――宿屋はもとより道路すらも滿足なものはないといふ全くの未開地であるから、旅行は決して樂ではない。費用も隨分かゝるし肉體的並びに精神的の苦痛も、汽車や汽船で暢氣な旅をするのとちがつて非常である。大倉喜八郎のやうに、大勢のお供をつれて、自動車か何かで、ちよいと口もとだけを見て來るのならば、別に苦しくもないであらうが、内地深く入つた場合の困難、苦痛は眞に想像以上である。蓋し、蒙古――わが勢力範圍たる南滿洲とは指呼の間にある蒙古の事情が、未だによく知られない最大の理由は、旅行が困難なためであらう。だが、われ〳〵は、たゞ旅行が困難だから、行つても直接の利益はないからといふくらゐのことで、この重要な土地を等閑に附して置いていゝであらうか。現に外古蒙は事實上既にロシアの勢力圈内に入つてしまつた。内蒙古もどうやら危いらしい。此際われ〳〵は餘程の決心を以てかゝらなければ、必ず千載の後に悔を貽すことになるであらう。

閑話休題。かく蒙古の内地は旅行が困難なので、眞相を知るに足るべき記錄が非常に尠い。一體、或土地の事情――殊に人情風俗等の細微な點は、實際にその土地へ行つて見聞しなくては、

本當のことは判るものでない。この意味に於て、旅行記などは、その土地の人情風俗を研究するには最も好い參考書の一と云ひ得るのであるが、蒙古には、從來餘り行つた人がない。殊に大規模の旅行をやつた人はわが國には極めて尠いので、旅行記も眞に價値のある、或は吾人の參考となるものは極めて稀である。が、かういふことにかけては矢張、軍人は偉い。今日までに出版された蒙古旅行記中、眞に信用のできるものは、大抵、陸軍關係の人々によつて著はされたものである。

次に關東都督府陸軍部で編纂した『東蒙古』の中から、陸軍大尉山縣初男、同一等主計鈴木晟太郎兩氏の蒙古旅行記の一節を摘錄しやう。

蒙古旅行記の一節

五月二十一日(木)晴　西北風

午前五時五十分、余の老案内者騎馬にて來る。王府の護照（證明書）を所持せり。これ昨日案内の不確實を責めし故ならんか。五時半一行は騎馬の案内者を先頭として、牛車一輛に荷物滿載し、通譯及從者交互に牛を馭しつゝ徒歩にて出發す。

雜草一面に生ひ茂れる廣野を、車轍を辿りて行進す。蓬、苜蓿の類正に萌芽しつゝあり。又、蜥蜴多く、ちよろ〳〵と脚下に走れるを見る。道路沙質にして、時々沙丘の横はるあり。牛車の行進容易ならず。

「バカスエーラ」(二戸)「ショテシネーラ」(三戸)を經て、午前十時、「ホワホツショネーラ」(三戸)に着、土人の家に入り打尖兒す。炒米に黄油を混じたるもの及び、奶豆腐（乳製品）を出すもはや慣れたる故ならん、左程に困難なく食ふを得たり。此村は今や移轉の最中なりき。

十一時三十分、更に出發「コゴンスルキネーラ」(七戸)を過ぎ、西遼河（セルムロンゴー）の源たる西喚木倫河に達す。この附近に於ける西喚木倫河は、幅最も廣き部、約五六百メイトルに亘り、處々に中州あり。雨期に於ては、淹沒して里餘に亘る處あり。河岸に窪地多く、河底泥沙にして地理を知るにあらざれば、渡渉困難なり。

案内の兵先に立ちて河岸に到りしに、馬を深泥中に陷れ將に淹沒せんとす。茲に於て、一行は悉く之が救助に從事す。馬の尾を握り、或は首を抱き、曳々聲して引上げ漸くにして死なせざるを得たり。この附近を通過するもの〻特に注意を要するはこの深泥たり。外表一見乾けるが如きも注意せずしてこれを渡る時は忽ち陷沒す。

河水混濁して深さを知らず。然れども河の兩岸に各一本の標木を偖立しあるを以て、その渡渉點たるを察すべし。徒渉點の河中約七十メートル、鈴木氏先づ躶體となりて偵察に從事す。その結果人は躶體となり、車は荷を下さゞるべからざるを知り、一行悉く躶體となり、各々荷物を肩にして往復すること數回、漸くにして荷物を前岸に移し、牛車は空車のまゝ渡渉せしむこの日寒暖計は華氏八十度を示せるも河水稍々冷かにして、多少の寒さを覺えたり。然れども、四平街以來十日間入浴せざりし身體を圖らずも洗ふことを得たるは亦、幸なりといふべきか。(下略)

五月二十八日(木)曇　行程七里强

午前五時出發す。王府の厚意により牛車一輛を貸與せらる。即ち余等の所持の牛車と合し二輛となる。荷物を之に分載せるを以て、一行は交互に乘車するを得。この地より哈拉哈(ハラハ)に達するまでは、到る處この例に準じ牛車一輛及び案内者を得たるため、旅行上の便宜非常なりしことは余等の深く西札魯特王に謝するところなり。「オッセンイヒネーラ」(水源村の意、戸數三十)を經て、愈々西札魯特より東烏球穆泌(クスリー)に通ずる興安嶺に入る鞍部の一たる「ノインタバン」を越ゆ。この附近標高六七十メートル、杏、楡樹ところ〳〵に繁茂す。

〔第四十六圖〕高原を行く馬車

午前十時「ホワホツショネラ」(十戸)に着し、一の蒙古包に入り朝食を喫し了りたる頃、外面遽かに騒がしく馬蹄の響き追々近き來るを聞く。折柄戸外にありし土人は倉皇として入りて曰く、鬍子(匪賊を稱す)來れりと、暫くにして三騎あり、戸外より呼んで曰く、我等は阿爾科爾泌旗の兵なり、鬍子は已に數里(支那里)の間に迫れり。戸外にある牛車は何者の有なるや、若し商人ならば速に他に避くるを要す。然らざれば、掠奪を免れざるべし、と、言ひも了らざるに馬を飛ばして去る。(後に聞けば、この兵は逃げながら沿道人民に賊の來れるを報ずるものなりき)

こゝに於てか余等は、鄭家屯以來二週日間、日々噂されたる蒙匪なるものと愈々遭遇せざるべ

からざる機會に立ち至れり。然れども余等は、前途遼遠にして、任務の未だ達成せざる間に好んで危險を冒すは策の得たるものにあらずと信じ、直ちに蒙古包を出でゝ賊の到らざるに先だちて出發せんと欲し、案内の土人は先に立ちて連りに牛車に鞭うちつゝ行くこと約五六百メートルならざるに、後方より二騎の馬上銃を擬して追ひ來れるものあり。

彼は乘馬、余等は徒歩、加ふるに牛車を有するを以て遂に約二百メートルに接近せられ、愈々匪賊の余等を追ふこと確實なるを認むるに到れり。こゝに於てか余等はもはや如何ともすべからず、この上逃避の卑怯をなすは無益なるを知り、遂にその位置に停止して彼等來るのを待つ。やがて彼の二騎の近くを見れば、共に年齢二十歳を出でざるが如き少年にして、一は支那兵一流の赤き胴卷を着し、一は普通の汚き支那服を着せる蒙古人なり。余等に問うて曰く、君等は何んにして、何れより來り、又何れに向つて行かんとするや、又如何なる所用ありや、と、余等はこれに答へて曰く、余等は日本人にして、商況視察のため哈拉哈地方に赴くものなり。奉天より汽車にて四平街に到り、それより各王府を經てこの地に達せり、と。彼等はこれを聞き何等妨碍を加ふることなく直ちに馬首を回らせり。この時已に彼等の後續部隊は陸續として余等の先刻休憩せし村落に進入し、その一部は直ちにこれを通過して行進を續行し、一部は村落内に停止せり。

余等は互に無事なりしを祝しつゝ行進を續けたるに、未だ三百メートルならざるに、更に二騎の後方より追ひ來るに遭ふ。怪しみながらも再び停止して之を待てば、即ち先に來りし兵なり。曰く、余等の統領君等を見んと欲して村内にあり、速かに來るべし、と。余等曰く、余等は前途を急ぐものなり。且つ見らるゝ如く徒歩にて、之より引返すこと頗る困難なり。諸君は乘馬なれば行動容易なるべし。請ふ余はこの地に停止して君等の統領を待たんと。彼曰く、そは不可能なり。こもかくも一應歸らるべし。決して恐るゝを要せずと、余等曰く、然らば余等のみ行かん、牛車は從者とともに此處に止め置くも可ならずや。彼曰く、斷じて不可なり。余は君等を帶同すべく統領の命を受く。是非とも連れ行かざるべからずと、余等は提議の到底容れられざるを見て、已むを得ず彼等とともに引返せり。

村に到れば、彼等は余等を先に余等の休憩せし蒙古包に誘導せり。依つて余等兩人は通譯を供うて包内に入れば、統領らしきもの年の頃四十五六、身の丈け五尺五六寸、容貌引しまりて風采稍々揚れるが、村田拳銃の如き銃床を有する拳銃を肩よりつり、彈藥を胸部より背部に帶革にて

巻きつけ、胸には佛像の龕を掛けたり。

この者を中央にして約十四五名の比較的體裁好き風體をなせるもの左右に居竝び、威風堂々四方を拂ふごまでは行かざるも、多少の威儀を備ひあり。余は請ぜらるゝまゝ直ちに統領の右席に座し、鈴木主計は統領の左に座す。座定まるや統領莞爾として曰く、圖らず今日諸君と遭ふ。誠に有緣と云ふべし。僧門（お互の意）はこれより朋友たるべしと、依つて問ふこと前の如し。余等答ふること前の如し。且つ曰く、古來蒙古兵なるものを知らざる今日、圖らずも貴統領に會し貴部下の軍容堂々たるを見て欽仰措く能はず、思ふに貴軍は仁義の師、猥りに貧民を掠奪し、行旅者を苦しむるが如きは貴統領のなさざるところなるべし。今貴統領この仁義の師を以て天下を横行す。誠に丈夫の快事と云ふべしと。彼大いに喜んで曰く、貴言敢て當らずと雖も、余は將に之を服膺せんのみ、余は露人とは親交あるも、未だ日本人を知らず、爲れども今已に朋友たり、余等も之より哈拉哈方面に歸るものなれば、諸君を同行すべきやと、余等曰く、そは甚だしき幸なり、然れども或は恐る累を統領に及ぼさんことを、と、體よくこれを拒絶せり。

これ、統領の眼前にては彼等部下の匪卒も敢て强請がましき行動をなさざるも、統領の見ざるところに於ては、匪卒は貪慾飽くことを知らず。彼等と同行するは、害ありて益なきを知ればなり。（下略）

余等に統領に葉巻一箱を贈りたるに固辭して受けず。再三押問答の後、漸く之を受領せり。別れに臨んで統領は、部下を顧みて曰く、誰か銀子を所持せるものなきか、あらばこの旅客に與へよ。旅行には、金錢の必要あるものなりと、部下は異口同音に、銀子は牛車に積みあるを以て茲には所持せざる旨を答ふ。統領曰く、然らば致し方なし。余は東翁牛特の散布といふものなり。君等もし前途如何なる兵に遇ふとも、散布を知れりと語る時は安全なるべしと、余は自己の名刺を出し、且つ統領の名刺を求めたるに、蒙古人は名刺を所持せず。然れども單に散布を知れりと云ふを以て足れり。必ずしも名刺を要せずと、かくて、彼等は隊伍を整へつゝ、悠々として北に向つて去れり。

その兵數約八十、（悉く乘馬にして、銃に種々あるも主として舊式モーゼル及び露國のものを用ひ、幹部連は、銃床を附すべく作られたる拳銃を所持し、衣服は區々にして、或に支那人式の衣服を着し、或は普通の衣服を着し、年齢は十六七歳の少年より、五十餘歳とも見ゆる老人あり。

〔第四十七圖〕農家の石臼

その大部は内蒙古人にして、中には、二三の滿人を交へあり。彼は自稱して外蒙軍といふ。）轎車三輛（家族を載せありといふ）、牛車十二輛（主として糧食を積む）及び馬五十餘頭を有せり。

土人の言によれば、彼等は昨日、阿爾科爾泌の兵三百と遭遇し、旗下を掠奪せざるを條件として之と妥協し、昨夜は阿爾科爾泌旗下の「グンビソム」（ホワホッショの南方五里にある廟）に宿し、今晩は「ウンヘノオボ」（東札魯特旗内）に宿するならんと。（下略）

因に、この蒙匪といふのは、外蒙古が獨立した時その軍に加つて内蒙古方面の支那官兵と戰つた一時雇の兵士が、露支協約成立によつて戰亂が治まるとともに職を失ひ、衣食の途に窮した結果、遂

に掠奪を業とするやうになつたものであつて、當時はその總數三千人以上と註せられ、内蒙古一帶その害を受けたのであつたが、近來は殆んどその姿を見なくなつた。

× × ×

× × ×

總て蒙古包地方に於ては、土地著しく乾燥せるとき、砂質にして水の滲透に便なるため、極めて露營に適し、一張の天幕を有する時は、少量の降雨の如きは意とするに足らず。即ち日本内地の如く、雨水の天幕内に侵潤する等の恐れなく、一枚の毛布を敷く時は、蒲團を敷けるよりも心持よし。故に遊牧地方の人民は、夏に至れば蒙古包よりも野天に露營するを好む。

× × ×

× × ×

「タルゲネーラ」を出でて四日間悉く携帶の糧食を使用し來れるを以て、糧食の補充をなさんと欲し、寺僧に請うて麥粉を得たり。一斤價十五錢、比較的廉價なり。その袋を見るに露國「イルターツク」產なり。又その價を拂はんとせしに露貨にあらざれば能はず。露國經濟上の勢力已に

興安嶺西側一帶を壓せるは、驚くべきが如きも、また怪しむに足らざるなり。

× × × × × ×

「ローヘンソム」は又「ロークソム」とも云ふ。東烏球穆泌旗の最北端にある廟にして、住戸二十餘、百人喇嘛あり。此等喇嘛は朝夕二回、廟の廣間に集合して、約一時間讀經するの外、何等の仕事なく遊び居れり。最も下級の喇嘛の一部は掃除、家屋の修理、牧畜その他諸々の雜役に服しつゝあり。

喇嘛讀經の調子は全く我日本の御經の調子と異なる所なく唯其言葉の異なるのみ。故に遠くより蔭にて之を聞く時は、全く日本僧の讀經なるやと疑はしむ。これ喇嘛教は同じく印度佛教より出でたるの故ならんか。唯讀經の際、太鼓を打つと手を動かし踊の如き動作をなすことあるは稍稍異なる所なりとす。

× × × × × ×

「ユクチュルソム」より海拉爾に買出しに赴く二十輛の牛車と相前後して行進す。これらの集團は各々天幕及び水桶を携へ且つ蓋圍を有する小車を携へ、降雨等の際は、この小車内に寢ね、其他は幕營をなし、決して民家に立寄ることなく、晝夜兼行して疲るれば休み、癒ゆれば歩む。而して此等は多く牛羊を驅り、羊は行々これを屠りて食料とし、其他は賣却して必要なる糧食、衣服、日用品等を買つて歸來するなり。

× × × × × ×

愈々深き索倫山中にある索倫人（額魯春人と稱するもの）は、狩獵及剽盜を以て生業とし、居常家を有せず。唯野獸を獵して其肉を喰ひ、其皮を着け（夏冬共裸體の上に毛皮を纏ふ）旅客を見出す時は必ず之を剽掠す。小兒の生るゝ時は、手皮に包み首のみ出して之を樹枝に吊るか、若くは樹木と樹木との間に皮を張り、その上に座せしめ、自己は夏冬共に野外に寢るを普通とす。全く野獸と異らず。然れども、稍々開拓地方（即ち洮南方面）に接せるものは　家屋を有し、夕少の家畜を持ち、或は木材を切りて開拓地に賣るものありといふ。

シベリヤの土人

ブリヤート人の生活

シベリヤに散在してゐる蒙古族の中で最も優勢なものゝ一つに、ブリヤートといふ種族がある。バイカル湖畔のイルクーツクを中心として住み、總數約三十萬人と註せられてゐるが、この種族の生活は一寸變つてゐる。

先づ家屋は通常、何等の裝飾もない極めて粗雜な丸太小屋であつて、家具と云つても別になく、たゞやつと雨露を凌ぎ得るといふだけのものに過ぎない。また、衣服は總て毛皮製である。これは犢か羊の毛皮を特殊の方法によつて極く柔かに鞣して作つたものではあるがもと〳〵お手製であるから格構は餘り立派でない。しかも、これを直接肌につけるのだから、隨分異樣なものである。

この種族は、シベリヤの土人中では最も知識程度の高い部類に屬するのであるが、恐ろしく迷信深い。殊に山の頂を恐れることは非常なもので、如何なる場合にも山の頂を見ると、早速跪いて敬々しくこれを禮拜し、天下泰平、家内安全を祈願するといふ風である。

〔第四十八圖〕ブリヤート人の家

ツングース人

ツングース人は主としてエニセイ河の流域と、北部のツンドラ(沼澤地帶)から、黑龍江へかけた一帶の地に住み總數は約八萬人と云はれてゐる。同じツングース人でも、南方のツングース人は背丈の高い頑健な身體と淡黑い顏の持主であるが、北方のツングース人は反對に背丈が低く、顏の色も餘り黑くない。

何れも極めて暢氣な人好きのいゝ種族で、生涯牛や羊の群とともに靑草を求めて、所謂遊牧生活を送つてゐる。從つて、住家も遊牧者特有の天幕であつて、何時でも自分の思ふところへ運んで行くことができる。

その材料は馴鹿の皮革か、魚の皮である。

彼等が最も好んで食ふのは鹿の肉であるが、熊や海豹の肉も珍重する。たゞパンと鹽だけは全く口にしない。

何分生活が生活であるから、知識程度は極めて低く、前述のブリヤート人などは到底比較にならないくらゐ幼稚である。オロチョンだのネグラだのラムートだのといふ妙な名前の種族はみなこのツーグース族の分派である。

コリヤーク人の天幕と神

アナドイル河からタイゴノスク半島、ベーリング海沿岸に到る沼澤地帶に牧畜と漁業とを生業とするコリヤークといふ半未開の種族がある。この種族も天幕に住んでゐるが、それはツングース人の天幕から見ると遙かに大きく、形も方形でなか〳〵しつかりしたものである。大きいのになると、中が三室にも四室にも仕切られてあつて、すべての點が非常に便利にできてゐる。

衣服は矢張毛皮製であるが、ツングース人のやうにそれを直接身につけるのではなく、柔い薄皮で作つた下着を用ひてゐる。

この種族に屬する者はみな『牧畜の神』と稱する木製の奇妙な形の偶像を天幕内に祀つてゐるが、その祀り方が面白い。卽ち、毎日、家畜（主として馴鹿）を野へ放つと同時に、その御神體を縄で縛つて天幕の支柱へ吊り下げる。そして、家畜が一匹も殘らず無事に歸つて來れば、大變喜んでその縄を解き、頭を二三度撫でてやる。が、もし不幸にして、一頭でも歸つて來ないものができた場合には、『この木像め！』とばかり、太い棒で散々になぐりつける。隨分莫迦莫迦しいが彼等は何も冗談や洒落にやつてゐるのではない。至極大眞面目なのである。

またこの種族には極端な男尊女卑の風があつて、女はまるで男の奴隷か何かのやうに扱はれてゐる。一夫二妻が普通であるが、中には三人も四人もの妻を持つてゐる男もある。無論幾人でも別居するなどといふことは全然なく、すべて同一の天幕内に雜居してゐるのである。これだけでもかなり變つてゐる方であるが、この種族にはも一つ奇拔な風習がある。それは、兄が妻を遺して死んだ場合には、それは當然弟のものとなる、つまり本人の意嚮如何にかゝわらず、弟の妻にされるといふ妙な習慣である。兄の死後その妻を弟が貰ふといふ風習は必ずしも珍らしいことではない。現にわが國でも行はれてゐる。が、それは餘儀ない場合にのみ行はれるのであつて、常

に行はれるわけではない。ところが、コリヤーク人の社會では、如何なる場合にも、兄が死ねばその妻は弟のものとなるのである。無論、一夫多妻を公然と行つてゐる譯のことであるから、その場合、弟が結婚してゐるとかゐないとかいふことは全然問題にならないらしい。

ギリヤーク人とウオグール人

ギリヤーク人は樺太、オコーツク海沿岸、黑龍江流域等に散在してゐるが人口は極めて尠く、全部では六千人そこ〳〵である。そして、その大多數は例の犬橇によつて生活してゐる。即ち、行商をしたり、貨物の運搬をしたりして生計を立てゝゐる者が殆んどその全部であると云つていゝ。

ギリヤーク人のほか、この地方には、ユカギール人、チユワンツ人等がゐるが、何れも極めて少數であり、特色と云つても別にない。

ウオグール人といふのは、トボリスク附近に散在する半未開の土人で、總人口約八千、何れも天幕に住み、狩漁を主生業としてゐる。が、一寸風變りの種族で、『ウオグール』は野蠻人を意味するといふので、わざ〳〵『マンザ』族と自稱してゐる。またこの種族の者は、一切の家具——大は天幕から小は食器類に至るまで、悉く樺の樹の皮を以て作る。

トボリスク附近には、ウオグールの外にオスチヤークといふ種族が二萬五千人ばかりゐるが、これは性質が非常に溫厚だといふだけで、別に面白くもないから省略する。

チユクチヤ人の迷信

東北シベリヤの住民中で最も野蠻なのはチユクチヤ人であらう。この種族は悉ろしく短氣でなか〳〵人と交らない。そして、主として馴鹿を牧する者と、小犬を飼養する者とあつて、小犬を飼養する者は、ずつと北の北氷洋からベーリング海にかけた寒い地方に住んでゐる。文化程度は數千年以來少しも變化した形跡がない。が、食物だけは恐ろしく贅澤なもので、先づ常食物は鹿の肉、御馳走と云へば白熊の肉か鯨の齒身、普通の魚類などは輕蔑して口にしないといつたあんばいである。

この種族は黃教（シヤマン教とも云ふ）を信奉してゐるので、部落の中には『シヤマン』と云つて、わが巫子市子のやうな婆さんや爺さんがあつて、死者の靈を呼び返して話をさせるやうなことをやる。これは一種の自己催眠で、依賴に應じて大きな皮太鼓を緩やかに打ち鳴らしながらくどくどしい呪文を唱へるうち、何時しかうつとりとなつて、死人の靈が憑いてるといふことになるのである。何しろチユクチヤ人は、死者の靈魂は常にその家を保護すると信じてゐるので、

一家に不幸や病氣凶事等の續くときは、その惡魂が悪い神靈と一緒になつて殃をするのだとばかり早速『シャマン』の許へ駆けつける。それだけならば、何れの民族にもあることだからまだいいが、『シャマン』に祈禱して貰つても効驗のない場合には、家族の一人が彼の世へ行つて悪い神の心を和げて來るとて、自ら進んで死の決心する。そして、決心だけではなくて本當に死ぬのである。而かもその方法は自殺でなく他殺――といふとおかしいが、最も近親の者に殺して貰ふのである。

いよ〳〵誰それが死ぬさうなといふ噂が部落内にひろまると、先づ親なり兄弟なりが一應止める。無論、止めても肯かぬ。また止める方も、心から止めるのではなくて、たゞ一種の見榮でさうするのである。だから結局、死ぬといふことになる。さていよ〳〵死ぬることなると、第一に純白の馴鹿を屠つて、その皮で死裝束を作る。それから死體を運ぶため駿足の馴鹿二頭が選ばれる次で殺すための道具が調べられる。死ぬる男はそれらのものを一々檢分した後、最後の酒宴を始める。その酒宴には近親知己一同が列席して名殘を惜み、馴鹿の肉を大きな骨付のまゝ大鍋で煮て、今死なうといふ男までこの世の名殘に鱈腹食ふ。

殺す方法には三種ある。その一は近親の者が當人の四肢を押さへて動かせぬやうにし、最も近親の者が鋭利な鋼で咽喉部か心臓のあたりを刺し貫くといふ方法。

他の一つは槍で殺す方法。この場合には、皮の屏風で三方を圍つて、その屏風に穿けてある唯一の小穴から、最も近親の者が槍を差し込む。すると、死ぬる本人は、その槍を胸なり咽喉なり自分の好きなところへあてがつて『よし』と合圖する。そこで、外なる男は槍に滿身の力を込めて突き徹す。

今一つは、皮の紐で締め殺す方法。これも同じく屏風の兩側に穴を穿けて、長い皮の紐を通し屏風の外で二人の近親者がその兩端を握つてゐる。すると、本人は前の槍の場合と同樣、その紐を自分で首に巻きつけて、『よし』と一聲合圖をする。と、同時に兩端を握つてゐる近親者は紐を力まかせに引張るといふ次第である。

殺してしまふと、死體は橇に載せ、先に選定して置いた馴鹿に曳かせて野邊に送る。死者の裝束は寸斷して死骸とともに燒き捨て、曳いて來た馴鹿は屠つて殉死させる。それで必ず悪靈は退散するものと考へて、大いに安心するのである。實に驚くべき迷信ではないか。

サモイエド人の風習

シベリヤの西北端、オビ灣とカラ海との間に突き出てゐるヤルマン半島にサモイエドといふ種族が住んでゐる。主として馴鹿の飼養と漁業とを生業として、極めて原始的な生活を營んでゐるので、その風習中には隨分變つたことがある。

先づ、この種族の者は、衣服でも、履物でも、裝身具でも、すべて海豹か臘鼠の皮革で作る。頭から足の先まで海獸の皮づくめといふわけである。無論、立派な道具を使つて作るのではなく、たゞ一梃の小刀と針とでする細工であるから、衣服なども體裁は餘りよくないが、とにかく物が物だけに防寒具としては立派なものである。四時、氷を以て閉されてゐる北氷洋岸に、原始的生活を營む彼等の衣服としては、蓋し、最好適のものであらう。

この種族の間にも、極端な男尊女卑の風があつて、女は殆んど人間なみに扱はれない。通常、娘一人が馴鹿三五頭で取引されるといふのだから、如何に女の地位が悲慘なものであるかは、推測するに難くない。

現今では、殆んどみなギリシャ正教の洗禮を受け、同教徒となつてゐるが、それは表面だけのことであつて、内密には依然としてさま〳〵の偶像が崇拜されてゐる。

〔第四十九圖〕サモイエード人と橇

キルギス人の生活

キルギス人の最も多いのは、中央アジヤの大天山高原であるが、シベリヤにも相當流れ込んでゐる。彼等も蒙古人と同樣、馬や羊の群とともに綠草を追うて彼方此方と不斷の移動を續けるので、住宅は矢張り天幕である。それは蒙古包より幾分大型といふだけで、構造は殆んど違はない。

生れ落ちると、から馬や羊とともに暮してゐるのだから、知識程度は全く問題にならないが、家畜の取扱ひ方だけは實にうまいものである。僅か三四歳の童子、しかも男女の別なく馬に乘る術を心得てゐる。誰でも彼でも一寸そこまで往復するにも馬を使ふもし空いた馬がなければ、すぐ棒の先端へ綱の輪索のついた道具を持つて、馬群の中へ驅け込んで行き、適當と思ふ奴の首にその輪索を引つかける。そして、そのまゝ引張つて來て、手早く鞍を置き轡をかけて、

〔第五十圖〕キルギス人の酒宴

ヒラリと飛び乘つて出かけて行く。

蒙古人は隨分貧弱なものを食つてゐるが、同じ遊牧民でもキルギス人はなか〳〵贅澤で、肉でも魚でもごし〳〵食ふ。殊に肉は彼等の主食物と云つていゝ。無論、ミルクも豐富に採れるから、たらふく飲む。飲み切れなければ――と云つて飲み切れるやうなことは先づないが、とにかく殘りは木鉢か皮袋(羊をそつくりそのまゝ丸剝ぎにして造つた大きな袋、通常液體のものを容れるのに用ひる)かに入れて置いて、蒙古人と同樣、バターだの、チーズのやうなものだの、酸つぱい飲料だのを製造する。無論、それらのものは賣るために造るのではない。すべて自分達の食料とするためである。

ダライ・ラマの話

變つた王位繼承法

世界の秘密國といはるゝチベットは、事實上、外界とは殆んど何等の交渉もない別天地である。從つて、その風俗習慣には、隨分奇拔なことが多い。現に名實ともにチベットの主權者たるダライ・ラマにしても、一寸他に類例のない奇妙なものである。

元來、チベット人は非常に熱心な佛教信徒で、自分の國は、佛教の發祥地たるインドに次ぐ神聖な國であり、代々の法王は佛の化身であると固く信じてゐる。されば、如何なることがあつても、法王以外の者は王者と認めない。支那が如何に骨を折つても、イギリスやロシヤが如何に强勢な力を以て臨んでも、遂に思ふやうにならないのは、要するにそれがためである。

かくチベット人の信望を一身に集めてゐるダライ・ラマ、それは宛もローマ法王のやうなものであるが、その位は常に一代限りであつて、子孫に讓る、又は後者をして繼がしむるといふわけ

るといふことを告げて置いて死んだのである。隨分變な話だが、當時のチベット人にとつては眞面目な問題であり、極めて重大なことだつたのである。

ところが、何代目かの法王の時、困つたことが出來た。その何代目かの法王は、不注意にも大

〔第五十一圖〕 チベットのラマ僧

には行かない。何故ならば、ダライラマは佛の化身であるから、たとへ入滅しても、その魂は必ず他の肉體に宿つて降生化現するといふのが、チベット人全體の信仰だからである。

されば以前には、法王は死ぬ前に必ず自分の生れかへつて來る場所や、宿るべき肉體——子供の人相を遺言して置くことになつてゐた。つまり自分の魂は何處のどういふ顔つきの子供に宿

切な遺言をしないで突然あの世へ行つてしまつたのである。全く遺言が無かつたのであるから、その法王の生れ代りのゐる場所がまるでわからない。頭の好い名僧知識達もこれには全く弱らされた。

そこで、その始末はどういふ風に附けられたか、それは知らないが、とにかくそこで〝ある。爾後、後繼者の決定は佛の託宣によることになり、國内に四つの『託宣所』なるものが設けられた。其處には專屬の役僧がゐて、常に護法神を祀り、いざといふ場合には直ちに佛に伺ひを立てそのお告げを聽く、といふわけである。なるほどうまい考案ではあつたが、これにもまた厄介な問題が起つて來た。即ち、四ケ寺が四ケ寺とも揃つて後繼者を授かつてしまつたのである。何れも佛の託宣によつて選み出されたのであるから、どれが眞物だとも僞物だとも云へない。と云つて四人もダライ・ラマにするわけには無論行かない。そうなると、自然四ケ寺の間には競爭が起つて來る。まことに事は面倒、そこで、これでは佛に對しても恐れ多い次第であるといふので今度は四ケ寺の間にある協定が成立した。もし、二人以上の候補者ができた場合には、ある一定期間内、それを等しく『法王子』として育て上げ、その間によくその子供達の性情素質を檢定し

て眞僞の決定を與へやう、もし、こうしても見分けのつかない場合には、仕方がないからそれらの『法王子』を聖都ラッサの宮殿へ集めて、抽籤を行ひ、それによつて合格、不合格を決しやうといふのがその概要であつた。

無論、何時までしても自分の養育してゐる『法王子』が僞物だなぞと思へはしないから、いざこれが眞物か僞物かといふことになると、お互に一歩も讓らない。何でも自分の方の法王子を立てやうとする。從つて話はいつも纏らない。そこで、第一の案は事實上何の役にも立たないので何時しか忘れられてしまひ、たゞ後者——抽籤による法のみが用ひられるやうになつて、遂にそれが一種の不文律となるに至つた。現今でもこの方法が用ひられてゐるらしい。

法王の候補者を抽籤によつて決定する……如何にも神秘的ではないか。宛もお伽噺の玉國のやうである。

いよ〳〵未來の法王が選ばれる日となると、チベット全國の名僧知識が悉く聖都ラサなるダライ・ラマの宮殿へ參集する。式場は宮殿の大廣間、先づ莊嚴な讀誦禮拜が執行され、終ると正面の一段高い座に安置された黃金の甕に幾人かの法王子の名札が收められる。すると當日參會した

〔第五十二圖〕チベットの貴人

僧侶の中で最も有德の譽の高い高僧が進み出て、三拜九拜の後、黃金の箸を以てその甕の中の名札を一枚だけ撮み出す。その箸の先に撮み上げられた名札の主が、未來の主權者ダライ・ラマなのである。

かく云ふと、如何にもダライ・ラマは無價値のものゝやうに思はれるが、いよいよ未來の法王と決定した法王子は、直ちに所屬の寺院へ送ら

れて、爾後成年に達するまで、尠くとも十數年間はみつちり『法王教育』を授けられるのであるから、よほどの低能兒でない限りは、相當有識の僧となり得るのである。

珍らしい葬禮

葬禮もダライ・ラマのそれはちよつと面白い。

先づ佛式の莊嚴な儀式が執行されて、遺骸は茶毘に附せられる。が、それは全身を燒くのではなくて、たゞ下半身だけを燒くのである。上半身はそのまゝすつかり水分をとり去つてミイラにし、漆金で巧みに加工して、法王の在世時代の面影を偲ぶに足るものとする。そして、その胸のあたりには、黃金の寶玉、經文などが嵌め込まれて、立派な等身大の立像に作り上げられる。そして、すつかり完成すると改めて盛大な法會が行はれ、その像はダライ・ラマの宮殿内へ祀られる。ダライ・ラマの宮殿内には、代々の法王のミイラが數十個ならんでゐるとのことである。

チベット人の奇習と迷信

錦繡の着物

チベット人の衣服は、ちやうどわが國の筒袖の着物のやうなものであるが、その材料はなか〳〵贅澤で、大抵絹物か錦繡である。絹物はともかく、錦繡の着物は一寸珍らしい。

しかも男女とも貴金屬や寶石類を身につけることが非常に好きなので、金に不自由のない貴族や富豪は、頭から足の指まで、ところきらはず種々雜多の裝身具をつけてゐる。四十や五十の裝身具をつけたのでは一向目立たないといふのだから恐ろしい、恐らくチベット人は、世界で最も多くの裝身具を用ふる民族の一つであらう。

常食物と無二の好物

常食物は、わが國でいふ麥こがしである。無論それだけでは食べ難くてしかたがない。そこで先づ適量の粉を食器にとつて、それにちよつとお茶をかけたうへ指でよく揑ねて團子のやうにして食べる。お茶といつても綠茶や紅茶とちがつて例の蒙古あたりで用ひられる磚茶であるから、やはり鹽やバターで味がつけてある。從つて、麥こがしを煉るには極めて都合がいゝ。これで煉れば、別に味をつけなくとも結構うまく食べられるといふわけである。

お茶といへば、チベット人くらゐお茶の好きなものはない。何處の家へ行つて見てもお茶だけは絶えず大鍋に一杯作つてある。朝起ると早速これを飲み、仕事にかゝる前に飲み、ちよつと一服といつては飲み、仕事を終れば必ず飲む。食事の際には無論飲む。外へ行く時には先づ第一に土瓶の用意をするといふ風で、絶えずお茶ばかり飲んでゐる。普通、大人は一日に三四升くらゐは飲むらしい。何しろ、お茶を飲まないと元氣が出ないといふのだから面白い。お隣の支那人も隨分お茶好きであるが、チベット人には敵はない。お茶はチベット人の無二の好物である。

チベットの家

チベットの家屋はすべて石造である。建築法は極めて原始的なもので、たゞ方形の厚い石材を積み重ねたといふに過ぎないが、その堅固なことは實に天下無比と云つていゝ。何しろ、先年、支那の軍隊がラサを攻圍した時など僅か三四百メートルの近距離から、七サンチの山砲を以て砲撃したにもかゝはらず、倒壞したる家は一軒もなかつたといふのだから、先づ下手な堡壘よりは餘ほど堅固なわけである。

普通の民家は大抵平家建であるが、寺院や貴族富豪の住宅などには、三層五層といふ大建築も尠くない。ラサなるダライ・ラマの宮殿などは宛も古代ローマの城塞と見紛ふやうな堂々たる大建築である。（挿畫參照）

〔第五十三圖〕ラサの景

しかし、何れにしても、たゞ方形の石を積み重ねたものに過ぎないのであるから、外觀は概して殺風景である。尠くも優美な點は全くないが、屋内にはなか〳〵手がかゝつてゐる。柱といふ柱はみな彫刻か彩色が施されてあり、床はセメントのやうなものでたゝきになつてゐる。氣の利いた家は、そのうへ天井まで彩色されてゐる。

室内には、通常、四方の壁際に沿うて高さ一尺乃至二尺くらゐの壇が設けてあつて、その上には厚さ一尺ばかりの敷物が敷き詰めてある。工面の好い家ではその上に更に美しい絨毯を敷

く。チベット人は男女とも肢座を組むので、椅子はないが、わが國と同樣座布團を用ひてゐる。

かく室内の設備はなか〳〵いゝのであるが、一般に衛生的觀念がなく、拭き掃除はもとより、食器の洗滌すらも滅多にしないといふ有樣なので、不潔なこと夥しい。

何しろラサのやうな大都會の住宅でも、完全な便所を備へたものは極めて稀だといふのであるから、一般の不潔さは推測するに難くない。

奇拔な敬禮

チベットでも普通の敬禮はわが國のそれと同樣、たゞ上半身を屈めるだけであるが、特に先方を尊敬する場合には、實に奇拔な敬禮をやる。先づうや〳〵しくお辭儀をした後、できるだけ大きな口をして、によきりと舌を出す。一言も口を利かないでたゞお辭儀をして舌を出すだけなのである。わが國であつたら早速、横面を張り飛ばされるにちがひない。だが、チベットではそれが最敬禮なのである。

〔第五十四圖〕 チベットの敬禮

どうしてそんな眞似をやるのか、確かなことはわからないが、或消息通の說では、チベット人は一般に目下の者から目上の者へ言葉をかけるのは非常に失禮なこととだ考へてゐる。そこで、道で、行き逢つても、目下のものはたゞ頭を下げるだけで、口を利かないのであるが、たゞ黙つて頭を下げたゞけでは、啞と間違へられないとも限らない、といふので特に自分は啞ではないがあなたを尊敬して口を利かないのである、といふことを表示するために、舌を出して見せるのださうである。黙つてお辭儀をして舌を出す、とは隨分奇拔な最敬禮ではないか。

亂雜なる男女關係

チベット人も概して早婚で、普通男子は十七八歲、女子は十四五歲で結婚するが、男女關係の亂れてゐることは實に想像以上で、國内に處女なしといふ人さへもある。

殊に中流以下の階級には、兄弟間に同一の女を共有するといふ驚くべき蠻風が

ある。尤もこれは同腹の兄弟で、同一の家に住んでゐる場合に限られてゐるが、とにかく弟の嫁が兄の妻ともなり、兄の嫁が弟の妻ともなる、といふのだから呆れたものである。シベリヤの土人や南洋の未開人の中には、隨分男女關係の亂れたものがあるが、それでも同腹の兄弟の間で一人の女を共有するなどといふ極端な例は見當らない。

鳥葬

チベットの葬禮には、鳥葬といふ亂暴な方法がある。これは蒙古の野葬と同一形式の變習——死骸を山野に放置するか又は木の枝に懸けるかして、鳥獸の餌にするといふ野蠻な風習であるが、チベットには亢竄の一種に屬する性質の極めて荒い野鳥が非常に多いので、死體が木に懸けられる（チベットでは多くの場合、死骸は木に懸ける）や否や、何處からともなく群り集つて來て、忽ちのうちにすつかり片附けてしまふ。文字通り鳥が葬るわけであるが、折々は鳥の集り方が悪くて何か死骸の一部が殘ることがある。すると、チベット人は、これはまだ成佛しない證據であるといふので、わざ〳〵それを鳥のよく集まる場所へ持つて行つて、もし、大きな骨でもついてゐれば、それを叩き壞すなり何なりして、さあ食つてくれとばかり、岩の上などに置いて來る。念の入つたものである。

奇拔な迷信

極めて單純な頭の持主が多いので、隨分突飛な迷信が行はれてゐる。殊に宇宙の奇異な諸現象に對する彼等の解釋は面白い。例へば日蝕か月蝕か〻生じた場合チベット人はそれを魔神の仕業だと解釋する。そこで、そのまゝにして置けば、日月は魔神に奪はれて、世界は暗黑界となり、人類は滅亡するであらう、よろしく、魔神を退散せしむべし、といふので、至るところに大祈禱會を開いて、一心不亂に悪靈退散を祈願する。血氣の若者は、手に手に先祖傳來の飛道具を引擔いで山の頂へ登り、盛んに太陽や月の黑點を目蒐けて射る。日蝕でも月蝕でもさう長い間續くものではないから、さうしてゐるうちに黑點は見えなくなる。そこで一同、やうやく魔神の奴、斷念して消え失せた、といふやうなことで、はじめて蘇生の思ひをする……といつたあんばいである。

霰、雹、雷、この三つもまた魔神の所爲だと、チベット人は考へてゐるが、これには飛道具はさつぱり物の役に立たないから、專ら祈禱によつて治めるよりほかはない。そこで、チベット政府には、それらの災害を未然に防ぐための祈禱と魔術とを行ふ役が設けてある。

餘り旱天が續いて作物が育たないと云へば、直ちに祈禱を捧げて雨雲を呼ぶ。雨が多過ぎて國

〔第五十五圖〕若きチベット人

ると云へば、忽ち十字を切つてウームとばかり雨を封じてしまふ、といふまことに重寶な役人である。

しかし、如何に神變不可思議なる魔術を心得てゐたところで、さういつも〳〵注文通りに雨雲が現はれたり、引込んだり

するものでない。三度に一度くらゐはごうにもならない場合が起つて來る。が、いよ〳〵魔術師の力で解決できなくなつたら大變である。政府は、早速布告を發して肉食を嚴禁する。肉食は穢れた行爲だ、かゝる行爲を公許して置くのは、佛を喜ばす所以でないといふ考からである。

〔第五十六圖〕チベット人の新葬

それで功驗があればいゝが若し無かつた場合には、今度は旅行を禁止する。無暗に外を出歩いたりなどしないで謹慎してゐるべきだといふところからであるらしい。

まづざつとさういふ風で、彼等が宇宙の奇異な諸現象を怖れることは實に想像以上である。何しろ、國民の大多數は全く無學文盲なのであるから、少數の進歩した人達がいくら骨折つて迷信打破に努めても、一向その効果がないのである。だが、雷や霰を怖れて大騒ぎするところは、なか〳〵無邪氣でいゝではないか。

チベットのお祭

かういふ呑氣な國で佛教の凝りかたまりばかり住んでゐるのであるから、祭典儀式の類は殆んど無數に行はれ、中には隨分變つたものもある。が、チベットのお祭として最も著名なのは、聖都ラサに於て擧行されるモンラムの大祭である。

これは毎年正月四日から同二十四日までの二十日間に亙つて行はれる全國的の大新禱會であつて、チベットの諸年中行事中最も重要なものである。

この期間内は、さしも不潔なラサの町も隅から隅まで清潔にされ、表通には諸種の飾り附けさへなされて、全く面目を一新する。全國の僧侶、竝びに熱心な信徒はこの盛典に列するため、陸續として集まつて來る。その數は毎年六七萬人に上るといふことである。かくて、ラサの町は宛然一大宗教大會の會場といつた趣を呈する。

祭典は、一高僧の司會の下に行はれ、その司會者は祭典期間中、ラサ全市のあらゆる統治機關を支配する。大臣高官と雖もそれに干渉することを許されない。いはゞ宗教的戒嚴令の下に執行せらるゝのである。

かくて、その期間中は、日々ダライ・ラマの宮殿内の大會堂に於て盛んな新禱會が催されるの

〔第五十七圖〕チベットの黒人

であるが、第十五日目には、貴族、大官、富豪等から奉納したくさぐさの供物を、美しい草花で飾り立てゝ、市中目拔の大通へ陳列する。そして、先づダライ・ラマの觀覽に供した後、一般の人々へ拜觀をさし許す。過去十四日間、特別の新禱が行はるゝ週間として停止されてゐた歌舞音曲もこの日から再び公許されるので、市中は始めてお祭氣分に滿たされる。

結願の日には、朝早く、法王殿内の廣場に於て、最後の大新禱會が行はれる。全國から集つた數萬の僧侶（毎年二萬を下らないといふ）それに倍する敬虔な信徒が集ふのであるから、さしも廣い會場もすつかり人で埋まつて身動きもできないほどになる。無論、この新禱會にはダライ・ラマも臨席する。文字通り全國的の大新禱會である。

新禱會が終ると、直ちに郊外の野に於て盛んな運動競技會が催される。これはちやうど大昔の

ギリシャにあつたといふオリンピヤの大競技會を思はせるものであつて、この日此處で優勝することは非常な名譽とされてゐる。されば、われこそと思ふものは、百里二百里の途も遠しとせず續々ラサへ上つて來る。

競技は、競走、武藝試合、相撲、競馬等で、その日所定のプログラムがすつかり終了するまでは、幾日でも會合は繼續する。その日だけで濟むことは殆んどなく、大抵二日乃至三日に亘ることのである。とにかく相當盛んなものであるらしい。

シャムとアンナム

シャム人の服飾

シャムは暑い國である。殆んど一年中夏のやうな氣候で、寒い時といふものが全くない。從つて、人々の服裝はあくまで夏向きにできてゐる。如何にも輕快であり、涼しさうである。

先づ通常、男は幅三尺、長さ三丈ばかりの布を腰部にぐる〳〵巻きにして、ちよつと結糀の洋服といつた形の丈の短い上著を著る。上衣も、腰布も、地質は絹、色合は白のほかに赤、青、黄等の單色が最も喜ばれる。金のある者や酒落者は長い靴下を穿き、靴を使用するが、普通は何處へ行くにも跣足である。

女の服裝も男のそれと殆んど違はないが、たゞ、上著の代りに美しい色合の肩掛を用ひるものが多いやうに見受けられる。

女の風俗で一寸珍らしく感ずるのは、頭髪を始度男の頭のやうに短くしてゐるものが非常に多いことである。オカツパくらゐの程度なら、女の斷髪も今日では一向珍らしくはないが、シャムの女の斷髪は、そんな未練がましいものではない。殆んど

〔第五十八圖〕シャムの婦人子

男の頃と區別のないくらゐ痛快に短いのである。しかも、それが流行でも何でもなくずつと古い時代からの風習なのだから面白い。

シガーと檳榔子の實

シャム人はわれ〳〵と同樣、米を主食してゐるが、暑いからでもあらう副食物としては何ものよりもカレーを珍重する。年中、カレーとバナナは彼等の食卓につきものである。そして、概して二食だから、朝餐は七時頃、夕食は五時頃に認める。

男女とも非常に煙草好きで、殊にシガーのやうな強烈なものを好むやうである。この國には餘りい〻煙草はできないので、お隣りのビルマやフイリッピンのマニラあたりから年々隨分巨額の煙草が輸入されてゐる。

煙草とともにシャム人の代表的嗜好物と稱せらるゝのは、例の檳榔子の實である。餘ほどうまいものと見え、シャム人は大抵これを朝から晩まで口に入れてゐる。外出の時などには、方二三寸の綺麗な小箱に一杯つめてもつて行く。恰度、關西の婦人が劇場などへ蒔繪か何かの菓子箱を持つて行くのと同一樣であるが、お菓子と違つて、檳榔子の實は、いやになるほど噛まなければうまくないのださうで、しかも噛んでゐると歯がまるで鐵漿を附けたやうになる。シャム人が男女とも眞黑な歯をしてゐるのは、この檳榔子の實を盛んに噛むからである。どういふ成分を持つてゐるものか、それは知らないが、さにかく身體には別に害を與へないらしい。

シャムの家

都會には近來大分西洋風又は支那風の建物が多くなつたやうである。が一般の人々はまだ大抵在來のお粗末な家に住んでゐる。

シャム固有の家屋は、氣候の關係上、通風よりも熱氣の隔絶に重きを置かれてゐるので、軒廂が莫迦に長くて窓は極めて淋い。それで用材は通常チーク、壁は板張り、屋根は芭蕉の葉で葺くといふ次第だから、實用的かも知れないが餘り立派な建築さは申し難い。

また、河川や沼澤に沿ふ家屋は、水害を避けるため、床下がちやうどわが國の神社の本殿のやうに、四尺乃至六尺くらゐあげてある。湖河の河畔などには、河岸から水上へ一二間も突き出た宛も浮御堂のやうな家屋も少くない。

シャム人の元服式

シャムでは、一般に子供が生れると、早速その頭髪を、前額部にたゞ一箇所小判型の切髪を殘して、すつかり剃り落すのが通例であるが、男兒は更に十二三歳の時、元服の式なるものを擧げて、その切髪をも剃り落してしまふ。眞の坊主頭となるのである。

この元服の式は、シャム人にとつては極めて重大な儀式であるから、隨分大袈裟なことが行はれる。先づ通例、最初に日の吉凶を占つて貰ひ、いよ〳〵大吉の日といふのが定まると、親類緣者知己朋友のすべてに通狀を送つてその案内をする。

かくて、いよ〳〵定めの期になると、先づ最初の日には婆羅門僧の惡魔拂ひの式、次の日には剃髪式、三日目には祝宴といふ順序で執行されるのであるが、その第二日目の剃髪式といふのがちよつと面白い。

元服式を擧げる子供の頭を丸めてやるのは、通常、村の和尚の役であるが、時には會衆中の最も有力な人、村で云へば村長などがその代理を務める場合もある。剃ると云つたところで、頭髪はほんの値かしか殘つてゐないのだから造作ない。

きれいな青坊主になると、その子供は、白い袍を著て一段高い壇の上に坐り、神妙に具多羅葉を捧げてゐる。すると、會衆一同は、各自右手に火のともつた蠟燭を一本づつ持つてその子供の周圍をうや〳〵しく五度まで廻り、終ると一齊にその火を吹き消して、立ち上る煙を子供の坊主頭へ吹きつける。その場合、もし煙が坊主頭の周圍を回れば、その子供は將來必ず幸福な生活を送れるといふので一同歡び合ふ。

至極茶氣滿な元服式だが、何しろ三日間も數十人乃至數百人のお客にできるだけの御馳走をするのだからなか〳〵容易でない。富者はいざ知らず、一般の人々には到底そんな贅澤な眞似をする餘裕はない。そこで近來、普通の家庭ではこの儀式を自家で行はないで、お寺で擧げるやうになつて來た。日比谷大神宮の結婚式と同樣、一定の料金だけで濟むから都合がいゝといふわけなのである。

元服式に剃り落した頭髪は、短いのだけ芭蕉の葉で作つた小舟にのせて河川へ流し、長いのはいよ〳〵成人してプラバート山なる釋尊の遺趾へ參詣する時、自分で持參して、その寺で使ふ卷の材料にして貰ふ。かくすれば佛の加護を受けることができると信じてゐるかちである。

元服式を終ると、シャムの子供達は誰でも先づ二三年のうちに、三ケ月乃至一ケ年間に亘る托鉢旅行をやる。それをやつて來なければ極楽へ行くことができないといふ信念からであるが、また一には、それを濟ませないうちはいくら元服式を擧げても社會から一人前の人間として扱はれないからでもある。

托鉢旅行

この托鉢旅行には、また身分の高下を問はず誰でも一樣に黄色の衣をつけ、一錢の金子も持たないで出掛けるのが不文律のやうになつてゐる。幾日間でも貰ひ物で生活して來るわけであるがシャムの親達は誰でも自分の子供を同樣にして旅へ出すのであるから、旅の情に對しては能ふ限り親切にする。されば、旅なれぬ子供達も大抵無事にその行をなし遂げて歸るのである。

托鉢旅行をなし遂げて歸れば、もはや立派に社會の一員として待遇される。そこで、大抵歸るとすぐ結婚する。結婚年齢は先づ普通男子は十六七歳、女子は十四五歳である。——正式の結婚は、男子は十六歳、女子は十三歳から許される。

〔第五十九圖〕 アヤナムの寺

どういふわけか、シャムでは身分の高い人の遺骸ほど長い間葬らないで保存して置く。先づ上流社會の者ならば、少くも一箇月くらゐは葬らない。どうかすると二年も三年も甕か何かに入れて保存することがある。

シャムの葬禮

葬禮は佛式であるから大體に於てわが國のそれと違はないが、たゞ一つシャムには妙なことがある。埋葬の當日、佛を慰めるためと稱して、芝居、音樂、花火などといふ葬禮とは最も配合の惡い催を、まるでお祝ひでもあるかのやうに、いと賑々しく擧行する風習である。無論、それは誰の葬式にも必ず行はれるわけではなく、上流の貴族や富豪の葬祭時に限られてゐるけれども、佛教國の葬禮としては隨分珍らしいものに屬する。

女が働いて男を喰はせる國

アンナムにもまたいろ〳〵變つた風習がある。例へば、夫婦の關係にしても、わが國のそれとは全く反對で、亭主よりも女房の方が權勢を持つてゐる。所謂、嚊天下であるが。嚊天下と云つても西洋の女尊男卑とはまたその趣が異つてゐる。西洋で女が尊ばれ、男が卑められるのは、何も女性の智力や體力が男性のそれに優つてゐるからでもなければ、女性の方が男性よりも多くの仕事をするからでもない。こいつて神が女性を男性よりも尊いものだと定めて置いたわけでもない。つまり、女が男よりも本質的に優れてゐて尊重されるのではなくて、たゞ、何の理由もなく威張る、また威張らせるのである。尤も威張らせる方の側に云はせれば、社會的の制裁が怖ろしいから仕方がないとか何とか、大いに理由があるのかも知れないが、それももとからあつたものではない。無暗矢鱈と妙な男氣を出して、自分達が作り上げたものなのである。

〔第六十圖〕 アンナムの許嫁

ところが、アンナムの女尊男卑には、歴とした理由がある。アンナムの女は威張るだけの理由又

は價値を持つてゐる。彼等は殆んどみな夫に養はれてゐるのではなくて、あべこべに夫を養つてゐる。商賣でも農作でも主として女房がやり、卒主は朝から煙草ばかり吸つてゐるのである。わが國でも男の數よりも女の數の方が多い八丈島あたりへ行くと、これによく似た風習があつて、男は漁に、それも偶に出る以外には殆んど何もしない。荒天にでもなれば、幾日でもごろ〳〵麻そべつてゐる。仕方がないから、女は磯へ行つて貝類や海草を採取したり、畑を作つたり、他の土地でならば當然男のやるべき仕事であらうところの劇しい戸外勞働を一手に引受けてやる。といふ風で事實上、男以上の働きをしてゐるが、それでも、まだ八丈島の男はアンナムの男ほどなまけものではない。無論、アンナムの男でも、十人が十人すべてみな女房に養はれてゐるやうな意氣地なしではないが、概して柔弱であり怠惰である。

アンナムにしろ、カンボヂヤにしろ、或はトンキンにしろラオスにしろ、所謂フランス領インドシナと稱する國々からは、現在殆んど何等の物資をも生産しない。しかのみならず、食料すらも自給自足できないで、毎年巨額の米穀を支那やシャムから輸入してゐる。これだけの材料と、大ざつぱな地圖とを根據としてフランス領インドシナなる土地を判斷すれば、先づ人の住めさうな土地だとは思へない。多分山ばかりで農業の發達する餘地のない土地に違ひないと考へるが普通であらう。現に自分なども、先年同地方の風物に親しく接するまでは、さう考へてゐた。

然るに事實はまるで反對なのである。

即ち、フランス領インドシナの諸國は、ラオス一國を除くのほか、何れも坦々たる大陸的の平野に富んでゐて、農作のできない土地は極く僅かにすぎない。例へば、サイゴンからカンボヂヤの古蹟アンコールへは道程百五十里ばかり、自動車でまる二日もかゝるけれどもその間に、山と云へば京都

第六十一圖　インドシナの田圃

の吉田山ぐらゐの低い丘陵が、あちらこちらに三四ヶ所あるだけで、他はいちめんメイコン河の沖積層とも見るべき曠野である。また同じくサイゴンからアンナムの首府ユエを經てトンキンに到る四百三十餘里、自動車で尠くも六日はかゝる長程の間にも、山らしい山は殆んどないと云つていゝ。

この大平原を開拓したならば、恐らくインドシナ全土の食料問題は即座に解決するであらう。たゞ、この地方は熱帶圏内にあるので、一年の季候が降雨期と、旱魃期の二期に分れ、十月から翌年の四月までは旱魃期で、雨が少しも降らない。從つて農作地とするには、どうしても灌漑竝びに排水の設備をしなければならないといふ障害があるが、前述したカンボチャの平原などは、四時水量豐富なメーコン河が貫流してゐるのであるから、これを利用すれば大なる困難はない。土壤は非常に肥沃であり、氣溫は年中九十度前後を保つてゐるのであるから、水さへあれば年中耕作ができるわけである。たゞ、水路を作るかポンプのやうなものを使ふかして排水灌漑さへよくすればそれで、米でも麥でも野菜でも果物でも、放りつ放しでできる肥沃な田圃が數十萬町歩或は數百萬町歩も得らるゝことが明らかなのである。

〔第六十二圖〕 インドシナのアヒルの飼ひ

然るにインドシナの百姓は、そんなことは考へない。否、全く考へないわけではないであらうが、實行しやうとは絶對的にしない。

精々井戸水を汲んで菸草か綿を耕作することくらゐが關の山、それも主として女がやり、男は多くの場合のらりくらりと遊び暮し、ゐるのである、產業が興らないのも無理はない、思ふにフランス領インドシナ諸國が永く亡國の悲しみを味はゝなければならない最大の原因は、男子が餘りに柔弱であり怠惰であるがためではあるまいか。

パルマ人の生活

服裝

パルマ人の服裝はちよつとシャム人のそれに似て、頗る快適な感じのするものである。男子は通例幅一尺長さ三四尺くらゐの絹の布（色は白、桃色、淡黄なども の無地が多い）を頭部に卷きつけてゐる。上衣は寛濶な短裝で、色あひは矢張白や淡黄や桃色などの無地が多く、縞ものや霜降りのやうなものは極く稀にしか用ゐられない。

下衣はローンギと呼ぶ一枚の幅の廣い布で、これはちやうど腰卷のやうに腰へ卷きつけるのであるが、幅が廣いから下腹部から足の踝のところまで達する。上衣も下衣も上等のものになるとみな絹である。

女子の上衣は男子のそれとちがつて身體にしつくりと合ふやうにできてゐる。ちよつとワイシャツの前を切り離したといつた形のものであるが、丈は男子のそれと同樣短く、通常漸く腰に達

するくらゐしかない。下衣（ローンジャ）は男子のそれと殆んど同一であるが、たゞ男子のローンギが身體の前部に於てその布の端をはさみとめるのに反し、女子のそれは身體の左横側でとめる、そしてその布は無地のものよりも種々の優美な模樣の入つたものが多く用ひられるなどの相違がある。また女子は頭部に布を卷くことはしないが、頭髪は極めて念入りに、宛も低いトルコ帽を戴いたやうな形に、高く卷き上げてゐる。盛裝の場合には、それに造花や金（又は銀）モールや香の高い蘭の花などを飾り、頸には數多の珠玉

〔第六十三圖〕パルマの上流婦人

をつらねるのが普通である。なほ、額のはへぎはを角張つた形に剃り上げてゐるのは、ちようど支那の婦人に似てゐる。

化粧料としては、一種の香水の粉末――タナカといふ薄黄色の粉で極めて薫の高いもの――を植物性の油を化粧下として用ゐる。概してバルマ婦人の容子には支那の婦人を思はせる點が多いが、佛教の影響を受けてか、どことなく佛様臭いやうな感じがある。しかし、お隣りのシャムの婦人の散髪で、袴布の一端を前から兩脚の間にくゞらせて、後の腰の上にとめてゐるのから見れば遙かに優美である。

盛装して容儀を正したバルマ婦人は、その溫雅優美な點では蓋しあまり類の多いものではなからうと思ふ。

男女とも下層社會の者は特別の場合以外徒跣であるが、やゝ身分のある者は、獸皮を以て作つた雪駄のやうなものを穿いてゐる。

穿き方は日本人と違はない。

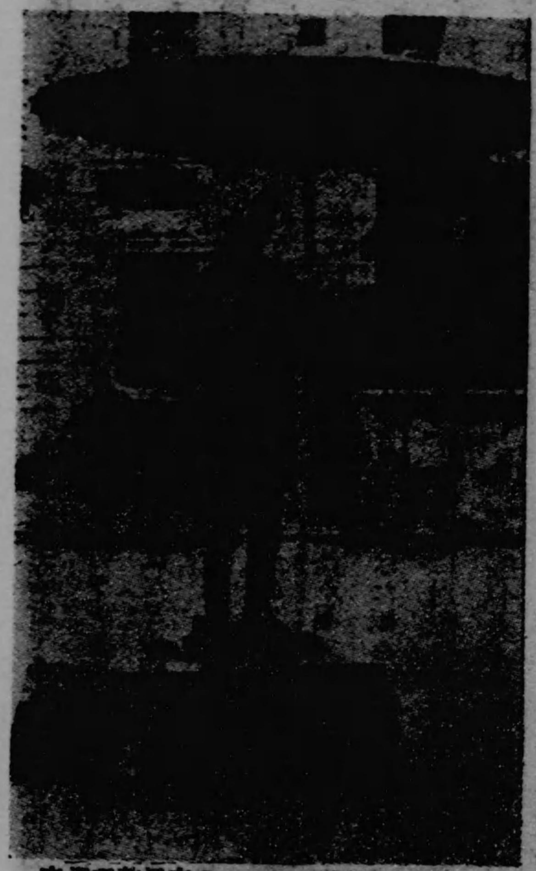
飲食物と嗜好品

バルマ人はシャム人と同じく、朝夕一回づゝの二食主義者である。主食物は、有名なラングーン米――俗に南京米といふのは大抵このラングーン米である――の産地であるから無論米で、われ〳〵同樣野菜魚類果實などの類を副食物として食ゐる。が、獸肉は宗教關係から餘り用ゐない。魚類は主として鯉、鮒、蝦等の川魚であるが、珍らしいものとしては、五尺もある鯰のやうな形の魚などがある。國内に比較的大河が多いので魚類は何處へ行つても豐富で、値段も極めて廉い。汽車の停車場で賣つてゐる弁當は通常、飯を芭蕉の葉に盛つて、その上にカレー料理のやうなものをかけた極めて簡單なものであるが、こんな田舍へ行つても弁當を賣つてゐるくらゐの驛では大抵別に川魚の燒物や天ぷらを賣りに來る。殊にイラワヂ河に近い驛では同河でとれる四五寸もある川蝦の天ぷらなどといふ尤物を僅か拾錢か拾五錢で求められる。

バルマ人は一般に酒は餘り用ゐない。婚禮とか何かのお祝ひとかいふ場合には多少用ゐるが、平素家庭では殆んど飲まないと云つていゝ。思ふにこれも佛教の影響であらう。しかし、煙草は彼等の大好物で、男はもとより女も盛んに喫煙する。紙巻も葉巻も相當いゝものが自分の國で出

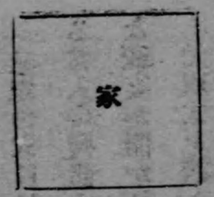
來るから、お隣りのシャムのやうに輸入品を用ゐなくても濟むが、この國の煙草は一般に强烈でちよつと妙な臭ひがあるから、喫ひなれない者には餘りありがたくない。煙草といへばこの國には隨分大變な煙草がある。それは殊に婦人が好んで用ゐる葉卷であるが、驚くべしその長さは約八寸、直徑は約八分もある煙草の葉ばかりでなく、何かほかの原料も卷き込んであるらしいがとにかくその大ものを一見溫和に見えるバルマ婦人が悠然としてふかしながら歩いゐるさまはちよつと奇拔である。

バルマ人もシャム人やマレー人と同樣例の檳榔子（ビンガ）の實を盛んに嚙む。檳榔子の實の白い肉に石灰の練り汁と特殊の香料とを加へて、蒟醬（キンマ）の青葉に包んで用ゐるのであるが、これを嚙んでゐるとやがてそれが朱色に變化して、口中は勿論唇までも眞赤に染る。彼等はこれを嚙みながら、こころ嫌はず血のやうな唾を吐き散らす。はたから見ると餘り氣持のいゝものではない。そして、これを嚙むと一種の臭氣を發するからなほたまらない。が、これも煙草と同じく一種の刺戟劑だから一旦その味を覺えるとなか〳〵癖しにくいものらしい。



〔第六十四圖〕バルマの交通整理巡査

古來バルマでは貴族以外の者の住宅は平家に限られてゐた。二階建、三階造りなどといふ高層の建物に一般民が住まふことは法度だつたのである。そして、それと同時に朱塗りとか金色塗りとかいふ特別な裝飾を施すことも許されなかつた。



しかもバルマ人は佛寺堂塔の建立などに金を出すのを惜まないとともに、一般にその日暮しで、勤儉貯蓄の念が薄い、從つて貧乏なものが多い。されば彼等の住宅は大抵木材竹材、樹葉などで造つた掘立小屋式の茅屋である。屋内の設備なども殆んど見るべきものはなく家財道具も極めてお粗末なものである。

寺小屋式教育と僧院生活

バルマでは、男の子は八歳か九歳になると、みなその土地の寺院へ通つて、僧侶から寺小屋式の教育を受ける。寺小屋はすべて無月謝で、教科書のやうなものも餘り使はないから、どんな貧しい家庭の子供でも通學するに困難はない。かくて十三四歳になると、お隣りのシャムの子供達と同樣、元服の式を擧げる。

元服の式には土地によつていろ〳〵變つた習慣があるが、一般に共通の風習は、その式を擧げる當人の臀部に動物の形や文字などを黥することである。無論、何處に於てもその當日には盛んな祝宴が開かれる。

元服式を濟ますと、矢張寺院へ入つて、黃袍を着け剃髮して僧侶生活をする。その期間は通例一箇月乃至四箇月であるが、中には一箇年くらゐ續ける者もあり、そのまゝ生涯僧侶として佛に仕へる者も尠くない。期間が長いほど世間から尊敬を受けることは無論である。

バルマの僧侶の生活は、東の空が白らむとともに起きて、先づ第一に讀經をすまして直ちに寺院内の掃除にとり掛り、それが終ると佛前に花卉を供へる。そして彼等の主要日課であるところの托鉢に出掛けるのである。バルマでも僧侶に階級の別は無論あるが、しかし、わが國のそれのやうにさま〳〵の色の袍法衣を着るといふことはない。僧侶の衣は一律に黃褐色のものである。僧侶の婦人に對する態度は極めて嚴格なもので、托鉢に出ても、婦人の手から直接に喜捨を受けることは決してしない。喜捨物は主として米その他の食物である。シャム人もさうであるが、バルマ人も托鉢僧に對しては極めて慇懃な態度をとり、喜捨する米穀なども特に精選したものを用ゐる。が、僧侶は喜捨物が托鉢に一杯になると、路傍へ棄てゝ乞食の拾つたり、禽獸の喰ふのに任せるのが通例である。托鉢は

〔第六十五圖〕バルマの高僧

僧侶自身の衣食の費を得るためではなく、たゞ信者の報謝の念の喚起を目的とするものだからである。

托鉢から歸ると簡單な朝食を喫し、それからお盡までは、讀經勤行のほか、通學の兒童に教授したり、彼等同志相互に教儀を談じたりなどして過す。正午少し前になると、彼等は第二回目の食事をとる。僧侶も一般の人々と同樣二食であるから、この第二回目の食事をすませて後は、決して固形物を口にしない。午後はパリ語の經典を讀誦したりする。夕刻になると一同本堂へ集合して、讀經したり、高僧の說教を聽いたりして、夜は早く寢に就く。かくして彼等の一日は終るのである。

女の子の元服禮

女の子はみな十二三歲になると耳朶に孔をあける。これは一種の元服の禮を意味するものであるといふことである。その當日にはその女の子の親は親類緣者を招いて、宗教的儀式のうちに、專門の針師をして手術せしめるのであるが、何しろ麻醉藥も何も用ゐないで、いきなり針(これは黃金に限られてゐるやうである)を突き徹して孔をあけるのだから、女の子は苦痛に堪へかねて泣き叫ぶが、その傍に在る婦人達はしつかりと身動きのできないやうに彼女の身體を押へて無理矢理に手術を受けさせる。かくて孔があくと、それに黃金、白銀乃至錫などの細い輪を通す。それが終ると盛んな祝宴が催される。

その後も、その女の子の兩親は時々その耳輪を動かして孔の癒着を防止すると同時にその孔を次第に大きくする。かくて二三週間もすると傷口は癒えて立派な孔ができるから、もはや放置しても差支へない。無論さうなれば相當大型の輪をはめても別に苦痛は感じないから、中には隨分太い輪や、念の入つたのはそれに寶石を細い鎖で接屬させた耳飾りなどをつけるものもある。

極端な動物愛護の風

バルマ人は熱心な佛教徒であるから、殺生を忌むことは非常である。例へば蚊や蚤が眼の前で自分の血を吸つてゐても、彼等はたゞ追ひ拂ふかそつと捕へて捨てるくらゐなもので、たゞきつぶしたり、ひねり殺したりするやうなことは決してない。そのくらゐであるから、烏でも獸物でも極端に愛護する。從つてバルマには野烏が非常に多い。ラングーンのやうな大都會の市內目ぬきの場所でも所謂インド烏——わが國の普通の烏よりも小形で、頸部に少々茶褐色の羽毛あるもの——が、街路樹の上にまで集を構へて、人車絡繹たる街路上を縱橫無盡に飛び廻つてゐる。時には人通りの烈しい街路上におり

て人の棄てた食物をあさつてゐることもある。無論隨分惡いことをするのだが、バルマ人はこれを殺生しないばかりでなく、常に食物の殘りを投げ與へなどして愛護してゐる。數年前、同市の當局者が餘りひどいので市内及び附近の樹上の烏の巣をたゝき落して、その卵や雛を退治しやうと企てたことがあつたが、バルマ人インド人市民の大反對を蒙つて遂に實行し得ないで終つた。

野犬も非常に多い。列車が田舍の驛などへ着くと、何處からともなく數十匹の野犬が列車の窓下へ集つて來て旅客の投げ與へる食物を奪ひ合つて、物凄い噛み合ひをやり始める。從つて恐水病の害を受ける者が非常に多いので、州政府は一九一五年からラングーンにパスチューア氏療法研究所を創めて、銳意狂水病の豫防竝びに治療に盡してゐる。

熱烈な信仰

シャム人も隨分熱心な佛教信者であるが、バルマ人は一層である。彼等は佛教に熱心であるといふよりも、むしろ之に心醉してゐると云つた方が適切かも知れない。現世に於て善行を積むことが多ければ、必ず來世に幸福を得らるるものと確信してゐるので、貧しい者でも好んで寺に寄進したり、僧侶に米その他のものを喜捨したりする。寺院堂塔の建立や公共的又は慈善的事業を行ふのも、みなかゝる宗教的信念からなのである。

マンダレー市の郊外なるマンダレー・ヒルといふ丘の上に立派な寺院が最近建立された。この寺院はバルマ人善男善女の寄附金約六十萬ルピーによつてできたものである。しかも、その金は建築材料の費用に充てられたのであつて、建立に要した一切の勞力は、彼等が別に無報酬で提供したのである。彼等の多くは貧しい百姓に過ぎない財産もなければ收入も決して多くない。やうやくその日その日を送つてゐるくらゐのものである。が、それでも一旦佛教のためとなれば、彼等はなけなしの財産をはたいて了つて少しも悔いないのみならず、却つて自己の善行に大なる滿足を感ずるのである。

イギリス當局は、バルマ人佛教の信仰に對しては、で

〔第六十六圖〕バルマン人高僧が崇敬する圖

きる限りの保護を加へてゐるのみならず、進んで奬勵を加へてゐる。民族の自覺に基く種々の運動は、最近の世界の何處にも行き亙つてゐる。バルマにもかゝる風潮は無論生じてゐる。が、一般民衆がかくの如く佛教に凝り固つてゐる限り、先づイギリスのためには天下泰平である。植民地經營に多年の經驗を積んで來たイギリス人がそれに氣附かぬ筈がない。さてこそ保護し奬勵するといふことゝなつたのである。

娯樂

バルマ人は一般にプエと稱する一種の舞踊劇を第一の娯樂としてゐる。彼等の生活に於ける萬般の佳儀や行事には、餘興として必ずこのプエがつく。青年男女は好んでこれを演ずる。

プエの脚本の筋は、多く佛教や古英雄の故事に關するもので、簡單な衣裳や歌詞にもその意味が現はされてゐるのだとのことである。プエを細別すると四種類になるが、就中左の二つが主なるものである。

一つはエイン・プエと稱せらるゝもので、これは〝いはゞプエの正劇といつた樣。太鼓、竹琴銅鑼その他の樂器によつて奏せらるゝバルマ音樂に合せて、大勢の男女俳優がともに舞ふ。現今では主として大きい祭典や歡迎會などの場合に演ぜられる。

他の一つはザット・プエといつてやゝ道化じみた所作事で、月夜の野外で行はれることが多い。その夜は多數の老若男女が集つて、有頂天になつて見物する。ちよつとわが田舍の盆踊りのやうな趣きがある。

マライ人

マライの文化

マライ人の起原に關してはまだ確かなことは判つてゐないが、とにかく純血の種族ではないらしい。多くの專門學者の說は、矢張りネグリト（南洋の黑人）とモンゴロイドとの混血が土臺で、それにインド人やアラビヤ人の血がある割合で混つたものであらうといふことに一致してゐる。

現在殘存してゐる原始民族――人類進化の始めからこの地にゐた特殊の民族と認められてゐるのは、フイリツピンのネグリト卽ちアエタ人、南スマトラのクブ人、セレベス中部のトラブ人、

オランダ領ニューギニヤ中央山脈に於けるタピロ人、ペセゲム人、ウタカ人などである。この中でウタカ人とクブ人は身長一五五センチ・メートル、ネグリトとタピロ人は一五五センチ・メートル以下しかない。そして、これらの民族の中の一つはネグリト型を代表するもので、頭髪は卷き縮れ、鼻は平たく、足は身長の割に長い。これに反して、クブ、ガジョ、ブラ、トアラなどの諸民族は、鼻筋も徹つてゐるし、頭髪も線狀か波狀かで縮れてはゐない。

また最初にこの地方へ移住して來た民族——南アジヤから渡來したもの——で今日まで異人種の血を混へないでゐるものは、北スマトラのバダク人、中部ボルネオのダヤク人、中部セレベスのトラジヤ人、ブギズ人、モルツカ諸島のアルフラ人などで、これらの民族は總括してインドネルシヤ人と稱し、原マライ人として後に來たマライの移住民と區別する。

インドネシヤ人の次に來た移住民の後裔は、ジヤバのジヤバ人、スンダ人、マヅラ及びジヤバのマヅラ人、スマトラのアチン人などで、これらの民族は何れもインド、アラビヤ、支那、ビルマ、その他のアジヤ人種の血が多分に交つてゐるものである。

歴史的に最後、卽ち第三番目に移住して來た民族の子孫は、現在主として諸島の海邊に住み、商業、航海等に從事し、低地マレイ語卽ち通俗マレイ語を用ゐてゐるもの、卽ち代表的のマライ人である。

民族と職業

マライの諸民族の中には規則正しく農業を營んでゐるものもあるが、半浮浪的のものも尠くない。從つて文化の程度は民族によつて著しい相違がある。ジヤバ島のジヤバ人、スンダ人、マヅラ人、バリ島のバリ人、スマトラ島のガジュ人、アチン人、バタク人、メナガバウ人、パレンバン人などは一定の土地に定住して農業を主生業としてゐるが、ボルネオ島のダヤク人、中部セレベスのトラジア人、モルツカ人などは半浮浪的の生活をしてゐて、森林の間の土地を燒畑にして、一二度收獲をすると又もや他に新らしい土地を探し出して移つて行くといふ風である。

またニューギニアのパプア人や、スマトラ、ボルネオなどに散在するある民族などは、人類發達の初期に於けるが如き、極めて原始的な漁獵生活を營んでゐる。群島東部のマカツサル人、ブギス人、マヅラ島のマヅラ人などは主として漁業や航海業に從事してゐる。

マライの文化と異民族の影響

マライ人はその文化の過程に於て、或は肉體的にインドから最も著しい影響を受けて來た。血統に於けるが如く、精神的及び物質的の文明に於ても、即ち宗教、藝術、住居などに至るまで、すべてインドの色彩を帶びてゐないものはない。

バラモン教はインド人とともに西暦紀元に入るや否やこの地方に流れ込んだ。次いで佛教が渡來して非常に盛大となつた。スマトラ、ジャバ、バリなどに立派な寺院を建立した。ジャバ中部のボログドルなどはその最も著名なものである。マホメット教が侵入して以來、佛教はその壓迫に堪へず次第に衰へて、遂に沒落してしまつたが、深く人心に浸潤したバラモン教は、今日でもなほ特殊の形となつてバリ島その他幾多の地に殘存してゐる。

マホメット教徒が侵入したのは第十三世紀以來のことであるが、彼等の傳へたマホメット教は土人文化の發達に甚大な貢獻をした。されば文化程度の低い土人の間には今なほ古い迷信に囚はれてゐる者もあるが、少し文化の進んだ土人は殆んどみなそれに歸依してしまつた。現在約四千萬人のマライ人はマホメット教を信奉してゐるのである。

インド人、アラビヤ人の影響を受けた以外に、その他の東洋人、殊に支那人の影響を受けてゐる。第十三世紀に於て、忽必烈はその勢力をジャバにまで及ぼした。オランダ人が渡來し出してからも、彼等が小さい商業に餘り頓著しなかつたため、またその本國政府の植民經濟政策が土人を對象としたものではなかつたため、土人と最も密接な交渉を保つて來たのは支那人であつた。牧畜者、農民、大工、小賣商人、召使……とあらゆる方面の職業に從事して、大正十年には在留支那人數は八十萬と註せられ、その中には數億圓の巨富を致した者すらもある。

〔第六十七圖〕マライの女

日本人も世界大戰以來政治上に又經濟上に少なからざる影響を及ぼすやうになつた。が、まだ在留者數は五千にも足らぬ少數であり、その歷史も新らしいので、土人の文化に對しては格別の影響を與へてゐない。

マライ文化の特色

マライの文化は精神的のものも、物質的のものも頗る多方面に渉つてゐて、オランダ人がこの地に根據を得る前に、ジヤバ、スマトラ、南ボルネオ、バリ等に於ては、既に或程度まで發達を遂げてゐた。他諸島に於ては、半未開的なところもあるにはあつたが、概して各方面とも一樣に確實な發達をして來た。全く未開のまゝ過ぎたといふのは、たゞ隔離せる內地の民族や南スマトラ、中央セレベス、セラム及びニューギニヤの原マライ人のみであつて、全體から見れば極く少數である。以下項を逐うてその實情を研究して見やう。

家屋

家屋は民族によつてそれ〴〵多少の差異特色があるが、概して平家建でその周圍には必ず椰子や芭蕉や其他の果樹を植ゑるのが通例である。そして、それは棟一つの百姓家然たるものが普通であるが、中には棟が二つも三つもになつてゐて宛も奧殿や拜殿のある相當の神社のやうな觀を呈してゐるものも尠くない。スマトラ島に於て特にさうである。

用材はすべて丸太か竹で、釘のやうなものは全然使はない。籐や蔓で結ぶのである。屋根は傾いた切妻か方形（ホウゲウ）或は入母屋（イリモヤ）であつて、普通アタップといふ椰子の葉のやうな強い木の葉で葺く。壁もこのアタップか竹で編むのが通例であるが、中には板を張るものもある。マダガスカルより南太平洋一帶に亙つて、即ちマライ人の擴がつて行つた區域を通じて到るところに見らるゝこの種の家屋は、外觀に於てはわが國の舊來の家屋と相似た點が多い。

床は土地の狀況と種族とによつて、高いのもあれば、低いのもある。また杙の上に建てるところもある。杙の上に建てるのは無論野獸や野獸に等しい人間の侵入に備へるため、また大雨や河湖沼などの氾濫の際に浸水の厄を免れんがためであるが、平穩無事の日には、そのために空氣の流通がよく、地面の熱氣を避くるためにもか都合いゝといふ利益がある。床の材料は竹か板で、セレベス島あたりでは殆んどみな竹である。

屋內は通例二部屋か三部屋に分れてゐるが、窓は概して少ない。全くない家もある。さういふ家內は光線は壁の隙間から這入つて來るだけであるから、屋內は日中でも薄暗い。棟一の小さい家になると一室しかないので、必要があれば幕を下げて區切にする。床には大抵蓆を敷く。起居、寢食、すべてその上でやる。

服裝

マライ人の服裝といへば、先づサロンを擧げなければならない。

男子は腰部から下、女子は乳のあたりから下を幅三尺、長さ六尺くらゐもある腰卷樣の布帛で包んでゐる。この腰卷樣の布帛が卽ちサロンである。

但し、ジャバ人のサロンは西洋婦人のスカートのやうに行縢に縫つてある——地質は主としてサラサでバルチック細工といふ方法で動物や植物の模樣を附したものが多い。田舍では男女ともこのサロン一つで暮してゐるものが珍らしくないが、正式の服裝としては、そのほかに、筒袖樣の上着を著る。

〔第六十八圖〕マライの貴人

そして、男子ならば頭に幅約二尺、長さ一丈以上もある更紗を卷く。又女子ならば美しい色の薄絹又は更紗を被る。

履物は革草履に類したものを用ゐる者もあるが、中流以下の者は男女とも大概跣足で何處へでも行く。

また男子、特に舊士族のものは、腰にクリスといふ一種の短刀を帶びてゐる（これについては後に詳述する）。比較的外國人と接觸する機會の多い開港場や大都會の中流以上の人々には洋裝してゐる者が非常に多い。

また女子の服裝もそれらの土地では餘ほど變つてゐる。が、それは純粹のマライの服裝とは云へないから此處には記さない。

飲食物

飲食物は概して粗惡である。大多數のマライ人の常食はいふまでもなく、米であるが、地方によると、玉蜀黍、タピオカ、サゴ等を常食としてゐるものもあり、それらのものと米とを雜ぜて用ゐるやうなところもある。

副食物としては、先づ椰子の實、バナナ、マンゴといつたこの地方特產の果實類と魚類とが最も多く用ゐられる。尤も魚類と云つても生魚を得ることは、海岸に住む者以外には事實上不可能故、大抵乾魚か鹽魚である。無論、野菜や肉類も食ふ。そして、暑いためか刺戟の烈しい香料類——例へば唐辛子とか胡椒とか、又はカレーといつたやうなものを好む。就中、唐辛子は彼等の最も喜ぶもので、煮物には必ずこれをこて〳〵と投り込む。子供でも二本や三本は漬物でも食べるやうな態度で食べて仕舞ふ。

食卓や御膳のやうなものは使用しない。たゞ一枚の蓆を敷いて、飯笊と副食物を盛つた器とをその中央に置き、家族一同その周圍に蹲坐して食べるのである。食器は都會附近では普通の西洋皿などを使つてゐるが、田舍では大抵芭蕉の葉を用ゐる。そして、飯でもお菜でもすべて手摑みで水も水入の口からちかに飲む。

マンディ

マライ人は氣候の關係にもよるのであらうが、とにかく非常に水浴を好む。朝夕の二回は必ずやり、その間にも水邊へ行けば何時でも早速飛び込んで一泳ぎする。水の清濁などは擇ぶところでない。水浴はマライ語ではマンディといふ。

中流以上の家庭では毎日少くとも朝夕の二回室内で水を浴びる。これもマンディの一種である。オランダ人その他の外國人もこの土地に住むにはこれをやる必要があると考へるとみえ、みな眞似をして行つてゐる。從つてホテルには必ずマンディの設備がある。中には溫浴がなくてマンディだけといふのも尠くない。普通、小さい稍々深い四角な水槽から汲み取つて浴びるのであるが、日本人の中にはいきなり飛び込んで失策を演ずるものもあるといふ。

長くこの地方に在留した經驗のある人の話によれば、溫浴を取るとかへつて感冒に犯される恐れがあるといふ。

またマンディは朝夕の二回、なるべくならば就寢前にも一回取るがいゝ一日に六回くらゐまでは絕對的に害がない、とのことである。

ワヤン

マライ人の工藝文化の中で最も注意すべきものゝ一つはワヤン即ち陰影人形である。

水牛の皮を打ち拔いて、特殊の人物や奇怪な動物に似たやうなものゝ形を作り、金粉を塗るか又は彩色をして、水牛の角を支柱としたものであるが、その奇怪な形といひ彩色といひなか〳〵面白くできてゐる。わが操り人形は殆んど世界のどの地方にも類のない、全く特殊のもので、しかも、今では僅かに大阪の文樂座にその面影を止めてゐるだけであるが、ジャバのワヤンは、或はわが操り人形の根源ではあるまいかと論ずる學者が少くない。

しかし、現在ではジャバに於ても非常に衰へて、わが操り人形と同じやうな運命に陷つてゐる。なほワヤンの模造品は在留邦人の手によつて作られ、安價なものになると、水牛の皮の代りに木を用ゐ、支柱も同じく木で作つてゐる。が、これは無論ジャバの工藝品としての趣味もないし、價値もないものである。

面

ワヤンとともにマライ藝術の粹をよく現はしてゐるものは面であらう。

これには人物の面もあるが、また奇怪な半獸半人のやうなものもある。何れも極めて古雅で、わが國の昔のものや、支那のそれに比すべきものがある。

果して面として眞に價値のあるものかどうかわれ〳〵門外漢には判らないが、一見したところ、如何にも古雅にできてゐて、直感的にわが國の古い面と何等かの因緣があるやうにも思はれるのである。

〔第六十九圖〕ワヤンの面

マライ民族の中に、護身用として一種の短い刀を帶びてゐるものゝあることは前に記したが、これはクリスといふものであつて、ジャバ島では、舊王族やその家來の者は今でもこれを腰に下げてゐる。

クリス

クリスにはいろ〳〵の形式があるが、大體に於て劍のやうな形のものが多い。中には反のあるものや、波のやうにうねつたものもある。何れもその刀身には一種特別の模樣がついてゐる。鍔の附いてゐるのは極く稀で、例へあつてもそれは極めて小さなものに限られてゐる。が、刀身が柄に接するところで廣くなつてゐて全體の形は細長い三角形をなし、それによつて柄を握つた場合に、その手なり指なりを保護するやうな仕組になつてゐる。柄は眞直なのもあるけれども、大抵は曲つてゐる。そして、その表面は木で作り、精密な彫刻を施した上、金(又は銀)線を卷くとか、寶石を塡めるとかしてあるが通例である。その彫刻の中には動物の頭を彫りつけたものもあれば、人の半身像を刻んだものもあり、一見したところでは何が何だか分らぬやうなものもあるが、最も多いのは動物の頭のやうである。かゝるクリスは柄の曲り加減によつてその人の身分を表はしてゐる。即ち眞直なのは王族であつて、階級が下になるほど曲りはひどくなつてゐる。鞘もまた木製で、一面に殊の彫刻を特施し、金銀珠玉を塡充してある。矢張その裝飾と意匠の程度によつて階級の識別ができる。また中には、特別な原料を用ゐて塗つたのもある。

以前には、刀師、柄師、鞘師といふやうにそれ〴〵分業になつてゐて、みな社會上特殊な地位と階級とを有し、王族その他の貴族に召抱へられて相當羽振を利かしてゐたものであるが、今日では一般の職人と何等區別のないものとなつてしまつた。そして、在留外國人——例へば日本人などが安價な模造品を作り始めたので、今日のクリスは分業制度の下に一々叮嚀に精巧に作られたものとは餘ほど趣の違つたものとなつてゐる。

クリスの形が一種特別のものであることは前にも述べた通りであるが、刀身が大體に於て劍のやうな形になつてゐるのは、突くための便宜によつたものである。また短かくできてゐるのは、主として護身用として使用するためにほかならない。攻擊的に出る場合には、强烈な毒を塗つて毒劍とするのであるから、殊さら刀身を長くする必要もないのである。反りがつけてあるのは、敵を突いた場合に拔き取るのが便利なためであり、刀身が波のやうにうねり曲つてゐるのは、傷口を廣くするためである。

マライ人は、クリスの刀身にある白い波理(すじ)のなるべく多いのを選ぶ。白いすじがあらはれるのは刀の材料とする金屬が普通の鐵でなくてニッケルを含んだものだからであると云はれてゐる。即ち、すべて刀身の鍛へ上つた後には、砒素とレモンの汁とを加へた特別の混合液に浸すため、鐵の部分は腐蝕して黒くなり、ニッケルの部分が白く殘る……といふのである。しかし、まだクリスの化學的成分は明らかにされてゐない。

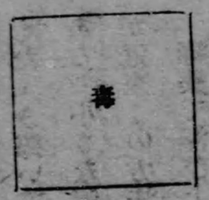
また實物の性質から見ても、この說が正しいとは思はれない。が、これについては面白い傳說があるからそれを簡單に記すことにしやう。

ジャバ人の傳ふるところによると、クリスの地金として最上の金屬は、スラカルタ王城内に保存されてあるところの隕鐵——即ち天から降つて來た鐵で、これには百分中約五くらゐのニッケルが含まれてゐるとのことである。又セレベス島から產出する鐵鑛の中には、幾分かニッケルが含まれてゐるといはれる。が、何れも信じ難い。

天降鐵の傳說には少しも云ひ足さなければならないことがある。それは、最も盛んであつたある王朝の時、ある地方で二つの村の境となつてゐた山の頂上に一箇の大きな天降鐵が見えた。そこで二つの村の人々は互に天降鐵を自分の方へ取らうとして、盛んにその下を掘つた。すると、天降鐵は多く掘つた方の村へ轉り込んだので、遂にその村のものとなつた。それが後にスラカルタの王城へ運ばれて保存せられるやうになつた……といふことである。

クリスの根本的性質、即ち細長い三角形をなしてゐることや、白いすじがあつて地が薄黑いことは共通であるが、その他の性質は、できた時代により、また地方によつて非常な差異がある。

要するにクリスは、形、製作の方法、傳說、地方によるその種類、時代によるその發達など、日本刀に於けると同樣にまだ大いに研究すべき餘地がある。



マライ人は漁獵をはじめいろ〳〵のことに毒藥を使用する。が、毒藥といつても彼等の使用するは精製したものではない。草根木皮又は生物などから自分自身で採取して用ゐてゐるのである。

ツウバといふ樹がある。マライ半島ではいたるところに生育し、その根が市場で賣られてゐる。栽培してゐるところもある。この樹の樹皮と根には激烈な毒があるので、土人はこれを用ゐて魚をとる。その方法は海と河によつて違ふ。海で獲る時には、まづ根をくだいて

暫未とする。そしてそれを粘土に混じて小さな團子を作り、魚のゐさうな場所に撒くのである。食つた魚は浮上つて來るから海面を見張つてゐて拾ひ上げる。河川で使用する時は、根を棒でよくたゝき碎いて水に混ぜる。石灰を加へて白乳白にすることもある。その液を川上から流すのである。小さな河であつたら殆んど一尾ものこらず浮き上る。眞に徹底的に捕獵ができるのであるが近來この方法で魚を捕へることは法度となつてゐる。

毒藥で浮び上らせた魚といふことちよつと氣味が惡いが、この毒で獲つた魚は食つても大丈夫、あたるやうなことはない。ツウバは近來わが國にも輸入されて、農場に於ける驅蟲劑として用ゐられてゐる。

またユーバスといふ樹がある。マライ語ではボコ・イボと呼ぶが、この樹の新鮮な樹液は猛烈な毒性を持つてゐる。殊に皮下注射にすると効力が強い。腸麻痺を起すので、往々急死する。そこで、マライ人はこれを毒矢の材料として珍重する。オランダ東インド會社の醫師フエルシュ氏の記事によると、二十人の死刑囚に命じてユーバスの毒を山に採らせにやつたところが、ただの二人しか歸つて來なかつた。そして、生還した者の話によると、ユーバスの樹の下には死人の骨が累々として、横たはつてゐて、近くの山々にはその毒氣のために一本の草木もなくまた一匹の鳥獸も生息しない……このことであるが、これはいさゝか話が大きいやうに思はれる。

アカル・イボといふフジウツギ科の植物からも毒矢の材料が採れる。マライの蠻族ヂヤクン、ネグリト等は吹矢の毒矢を作るに主としてこのアカル・イボを使用する。またクパヤンの種子からも强烈な毒がとれる。これは毒矢に使ふばかりでなく魚獲用にも用ゐる。

マライ半島のある地方では、ブグダ或ひはブタブタと呼ぶニシキサウ科の常綠樹の樹液を酒泥棒の豫防に用ゐてゐる。この樹液には强烈な毒性があつて、極く少量飲んでもちやうどコレラのやうな苦痛を受ける。

まだいろ〳〵あるが植物はこのくらゐにして次に生物から採る毒を二三記して見やう。

マライ半島には三十四種以上の毒蛇がゐるが、そのうちで毒藥採取に用ゐられるのは、黑色の「コブラ」と綠色の蛇だけで、他のものは餘り利用されない。反つて百足やひき蛙の方が珍重される。百足は種々の毒藥の中に調合する。ひき蛙の毒は——皮膚線から分泌する白色或は淡黃色の液——ルンガスだのピンヂヤイだのといふ樹液と、瓢簞の表面にある鱗狀の物質とを加へてよく